



大阪・八尾の都市創造性

■ 編集

岡野 浩 / 大阪市立大学 都市研究プラザ 教授 副所長
西辻 豊 / やお文化協会 理事長

大阪・八尾の都市創造性
市民知による文化実践分析と文化編集

***Urban Creativity in City of Yao, Osaka:
Networking Analysis on the Citizen's Wisdom and Cultural Editing Framework***

(編集)

岡野 浩・西辻 豊

(執筆)

片岡 英逸 小林 俊王 坂上 弘子 澤田 参子 志賀山勢州 新福 泰雅
高垣 匡往 西辻 豊 西野 民夫 棚橋 利光 浜田 澄子 松井 幸一
松江 信一 山下 彬 渡瀬 弘美 岡野 浩

(編集協力)

やお文化協会

(表紙デザイン)

河村 立司

目次 Contents

はじめに Introduction 岡野 浩	4
第 I 部 都市創造性の基盤：八尾の市民知を通して Platform of Urban Creativity	
第 1 章 都市・八尾の歴史 棚橋利光	9
(① ヒト・モノと創造性) Persons/Things and Creativity	
第 2 章 野村徳七と大阪：文化とビジネス 西辻 豊	20
第 3 章 八尾地域の人国記 松江信一	22
第 4 章 美男に在す八尾地蔵：八尾でオペラを創造する 志賀山勢州	27
第 5 章 西村市郎右衛門と講念仏踊り 坂上弘子	31
第 6 章 ブータンの農業指導に捧げたダショー西岡京治 西辻 豊	34
(② 知と創造性) Wisdom and Creativity	
第 7 章 八尾の教育基盤を築いた環山楼 坂上弘子	37
第 8 章 八尾の郷土食を保存・革新する 澤田参子	40
第 9 章 小学校教育の新たな可能性：久宝寺小学校の試み 小林俊王	46
第 10 章 河内木綿を栽培・研究したひと、その復活・研究に努力したひと 棚橋利光	52
(③ 場・みちと創造性) Space, Roads and Creativity	
第 11 章 高安と能楽 坂上弘子	59
第 12 章 河内国の大和川付け替えの大変革 棚橋利光	62
第 13 章 久宝寺寺内町のまちづくり 高垣匡往	65
第 14 章 八尾の市・お逮夜市の伝統 棚橋利光	68
(④ 集り・交流と創造性) Associating, Interacting and Creativity	
第 15 章 講念仏踊り：地域の取り組みについて 山下 彬	71
第 16 章 八老劇団：高齢者の生きがいがづくり 浜田澄子	73
第 17 章 市民活動としての高安城を探る会：発足から発見まで 棚橋利光	76
第 18 章 やお文化協会 西野民夫	80
第 19 章 郷土誌『河内どんこう』の発行 棚橋利光	83
第 20 章 八尾の市民活動の動き：文化・日常生活を創出する 新福泰雅	87
第 21 章 久宝寺の記憶 渡瀬弘美	90
第 II 部 都市創造性の展開：インターラクティングと創造性 Developing Urban Creativity	
第 22 章 流し節正調河内音頭考 片岡英逸	93
第 23 章 河内音頭について 松井幸一	95
第 24 章 八尾の創造性について 棚橋利光	98

第 25 章	八尾の食の移り変わりと創造性	澤田参子	100
第 26 章	都市のリズム・即興性・定型性:都市創造性の源泉	岡野 浩	106
第 27 章	郷土史のすすめ	棚橋利光	120
おわりに	Postscript	西辻 豊	121
筆者紹介	Contributors		

口絵 1 : 丹羽桃溪(1776)『河内国細見小図』(出版者:浪華書肆・河内屋喜兵衛・塩屋平助、所蔵:八尾市立図書館)。

口絵 2 : 大和棟茅葺き屋根・切妻造りの「與兵衛桃林堂 板倉家住宅」(和菓子店)。この建造物は 1999 年に国の登録有形文化財に登録され、河内音頭・落語・河内木綿などの文化活動が行われている。辻合喜代太郎氏による河内木綿展は 1974 年から 1992 年まで 16 回に亘って開かれた(本書 52 頁)。

口絵 3 : 八尾の自然と食 (掩体壕と稲 赤米の稲穂など、撮影:澤田参子氏 第8章および第25章を参照)

大阪市立大学・都市研究プラザ¹が主導して2012年に設立した都市創造性学会（AUC）（設立総会：パリ政治学院）の第2回大会(2013年5月31日および6月1日：ロンドン大学)において、UNESCO副事務局長補のフランチェスコ・バンダリン氏(Francesco Bandarin)は、UNESCO創造都市ネットワークの7つのカテゴリーである「文学」・「映画」・「音楽」・「工芸」・「デザイン」・「メディアアート」・「食」の分類について触れ、現在見直しの議論を行っていることを紹介するとともに、先進国と開発途上国の都市間でさらなる交流が必要であること、そして、「都市の創造性」と「世界遺産」との密接な関連性を獲得すべきことを強調した²。

本書は、こうした文化政策の世界レベルにおける状況をベースとして、河内・八尾にスポットライトを当て、「市民知」による創造的な空間づくりの類型を示し、文化的な地域間の交流の在り様を示すことを意図している。すなわち、都市における様々なアクター（行為する者・物）のネットワークのあり方が、いかにして「市民知」を創造する「場」として重要な役割を果たすことに繋がるのか、また「市民知」を生み出すメカニズムやそれを促進するための政策やサポートのあり方、(海外を含めた)他の地域との連携（ネットワーキング）の在り様、などについて考えたい。

具体的には、都市の創造性、とりわけ文化の創造性と持続性に関連するものとして個々人の「記憶」を取り上げ、その記憶を呼び覚まさせるものとしてヒトが歩んできた、多様な「道」（海の道、川、街道、そして精神的「道」）を遡上にあげたい。ヒトとモノ、コトとを結び付け、「記憶」を蓄積したり除去したり埋めたりする「複合物」として（海の道、空の道とともに）「文化の道」として位置づけ、重要なアクターと捉えたいのである。なお、ここでいう「市民知」とは「市民による実践知」として捉え、「市民が持っている実践・理論の相互浸透から長い年月をかけて形成された知」と定義づける。

本書の構成については、まず第I部で、八尾の方々にこれまで見聞きした「実践」、そしてこうした過去の「実践」やそれを見聞きした「記憶」、自らが行ってきた「実践」を述べていただき、様々なヒトやモノ、コトに関するテキストを「ヒト・モノの創造性」「知と創造性」「場・みちと創造性」「集り・交流と創造性」の4つのカテゴリーに分類する。

第II部では、八尾の創造性についての理論的・歴史的考察を行い、文頭で述べたUNESCO創造都市ネットワークの7つのカテゴリーを統合する新たな枠組みの可能性を示し、都市の創造性の源泉は、こうした市民の方々の日々の活動とそれを集約し、発信するための「世界の人々に開かれた」オープンスペースと様々な「道」を理解する能力であることを主張する。また、そうした有形・無形の文化財を維持し、発展させ、ヒトやモノを総体として尊重する感性が重要であり、文化を社会が編集することに対する認識が求められる。

本レポートシリーズの作成の提案に賛同し、執筆いただいた方々にまずお礼を申し上げたい。とりわけ、私が示した素案を吟味しながら執筆者との調整にご尽力いただいた、共編者の「やお文化協会」理事長・西辻豊氏に

¹ 大阪市立大学・都市研究プラザは、2007年から2012年にわたり、文部科学省から「都市問題」に関するG-COE(Global Center of Excellence)拠点に選定され、「大阪から21世紀都市の再創造：文化創造と社会包摂」というテーマで研究を行ってきた。筆者に与えられた役割としては次の三点であった。(1) 第4ユニット「国際プロモーション」の責任者として、主に、国際ジャーナル『都市・文化・社会』(City, Culture and Society, CCS, オランダ Elsevier 社)を立ち上げることで1～3ユニット(都市・文化創造・社会包摂)の研究を国際的に認知されるようにすること。(2) CCSを基礎とする国際ネットワーク学術組織「国際都市創造性学会」(Association for Urban Creativity, AUC)を設立し、運営すること。(3)G-COE推進者として「都市戦略論」のグローバルな事例を研究し、その成果を社会的に還元することである。

² 都市創造性についてのバンダリン氏の見解は、氏と共同で編集した、国際ジャーナル City, Culture and Society の第2巻第3号(UNESCO 特集号)の編集後記や、第3巻第4号からバンダリン氏と共同で立ち上げた Urban Creativity Forum の巻頭言を参照されたい。

感謝したい。また、同協会が編集する『河内どんこう』編集長の棚橋利光氏、様々な事務作業とともに、この研究活動全体をサポートいただいた、やお文化協会・渡瀬弘美さんに謝意を表したい。

八尾市の写真を提供いただいた八尾市の市政情報課、貴重な資料や助言をいただいた文化財、土木、情報公開室、八尾市立図書館、久宝寺まちづくりセンターの方々、前住職 片岡英逸氏による玉稿（22章）をご提供いただいた常光寺住職 片岡英俊氏に感謝したい。八尾在住の画家・河村立司氏には素晴らしいカバー画をお描きいただいた。與兵衛桃林堂の板倉亮子氏からは「口絵2」のための美しい写真を頂いた。その他、本プロジェクトにご支援を賜った方々にお礼を申し上げたい。

八尾において連綿と続いてきたコト、それらの実現を支え保持してきたヒト、媒介環となり、結果として生み出されたモノ、道（物理的な道と精神的な道）の分析が本レポートシリーズによって説得的になされているかは読者の判断に委ねたい。

都市の創造性は、その都市に住んできたあるいは現在住んでいる人々だけで維持できるものではない。都市を訪れ、関わり、当該都市のことを他の都市に伝えた人々などとともに、何にもまして自然の役割が重要である。本書・第I部にみられる八尾の事例を通して、さらに口絵に示した古地図を通して、山と川、道の背後にある、見えない様々なアクター（ヒト・モノ・コト・道）の関係性・ネットワーキングを感じ取っていただければ幸いである。

第 I 部

都市創造性の基盤

八尾の市民知を通して

Platform of Urban Creativity: Through Wisdom by Yao Citizens



久宝寺小学校生と地元の方々

Mutual Learning among local people and students of Kyuhoji Elementary School

第 1 章

都市・八尾の歴史

History of Yao City

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. 八尾は河内の国中

現在の近鉄八尾駅を中心とした八尾市本町、北本町、東本町、南本町の辺りが昔から八尾と云われてきたところである。旧村の名前でいうと、おおよそのところ、本町が(八尾)寺内村、北本町が西郷村、東本町が東郷村、木戸村、南本町が庄之内村、成法寺村、今井村、別宮村、八尾座村にあたる。西郷村、東郷村、木戸村以下が八尾八カ村、長八尾、八尾庄等と云われる。寺内村は慶長 11 年にできた村で、これらの地域が現在の八尾市の中核となっているところである(『大阪府地名大辞典』、『大阪府の地名』)。

まず、八尾は河内の国中、中心であったことから説明してみよう。河内国、河内という地域は縄文時代の海面上昇(縄文海進)で上町台地の先端から海水が入り、河内湾となり、その後、淀川水系、大和川水系の諸河川が流れ込み、土砂を運び、それが堆積した平野が広がっていった。それにより河内湾は河内潟、そして河内湖となり、縮小していった(梶山・市原 1972)。

この時代、八尾は大和川の諸河川が河内潟に出るところに位置していた。大阪湾から河内潟に入ると、多くの港津があったことと思われる。神武東征の時の白肩津、盾津等が有名である。八尾市域では昭和 58 年 9 月、中央環状線・近畿道建設時の発掘で、神武町交差点のすぐ南の久宝寺南遺跡から準構造船が出土したことが有名である。この船は外洋から瀬戸内海を航海できる船で、八尾の地は 4 世紀という早い時期から中国や朝鮮半島諸国へ通じていたところである。八尾から大和川を遡れば大和へ通じるので、大和に政権ができた時から東アジアに通じる入り口であった。今年 7 月の新聞報道によれば、八尾市内にある弥生時代の拠点集落である亀井遺跡から計量計りの分銅の石が出土していて、最先端の中国などの文化が渡来人ともに、ここ八尾に入っていたことが判明したという。

なお、上町台地の西の難波の海には、難波津のほかに住

吉津(墨江之津)があった。『日本書紀』の雄略天皇 14 年、5 世紀代後半に呉国使が住吉津に來り、^{たなすえのてひと}手末才伎の漢織呉織及び衣縫兄媛弟媛らを献上したことが見える。この時、呉客のための道を作り、住吉津から^{しほつみち}磯齒津路へ通じ、呉坂といったとある。呉使などはこの道で大和へ行ったのであるが、磯齒津路は住吉からまっすぐ東に向かい、大和川に達し、川伝いの道で大和へ入ったと思われる。その大和川を横切るとそこが恩智神社のあるところで、恩智神社は外国からの使節の安全を祈る神社でもあった。この恩智神社も八尾市の式内の大社である。

また『日本書紀』によると、敏達天皇の 12 年(583)、百済の動きを警戒した天皇は百済在住の倭の人日羅を召喚し、百済への外交策を聞いた。彼を留めおいたところが現在の八尾市南木の本辺りという。この辺りは次の用明天皇の薨去後に蘇我・物部戦争の戦場になったところで、物部氏の本拠地でもあった。物部氏は九州や海外に出ることが多かった軍事氏族であったことから、八尾は海外へ出る拠点であったと考えられる。そこを物部氏が支配していたのである。外交上の機能は、この後上町台地の難波、筑紫大宰府へ移っていく。河内、なかでも中河内、具体的には八尾が河内の中心地であることがわかっていただけたかと思う。

八尾市の高安山麓には、5 世紀中頃の前方後円墳である心合寺山古墳がある。前期古墳の向山、西山、花岡山古墳(消滅)があり、中期の心合寺山古墳、後期の巨石横穴式石室墳である愛宕塚があり、おそらく古墳時代を通じて、この地に君臨していた豪族がいたことを思わせる。心合寺山古墳は全長 160 メートル、3 段築成で、南河内の天皇陵を除けば、北、中河内では一番大きな前方後円墳である。天皇陵は大和政権の天皇陵であるので、河内在地の最大の豪族が八尾地域にいたことがわかるのである。

中河内・八尾近辺は、弥生時代から大水田地帯であった。これは福万寺・池島遺跡の発掘で証明されている。何度も

川の氾濫に遇い、洪水で水田が流失する歴史があり、その都度水田を開きなおし、営々と農業が営まれてきた。昭和30年代までは、奈良時代の条里制水田が河内平野一面に広がり、平野部には山も丘陵もないので、土地のすべてが水田として開かれたところであった。そこに八尾の村々が広がっていた。

八尾市域の中で八尾と呼ばれるところが、八尾市域の中心的な場所であった。奈良時代は八尾の南部、弓削が中心であったかもしれない。平安時代は石清水八幡宮の別宮、荘園があった。鎌倉から南北朝、室町時代にかけて、八尾の西郷・東郷に八尾城ができ、また西郷に常光寺が建立された。こうして八尾は久宝寺寺内町ができる前からこの地域の中心であった。西郷、東郷、木戸などの村落が連なっていて、近世には長八尾とか八尾庄八カ村などと呼ばれていた。

2. 南北朝時代から河内国守護畠山の時代へ

南北朝時代の初め建武四年、足利尊氏は細川頼氏を天王寺に本陣を構えさせ、八尾城に兵を入れて、楠木正行のいる南の東条勢に対処した。八尾は北朝方の最前線であった。十月五日、東条勢が八尾城に寄せ来た時の文書には、四方を取り巻き、城内の堂舎仏閣矢蔵役所など火矢をもって焼失させたと見える（土屋宗直軍忠状、八尾市役所1960、棚橋1981）。八尾は、河内の政治軍事の中心的な位置にあり、八尾城があり、堂舎仏閣など寺院もあり、集落も集まっていたことがわかる。室町時代になり、将軍足利義満が来て、八尾地蔵を本尊とする常光寺の門額を書いたと伝えられる。

室町時代、河内守護畠山氏は若江城（東大阪市若江）を守護所とし、南河内の誉田城には守護代を入れて、河内を支配した。

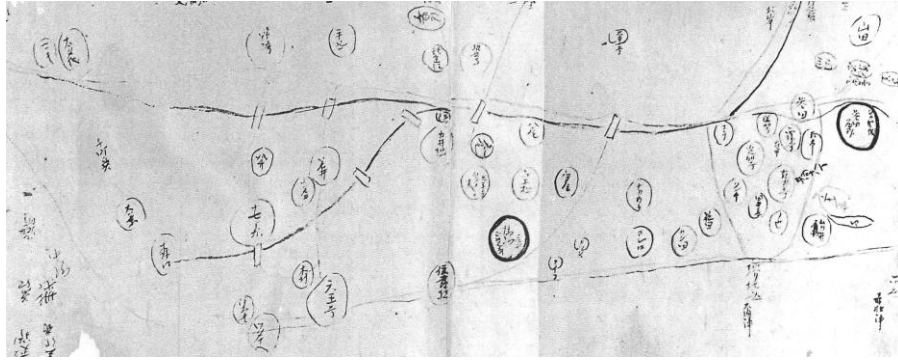
室町時代後期、応仁の大乱がおこり、河内では管領であり河内守護であった東軍畠山政長の地盤を奪うように、西軍畠山義就が河内へ下った。文明9年9月京都から下り、野崎での戦いで若江城の軍に行く手を阻まれたが、摂津国欠郡から天王寺を廻り、10月には矢生（八尾）に入った。

守護方の拠城のある若江城と南の誉田城の間にあるが、ここに入ったことで河内一国の大勢を打ち取ったと、『大乘院寺社雑事記』の筆者尋尊大僧正は見ていた。守護所などはなかったのであるが、八尾には南北朝時代の八尾城の伝統があり、常光寺があり、近くの亀井村には河内守護家の畠山満家が建立し、畠山氏の菩提寺となった真観寺があった。これらからみて八尾は河内の中心だと見られていたことがわかる。この後義就は南方の誉田城も手に入れて、本城とし、北の政長の守護所若江城を攻めて落し、河内一国を占領した。

文明14年になって管領畠山政長は義就の河内を攻めるべく海路により堺南庄に入り、河内へ向かい、8月27日、河内の国中矢尾（八尾）の西平野に打ち入った。尋尊は『大乘院寺社雑事記』に河内之国中矢尾と書いている。八尾を国中と云っていることが注目される。この後、管領方の軍が北から河内へ入り、両攻めにして若江城を取り戻し、義就の誉田城へ進むことになる。

その後、義就の死去したのを機会に、明応2年（1493）政長は義就の子基家との決戦に臨み、2月将軍義材（義植）を奉じて京都を出発、河内国橋島正覚寺に着陣（八尾の西、平野の北）、細川政元、守護大名たちをも巻き込んで、正覚寺合戦となった。管領細川政元が反旗を翻したことで、4月24日、正覚寺の陣は誉田城高屋城の基家や諸大名に攻められて破られ、滅亡する。政長は自害、将軍義材は囚われの身となる。この時、捕えられた将軍のお供近習に畠山右馬助を筆頭に39人がいた。名簿には畠山右馬助は播磨殿、三郎、八尾主也とある。恐らく河内守護畠山家の一族で八尾の領主であったのであろう。また播磨殿というので、久宝寺の領主の畠山満貞（安井の祖）などと近い家筋で、畠山并安井系図に見える満貞の兄の満基の系統の人が播磨守を名乗っているのは畠山本家筋に対して分家筋が八尾や久宝寺を持っていたのであろう。八尾や久宝寺にはこのような畠山の一族が領主としていたことを示している（大乘院寺社雑事記明応2年5月2日）。

図 1-1 明応 2 年御陣図



(出所)『福智院家古文書』口絵 12-13 頁。

この正覚寺合戦の時に興福寺門跡尋尊大僧正が描いたとされる明応 2 年御陣図がある(福智院家文書、花園大学福智院家古文書研究会 1979)。これには正覚寺の御陣屋形と南の誉田屋形タカヤ城が対して描かれ、正覚寺御陣近くでは、矢尾、八尾、カイ堀、勝軍寺ムクノ木、ウエ松、守屋がそれぞれ丸く囲んで記入されている。矢尾とあるのが、尋尊が雑事記で矢生、矢尾と書いていたところであろう。八尾とあるのは、いわゆる長八尾の南の端の大和川近くにあたる。

この地図に久宝寺や平野(大阪市平野区)が書かれていないことに注目できる。平野は文明 14 年 8 月の文中にも出ているので、なかったところではない。また久宝寺も本願寺の蓮如が文明 2 年に久宝寺村で布教したと伝えていて、これもなかったところではない。書かれていないのは、いずれもこの時代に権力側や武家方に注目されなかったことを示している。八尾が書かれていることに注目すべきである。

ともかく、南北朝から室町時代にかけての時期、八尾(矢尾)は若江城や誉田城のように守護所とはならなかったのであるが、河内の国中にある政治的にも重要な地域であったことを示している(棚橋 1993)。

3. 八尾のキリシタン城主池田丹後守

戦国時代になり、三好長慶が飯盛城にいて畿内を支配していた頃、河内の岡山、三箇、若江、八尾には配下の武将がいて、キリシタンの町が並んでいた。

織田信長は足利義昭を報じて京都に入り、全国支配を押し進めていったが、天正元年、将軍義昭は信長に反し、宇治槇島城から三好義継のいる若江城に入り、そこから堺、

紀州へ逃れた。信長は河内を攻略するため、義昭の出た後の若江城を攻めた。義継の家老衆の若江三人衆は義継に背いて信長方に付き、義継は自刃して果て、信長の河内支配が始まった。この後、若江城は破却され、八尾城に若江三人衆入り、河内半国支配を任された。その一人池田丹後守はキリシタンであり、八尾には 800 人のキリシタンがいた。南の河内半国は高屋城の三好康長にまかされた。秀吉時代に八尾城主池田丹後守は美濃に転封されて、八尾城は無くなったが、信長時代の一時期、八尾には八尾城があり、河内半国の政治の中心であった。

4. 久宝寺寺内町は八尾市の都市的空間の始まり

次に久宝寺(八尾市)へ話を進めていくことにする。久宝寺寺内町は八尾市の都市的空間の始まりと考えられる。八尾は河内の国中であった。しかし八尾市域の歴史において、道路が直交し住宅が立ち並ぶ都市的空間が見えるようになるのは、16 世紀半ばから後半にはじまる久宝寺寺内町が最初ではなからうか。

5. 久宝寺寺内町の出現

八尾市久宝寺地区は中心の久宝寺地区と東久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺と呼ばれる周辺地区に分かれている。その中の久宝寺地区は現在も直交道路のある町場で住宅が密集していて、旧寺内町時代の街路の様子を留めている。旧村時代と同じで、田畑は町場の周辺に広がっていた。現在は、田畑は少なくなり、住宅や工場が建ち並んでいる。

久宝寺が都市的な直交道路のある町場、久宝寺寺内町となっていく時期は本願寺蓮如の布教から織田信長の侵攻

までの間であろう。

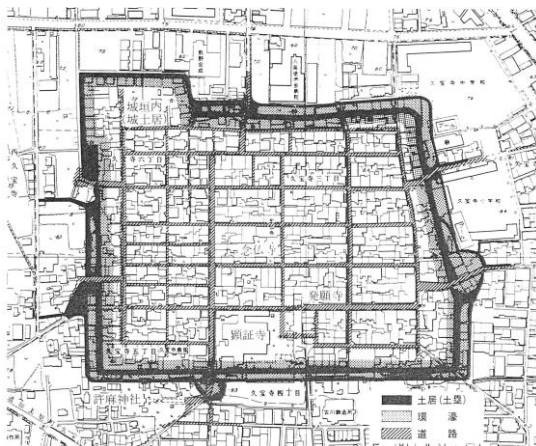
久宝寺には、聖徳太子建立と伝える久宝寺の古刹があったと伝えられているが、久宝寺が歴史上に現れてくるのは、本願寺 8 世宗主蓮如の時からである。久宝寺には河内では雁多尾畑の光徳寺と同様に浄土真宗の古い歴史を持つ慈願寺があった。蓮如の苦難時代、慈願寺の法円を訪ねて何度も訪ねてきていた。その時に呼んだ歌が「年つもり五十有余をおくるまてきくにかわらぬ鐘や久宝寺」で、書が今も慈願寺に伝えられている（八尾市立歴史民俗資料館 2001）。蓮如は山科本願寺を建立したあと、大坂に坊舎を造り、移り住んだが、そのころに久宝寺に西証寺を立て、第十一子の実順を住持に入れていた。その子実真が継いだが大坂で夭折し、寺は焼けたか衰微したかと思われる。

実如、証如と時代が移り、天文元年（1532）、蓮如の建立した山科本願寺が証如宗主の時代に法華一揆に焼け落とされ、大坂に本願寺が移された。そのことから、大坂本願寺を取り巻く本願寺派の寺院は大坂本願寺を守る寺院として

重要性を増した。歴史の巡り合わせか、この時期になって久宝寺にあった蓮如建立の西証寺が復活し、顕証寺として建立整備された。

顕証寺に蓮如の第八子蓮淳が入寺した。蓮淳は近江近松顕証寺の住持であったが、山科本願寺と同時期に焼け出されて証如のいる大坂本願寺に避難していた。蓮如の第八子であり、証如の母慶寿院が蓮淳の子であったので、蓮淳は大坂本願寺の中心人物であった。蓮淳が久宝寺の顕証寺に入寺したことで、顕証寺は一家衆寺院として高い地位を持ち、寺のある久宝寺は寺内町となり、証如宗主のいる大坂本願寺寺内町並の特権をもった寺内町として発展していった。発展の過程で寺内町として町場が建設され、都市的な街路や住宅が建ち並び、商業などが発達していったことが考えられる。その過程は史料的には顕かにはできないのであるが、証如、顕如、そして信長時代の間に見る町になっていったと考えられている。

図1-2 久宝寺寺内町の旧土居・環濠と道路網復元図



(出所) 八尾市(1988) 24 頁。

堺は環濠都市として中国や南蛮と貿易をしていた。平野も土居と堀に囲まれた都市で、貿易で栄えていたという。久宝寺も堀に囲まれ、商業者が集住し、寺内町として栄えていたとみられる。江戸時代以後に絵図に見え、現在にまで維持伝承されてきた街路は江戸時代にできたというより、室町戦国時代のもと考えられる。

証如の大坂本願寺時代、久宝寺の人や、同じく蓮淳の開基といわれる恵光寺のある萱振などの住人が、大坂で寺院の整備や土木工事に従事していることは、久宝寺に掘作り

や土木工事の技術の集積があったことを考えさせられる。

久宝寺には室町時代、守護畠山氏の一族渋川満貞、安井とも号したが、久宝寺城を構えていて、久宝寺城主であったと伝える。満貞は南蛮貿易で木綿の種を持ち帰り、これが河内木綿の始まりになったとの言い伝えもある。

また満貞は鱗角堂という学校を創建したという。満貞の後裔（満貞から二～三代飛び）定継の子安井定重が天正年間この鱗角堂を復興、堺の学者今村道和を招いて、孔子像をまつり、漢籍の講義があったと伝える。江戸時代には、

この麟角堂に伊藤仁斎・東涯も招かれて講筵を開いたともいう。堺との繋がりが注目される。

このように考えると、久宝寺は堺や平野のように八尾市地域では最初に都市的な街路や商人の集住、商業活動のあったところとして、注目してよいのではなかろうか。

明応2年の御陣図に久宝寺村が書かれていないのは、まだ久宝寺に寺内町が形成されていず、政治的には注目されない、普通の河内の村であったからであろう。久宝寺の寺内町としての発展は、この後になる。

大坂本願寺と大坂の町が信長に攻められて本願寺合戦となり、本願寺は紀州へ退場、堺南北庄は矢銭2万貫を要求されて屈服、平野が堺から同心を求められるほどであったが、最後は信長の直轄領となったように、久宝寺は大坂本願寺派の町であるが、守護畠山氏の一族であった安井氏が信長に加担したため本願寺から攻められ、守り抜いた後は安井氏に知行が任されたことなど、大坂、堺、平野、久宝寺は戦国時代に武家方から特権を認められて経済を伸ばし、都市的な発展を遂げたところとして共通の特徴をもった町であった。

6. 信長時代以後の久宝寺と八尾寺内村の開発

信長時代、大坂の本願寺は信長の支配に激しく抵抗した。石山合戦と呼ばれる。信長はまず河内の攻略を進めたので、河内の本願寺派の御坊とか一家衆寺院は、まず最初に信長軍との対応に迫られた。寺の存亡に係わるので、本願寺宗主顕如の意向に反し、生き残りを模索した。久宝寺の中心の家安井家では久宝寺での支配的位置を確保するため、本

願寺門徒であるが、信長方に付き、久宝寺は大坂から攻められて、安井兄弟の長男定重（主計）が戦死した。しかし、久宝寺を守ったことで天正9年、3男安井清右衛門宛に信長の禁制をもらい、久宝寺屋敷地の支配を任された。その後、秀吉、没後は家康が幕府を開くが、慶長5年家康の禁制を河内久宝寺本願寺新門跡寺内の名でもらっている。この間、久宝寺は安井家の清右衛門兄の安井勘介（善海）、その子治兵衛（宗清）の家が中心となり、久宝寺を支配する。治兵衛は代官寺沢志摩守の姪を娶るなど久宝寺寺内での立場を固めていた。

7. 八尾寺内村の開発移住

慶長11年に入り、久宝寺寺内では安井の支配に反発する久宝寺村百姓七郎兵衛らが安井治兵衛の支配を嫌って、川東の八尾領の土地へ引越し、八尾寺内村を立てた。

ここは長瀬川沿いの湿地帯であったが、新しい村では久宝寺と同じく街路が縦横に走り、屋号の在る家々が建ち並ぶまちであった。八尾寺内村の古地図や現在残っている街路を見ると、久宝寺寺内町と同様に直交する街路をもち、廻りを溝で囲う形となっていることがよくわかる。そこに村の中心として教如宗主に属す東本願寺派の御坊大信寺を建立、殆ど家が屋号を持ち、商家が並んでいた。その内に久宝寺と並ぶこの地域の商業の中心となり、現在の八尾市の中心街、本町と呼ばれる地区になっていくことになる。八尾寺内村は久宝寺の人が開発し移住してきた村である（八尾市1988）。

図1-3 旧八尾寺内村の道路・土居・環濠・排水路網の復元図



(出所) 八尾市(1988) 59 頁。

八尾寺内村の成立で、八尾は新しい八尾寺内村と旧来からある八尾の西郷や東郷、木戸など、八尾の中心地が接続するようになり、行政上は別々の村であるが、一般には八尾と呼ばれる地域が大きく発展するようになる。これが現在の八尾市の中心地八尾とよばれるところである。

一方、久宝寺では、この後、治兵衛や第九兵衛らが平野藤次や成安道頓と組んで、秀頼時代の大坂の町づくりに努力し、慶長 17 年、東横堀の南端から高津宮最寄りの梅津川という小川を西に広げ、西の木津川までの堀の開鑿に自費を使って貢献したのである。大坂の役の時は家康側に属し、禁制も貰っている。南堀川（道頓堀川）の成功で元和元年以後は九兵衛が大坂南組総年寄となり、安井家は久宝寺と大坂で繁栄する。

8. 大阪の水の都づくりに久宝寺の人が貢献（道頓堀川の開鑿）

豊臣秀吉が天下を取り、大坂城の築城と大坂の町づくりが行われた。天正 11 年（1588）から 16 年の間に本丸や二の丸の普請があった。文禄 3 年（1594）から 5 年にかけては総構堀の普請があり、慶長 2 年からは秀吉晩年から秀頼の時代に入る。

最初、秀吉の城下町は大坂城から上町台地を南へ四天王寺から堺まで続けようと、工事が始まった。在家が天王寺まで作り続けたとか、平野の在所を天王寺まで引き寄せたなどとの記事が『イエズス会年報』（1584 年 1 月 20 日）や『兼見卿記』に見える。その後、三の丸の造営がなされると、町家をその郭外へ移転させて、いよいよ町家は上町台地の西の沖積平野へ広げていくことになる。

東横堀川は大坂城の外堀の役割を担って、天正 13 年とも文禄 3 年（1594）からともいわれるが、開鑿に着手され、新堀とも云われた。しかし南の方は堀止となっていて、水は流れず、沖積の平地のうえ、水捌けが悪いままであったという。この東横堀川の水捌けをよくし、新たに南堀を掘って、堀の両側に家を建て町家に仕立てる計画を立て、自分たちの費用で工事をすると提案したのが、平野の人や久宝寺の安井家であった。

秀頼時代の慶長 17 年（1612）、平野の平野藤次（藤次郎）、成安道頓、それに久宝寺安井家の安井治兵衛、安井九兵衛の 4 人は東横堀川の南から東西に横に流れる堀を開鑿し、木津川に流す堀を提案した。当初は南堀といわれた。人足

数百人が出て工事に掛ったが、慶長・元和の大坂の役が起こり、中断した。その時、成安道頓は大坂方に付き籠城、戦死した。安井家では九兵衛親定正、叔父主計（定重）、同清右衛門（宗因）は信長に忠節を尽くし、御朱印を頂戴、その後、秀吉、家康と忠節を続けていた。甥の安井算哲は十六歳の時から囲碁の名手で権現様家康の御前に召し出されていた。その結果、河内国渋川郡久宝寺は徳川家康から慶長 19 年 11 月 2 日付けの禁制を戴いている。平野藤次、安井九兵衛は家康秀忠両上様の御陣所の御用を勤めていた（『大阪編年史』第 4 巻（1968）、『安井家文書』（1987））。

役後の元和元年（1615）、松平下総守忠明が大坂城主として入城、大坂の役で灰燼となった大坂の復興に取りかかった。その第一が三の丸の開放であり。安井九兵衛らの南堀開鑿の再開であった。元和元年九月十九日付けで、忠明側近の山田重次や奉行の連署で平野藤次、安井九兵衛あてに早々に南堀川の整備を進め、家を建てさせるようにとの書状が出されている。同年霜月末、木津川との川口が浅いので、大船が入るようにと、人足に川を掘らせている時、木津浦へ鯨が寄せ来たのを捕獲して、幕閣へ献上したことがある。これで見ると、南堀川は元和元年には整備の段階になっていて、町屋を建てるのを急いでいたことがわかる。

図 1-4 贈従五位安井道頓安井道ト紀功碑



（出所）筆者撮影

この功績により、安井九兵衛、平野藤次は堀川沿いに屋敷地をもらい、また地元久宝寺や平野の代官を仰せ付けられた。また道頓の功績にも報いるため、松平忠明は南堀川の名前を道頓堀川と命名し、後世にその業績を伝えさせたといわれる。この道頓堀川に続いて、元和 3 年には西横堀川、京町堀川、江戸堀川、元和 8 年には長堀川がそれぞれ

開鑿されて、大坂が水の都といわれるようになっていった。川を掘ることで、水捌けをよくするとともに、掘りあげた土砂で低湿地を嵩上げし、町屋の建築を助けたともいわれる。大坂の堀川の開鑿は、まさに大坂の町づくりの第一歩だったのである。その仕事に久宝寺の人が従事できたことは、幸運であった。平野や久宝寺の町づくりの経験があったからこそ、仕事ができたとはいえるのではなからうか。

この土木技術については、いわゆる徳川の大坂城の築城にも繋がっていく。秀忠は元和5年9月に西日本の諸大名に、来年3月から大坂城石垣の普請をするので、その用意をするよう命じたことから始まる。元和6年の大坂城御普請の時、加賀中納言前田利常は御手伝いを仰せ付けられ、請け持ちの場所について安井九兵衛に御用を仰せ付け、九兵衛は毎日詰めていたと安井家由緒書に書かれている。城外玉造、鳴野近辺の九兵衛請け所の地所を北国からの石運送の揚げ場にして、九兵衛が万事肝煎りで周旋致したとして感謝されたとのことである。

安井家はこうした大きな土木工事を監督する経験と能力を持っていたといえる。これらの土木実績は、久宝寺寺内町造成からの経験の積み重ねではなからうか。もう一つ安井家の土木工事に関連していうと、大坂本願寺勢に攻められて天正5年に戦死した定重(主計)の兄弟に定正(勘介)、定次(清右衛門)、了意の4兄弟がいた。定正の子として、南堀川(道頓堀川)の開鑿に功績のあった九兵衛がいる。

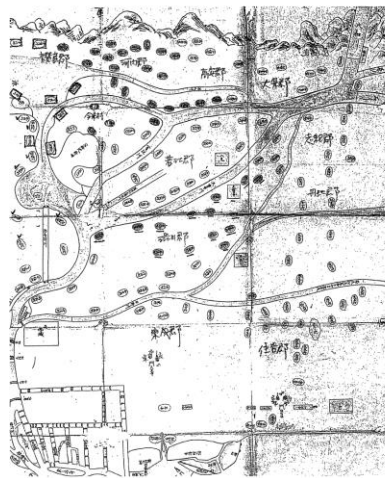
清右衛門定次は信長から久宝寺の禁制をもらい、秀吉にも在陣見舞を送るなどの忠節をしている。了意については、柏原から平野への平野川筋に舟を運行しようとしたことで知られている。成功とは行かなかったが、了意川の名として残り、その後、ここに柏原船が運航されて、大坂から大和への荷物の運送に役だった。

なお、道頓については安井道頓とか成安道頓とかの両説があるが、安井家文書には成安道頓と出ているので、安井道頓と云いだしたのは、かなり後代に云いだされたものと考えられる。道頓が平野の成安道頓であっても、安井九兵衛ら久宝寺の人が大坂の町づくりに功績のあったことに変わりはない(佐古1947、牧1981)。

9. 江戸時代、市域の町と村

江戸時代、八尾の市域は河内平野の中心部で、大和川が長瀬川と玉串川に分流してながれる平野の真ただ中に位置していた。城下町はなく、若江郡内で23カ村、渋川郡内で11カ村、志紀郡丹北郡内で14カ村。大県郡内で1カ村、高安郡内で14カ村があり、幕府領、諸藩領、寺社領などに分け、それぞれが入り組み支配の状況であった。支配の面からいえば、全部が農村地帯であったが、大坂城のある大都会大阪、平野郷町という都市に近く、村であっても中世以来の町場であるところもあった。町場は八尾と久宝寺である。

図1-5 町場(在郷町)としての八尾と久宝寺



(出所) 八尾市立歴史民俗資料館(2000)

(八尾、久宝寺、平野郷は□で、他は○で囲まれている)

八尾の町は八尾寺内村と、それに続く西郷村、東郷村、木戸村などの八尾八カ村に分かれているが、中世以来の八尾と近世初頭に久宝寺の人が開発してできた八尾寺内村とをまとめて八尾といわれることが普通である。

久宝寺村は室町末戦国時代に久宝寺寺内町として成立していたところである。八尾と久宝寺、この二つは行政的には村であるが、実質は町場であった。

元禄2年(1689)、山城から河内、和泉、紀州、大和を旅した九州福岡藩医で儒学者であった貝原益軒は旅行記「南遊紀行」の中で、次のように書いている。花園、玉串、若江村、かやふり村、と来て、「八尾町頗ひろく、潤屋多し。初日山常光寺とて、大寺あり。本尊地藏は、小野篁作也と云。また大信寺とて、親鸞宗の大寺あり。本堂は方十一間、縁がは各二間有。久宝寺村は、八尾より五町許有。其間に河内川流る。久宝寺町ひろく、富家多し。若江も、此辺も、元和の大坂軍の戦場也。凡河内国は、平広にして、荒野なし。土地豊饒にして、民家富み、屋宅潤へり。暖気はやき故、草木早く茂る。民俗卑しからず。風気平和也。国中に山なくして、田地ひろし」(益軒全集巻之七)。田地の広がる中、八尾と久宝寺に町があり、富んだ家、広い家が多いと書かれてある。

一方、帰り道に国府(藤井寺市)から橋を渡り、山根道を行った時の見分が書かれている。「○国府の北の山下の村々をすべて、山の根と云。山の根道は、京より紀州へ行く大道なり。是より紀州にゆくには、河内の南のはし、木の実嶺を越す。凡河内国は木綿を多くうゝ、山の根の辺殊におほし。畠持たる者は余の物を作らず、悉くきわたをうゝると云。此辺もめんをおほく織いだす。山根木綿とて京都の人は是を良とす」。

河内国は田地が広がっているが、綿を植え、木綿を織り出だす、なかでも山の根の地帯は殊に多く、木綿を山根木綿といったことを聞いたのであろう。京を出たのは2月10日、帰京は2月23日、14日間の旅であるので、綿畑はまだ見られる時期ではなかった。しかし貝原益軒と同時代の井原西鶴は山の根の高安の庄屋が綿で大儲けをして遊興した話を書いている(西鶴置き土産)ので、当時の状況を正しく書いていると思われる。

元禄が過ぎた宝永元年に河内を流れる大川の大和川が幕府の命令で付け替えられた。天井川であった大和川の二本の流れ、長瀬川と玉串川の跡地は多くの新田となり、畑地

となり、ここに綿を大々的に植えるようになった。綿が収益を上げられるとなると、畑以外に田にも綿を植えるようになり、河内、特に中河内一帯は大綿作地帯となっていた。

この農家が収穫した実綿を集める町として平野郷が栄えた。綿の計り方として平野目という単位が一般化した。平野郷は摂津国の街であるが、中河内に接した中世以来の町場で、商人も多くいたのである。河内の実綿は大坂の間屋仲買に集められて、全国へ運ばれていった。

河内農家では綿を植え、収穫する本業以外に、自家産の実綿を繰り綿にし、織物にする副業も盛んになっていった。縮木綿や藍染の木綿は自家用として使われるのであるが、多くは白木綿のまま売られるようになる。農家一軒一軒を廻って買い集める商人から仲買をする人、問屋として多くを集め、他地方へ販売する商家も生まれるようになった。中河内では八尾や久宝寺、南河内では富田林に、こうした河内木綿を買い集め販売する問屋仲買商が生まれるようになった。東大阪市域では大坂の上町商人が集荷した。

江戸時代初めの寛永15年(1638)の『毛吹草』という書物には全国の名産をあげるなかで、河内の名産の中に、久宝寺木綿の名が上げられている。中世以来の久宝寺の商家の人が集めて売った木綿のことと思われる。大和川付け替え以後、河内の綿作綿織物が盛んになるにつれて、問屋仲買、その下の商人の間に激しい争いが起こるようになり、多くの木綿屋組仲間の組合ができ、牽制や統制をするようになった。八尾組、久宝寺組、恩智組、植松組、玉串組、長原組などの名前が知られる。

享保19年(1734)の八尾組の「木綿屋組中定書覚」(八尾西郷西岡家文書、『大阪編年史』、『安井家文書』)で仲間商人を多い順にあげると、寺内31、萱振村11、東郷村9、八尾木村8、西郷村6、庄之内村3、別宮(村)2、東弓削村2、木戸村1、中野村1、久宝寺新田1、新田1の76人となる。一番多い寺内は八尾寺内村という村名であるが、全員が寺内の何兵衛とか署名している。他は東郷村何兵衛、東郷何兵衛とか書いている。寺内の人は花屋九兵衛、苺屋治兵衛、天王寺屋徳兵衛、木綿屋七兵衛、弓削屋治兵衛、古手屋半兵衛、小山屋久兵衛というように、皆屋号を書いて、その下に名前を署名している。寺内に居るものこそ商家であるとの自負がありありと現れている。年不詳の八尾寺内村の絵図があるが、これには屋号のある家が並んでい

る。

西岡家はこの後木綿問屋として大きく成長するのであるが、西郷村吉兵衛と署名している。綿屋吉兵衛、綿吉とよばれるが、正式文書では吉兵衛である。屋号の持つ重みを感じるとともに、寺内村が商家の集まりであることがわかる。それと同時に、寺内村、西郷村、東郷村、木戸村などを含めて八尾と世間から見、自分たちも八尾とっていたことがわかる。

寛政2年(1790)5月、寛政の改革の中で、奉行所から在もめん商売しているものの代表が呼ばれ、木綿値段が高値であると注意されたので、今後は八尾組久宝寺組申し合

わせ、下直になるようにと6月に申し合わせた「取替せ一札」がある。それには八尾組総代の4人、久宝寺組総代の4人とも、屋号と名前で署名している。久宝寺村については、江戸時代の2枚の絵図がある。一つは久宝寺村屋敷惣絵図(元禄2年か)、もう一枚が久宝寺村屋敷新検分間正絵図(享保8年)(八尾市立歴史民俗資料館特別展図録、『久宝寺寺内町と戦国時代』に収録)、どちらの図も、屋敷ごとに屋号がびっしり書かれている。八尾寺内村の『八尾郷絵図』(年未詳、京都大学博物館蔵)にも屋号のある家屋敷が並ぶ。

図1-6 『八尾郷絵図』にみられる屋敷割



(出所) 八尾市(1988) 59頁。

久宝寺村では中世以来屋号を持っていたので、八尾寺内村の屋号も、もともと久宝寺時代からの屋号であったのではなかろうか。7月には大坂上町組木綿仲買仲間と河州八尾組木綿仲買と同州久宝寺組木綿仲買の3人の総代が署名して、「木綿仲買中相互永代申合之事」の文書を作っている。これには近年寄屋といい下商人が多数出来、買い口相場が

万端不取締になったことをあげて、今後相互に取締をするように相談したことを文書にしている。

こうして河内木綿の栽培、織物の売買は、江戸時代は大変盛んであったのである。ところが、これは明治になって大きく変動し、河内木綿の衰退、全滅という時代がくるのである(武部1957)。

参考文献

- 梶山彦太郎・市原実(1972)『大阪平野の発達史』日本地質学会。
- 佐古慶三(1947)「新堀奉行成安道頓伝」『大阪春秋』第4号。
- 武部善人(1957)『河内木綿の研究』八尾市立公民館内郷土資料刊行会。
- 棚橋利光(1981)『八尾・柏原の歴史』松籟社。
- 棚橋利光(1993)『大阪の戦乱と城』松籟社。
- 花園大学福智院家古文書研究会(1979)『福智院家古文書』。
- 八尾市(1988)『寺内町の基本計画に関する研究：久宝寺寺内と八尾寺内を中心として』八尾市教育

委員会。

八尾市役所（1960）八尾市史史料編。

八尾市立歴史民俗資料館(2000)『絵図が語る八尾のかたち』（特別展図録）

八尾市立歴史民俗資料館(2001)『久宝寺寺内町と戦国時代』（特別展図録）。

牧 英正(1981)『道頓堀裁判』（岩波新書）、岩波書店。

『大阪府史』第4巻、中世編Ⅱ、1981年。

『大阪府地名大辞典』角川書店、1983年。

『大阪府の地名』（日本歴史地名辞典 28）平凡社、1986年

『大阪編年史』第4巻、大阪市立中央図書館、1968年。

『安井家文書』、大阪市史史料第二十輯、大阪市史編纂所、1987年。

① ヒト・モノと創造性

Persons/Things and Creativity



大阪市立大学・野村記念室にある野村徳七氏（二代目）の彫像
（1928年、野村氏の寄付により同大学に経済研究所が設立された。）

**Mr. Tokushichi Nomura, founder of Nomura Securities Co. donated to City of Osaka for establishing
The Economic Research Institute of Osaka City University in 1928.**

第 2 章

野村徳七と大阪：文化とビジネス

Mr. Tokushichi Nomura, Founder of Nomura Securities and Osaka:
Relationship between Culture and Business

西辻 豊 (Nishitsuji Yutaka)

1. はじめに

野村グループの創始者野村徳七（初代）は、河内の国淡川郡久宝寺村（現在の八尾市久宝寺）で嘉永3年（1850）4月15日に生まれ、幼名は徳松という。11歳まで八尾で暮らしていたが、出身地である八尾の影響をどの程度受けたかは推測するしかない。

野村徳七についての書物は多くあり、地元久宝寺で野村徳七のことを知る人の話を聞くと、初代野村徳七は11歳までの生活体験が大きく影響しているように思う。

2. 幼少時久宝寺で接客を会得

久宝寺寺内町は、八尾市内の3カ所の寺内町のなかで最初に出来た寺内町であり、八尾市史によると、大和川付け替えまでは船運の便が良く、大阪と大和を結ぶ中継地として商業が栄えており、慶応3年（1867）には商人並びに職人の家が167軒もあり、商家が全戸数の1/3以上であったと記されている。

生まれてすぐに久宝寺寺内町の農家、辻部宇兵衛にもらい受けられ、農業のかたわら小売業である家業を手伝い、幼少にしてお客様との接し方を身に付けることが出来たと思われる。

3. 丁稚奉公で店主に見込まれる

11歳から大阪屋弥兵衛の大弥両替店に丁稚奉公に入って商人としての生活が始まるが、幼少の頃に身についた商人魂に磨きがかかっていったといえる。以下、野村徳七の活躍振りに触れながら企業経営者と人間性について考えてみることにする。

徳松は、大阪屋弥兵衛の大弥両替店に丁稚奉公に入ってから、天下の台所といわれる大阪で、修行を重ね、店主に

見込まれ、明治4年（1871）2月大阪屋弥兵衛の養子となるが、8月には主人の弥兵衛が他界、翌5年8月には弥兵衛の妻も他界する。後継当主の弥太郎は店を閉鎖することになったが、徳松は最後まで残り店の整理に尽力し、自分を育ててもらった主家の恩に報いている。

徳松は両替店で修行を積んできただけに、商才には長けていたうえに金銀の目利きでもあり、客の注文通りの量の金銀を切り取ることが出来、古金の鑑定も的確で日本銀行大阪支店の鑑定員を委嘱されている。

4. 二代目を大商人に育てる

明治5年に独立をして、新たに野村の姓を名乗って分家をすると共に、大弥両替店で奉公していた山内多幾と結婚し、大弥両替店の一角を借りて小銭の両替商売を始める。これが野村財閥の事業の出発点となった。この6年後、明治11年に大阪の農神橋詰町に新しく住宅兼店舗を構えるが、同じ年に長男信之助（後に二代目・徳七を襲名）が生まれている。

野村夫婦は子供の養育には随分力を入れたようで、信之助は商売人としての父の教えを受けて育っていく。母親である多幾は「烈女型の賢母」と記録が残っているほどで「子供を一人前に育てたい念願」をもって学業に励ますと共に、家業を手伝わせ、得意先回りをもち「人様に迷惑をかけた時は女々しい振る舞いをするな」と厳しい躾もしている。

5. 世界的視野で近代的証券業に

信之助は明治37年に父の野村商店を受け継いで証券業を開始、明治40年に二代目・徳七を襲名している。近代的な証券業を目指す信之助は、人材育成と調査活動に力を入れ、明治39年には新聞社の経済部記者を採用して調査部を設け、

独自の調査活動による市況、経済、時事問題などを載せた「大阪野村商報」を発行、顧客に情報提供をする事で他に例のない顧客サービスで好評を博している。そして自らは新聞社の企画した欧米外遊の旅に参加、明治41年3月から8月までの5ヶ月にわたり、世界の金融界を見てまわり新知識を吸収している。この時に、ニューヨーク・ウォール街では証券取引と金融機関が密接な関係であることを学び、帰国後の経営方針に大きな革新をもらしている。大正に入ってからには南洋視察をしたうえ、ボルネオに農場とゴム精製工場、スマトラにヤシ園とコーヒー農園、ブラジルにコーヒー農園を経営し、野村東インド殖産株式会社を設立して、世界的な視野を持って事業を展開していく。大正6年には株式会社野村商店とし、翌年には大阪野村銀行（後の大和銀行、現りそな銀行）を起こす。大正11年には「野村合名会社」を設立し、野村財閥の中核となる組織をつくっていく。次いで証券、信託、生命保険と事業展開をして、総合財閥への道を歩んでいく。

6. 事業拡大と人材育成

これらの事業拡大の陰には人材育成がある。早い時期から英語の出来る大学卒業生を採用して海外と日本の公債取引に備え、日本の紹介、大阪市場の説明、野村商店の宣伝のため、英文の営業報告書を発行していく。社員のためには、日曜学校を開設して教育すると共に、夜学部へも通わせ、社会的には「野村奨学部」を設置して返還義務のない奨学金給付も行っている。いま企業は目先の利益追求が主眼となっている様に思われるが、企業の継続発展を考える時、人材育成について見習うところがあるだろう。野村徳七の経営の基本理念である「顧客第一」「顧客と共に栄える」という精神が野村財閥を築きあげる原動力であったといえる。

7. 碧雲荘で大茶会

一方、野村徳七（二代目）は茶人、能役者としても有名で、「茶道は人格を向上させてくれる」といっており、文化人としての活躍も忘れることが出来ない。京都南禅寺近くには日本庭園を擁する碧雲荘を築造して、数多くの茶会を開催している。茶の湯、能楽関係の美術品を一般公開している野村美術館は碧雲荘の近くにある。このように優れた経営者であると共に文化人としてもその名を知られた野村徳七（二代目）は、昭和3年から終戦まで貴族院議員を務めている。

江戸時代以降、京都、大坂を中心に「上方文化」が育まれたのは、野村徳七のような文化人が少なからずいたからであろう。上方が江戸に先立って日本文化の醸成に役立ったといえる。経済事情が悪くなると文化活動がおろそかにされやすいが、経済と文化は互いに相乗効果をもたらし、人間の暮らしに、都市の発展に寄与するものであると思う。

8. 八尾市との関係

八尾市は昭和23年4月1日 八尾町、龍華町、久宝寺村、大正村、西郡村の5か町村が合併して市制を施行し、初代市長には久宝寺村長であった脇田幾松氏が激しい選挙の結果当選され、以来15年間八尾市発展の基礎を固めてこられた。

戦後の混乱期に地域社会の健全な発展を遂げ、財政面でも毎年黒字財政を続けていたが、脇田市長は「黒字ではなく、^{くろうじ}苦勞字である」といっておられたと伝え聞いた覚えがある。

財政面で密接な関係にあるのが金融機関である。八尾市の指定金融機関は当初からずっと大和銀行（前身は野村徳七が創設した大阪野村銀行、現りそな銀行）であり、久宝寺出身の両者が協力関係を維持し、八尾市発展の基盤を築きあげてこられた。

第 3 章

八尾市域に関連のある人々

People Who Are Related to City of Yao

松江信一 (Matsue Shin'ichi)

1. 八尾市域に関連のある人々

本稿のタイトルを「八尾市域に関連のある人々」としたが、当初のテーマは「八尾出身の方々のお名前と活躍の様子を紹介すること」であった。これは、日本の郵便切手に描かれた事物と東大阪・八尾・柏原の中河内の3市との関連を採り上げた「中河内に関連する切手」という拙文を2002年から切手収集家の会の会報や切手展で発表したことから派生して、『河内どんこう』誌上に同タイトルの文章を加筆転載したことに端を発している。

そこで作家の司馬遼太郎さんや映画監督の三池崇史さんのことをとりあげたことからこのようなテーマとなったわけだが、郵便切手を通して地元のことを紹介するという立ち位置をはずすと、私の知っている情報の乏しさを痛感した。それで、「中河内に関連する切手」をまとめる際に書籍・新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどから集めた情報を基に「八尾市域に関連のある人々」をリストアップすることから始めることにした。

リストアップにあたっては「中河内に関連する切手」をまとめる際に集めた情報と、高安古墳群を調べた時の情報を基本にした。だがそれでは偏りが生じるので、『八尾市史』『河内どんこう』『やお暮らしのガイドブック 2011 年版』『WAO! YAO! 八尾の入り口』などの書籍・雑誌や、インターネット（「八尾物語」「ウィキペディア」、八尾市域の学校のホームページ、公式サイトなど）およびテレビ番組等から得られる情報も補足した。

それらの情報を整理すると次の5つの類型に分けることができる。(敬称略・順不同)

① 八尾市域で生まれ育ったり、他地域生まれだが八尾市域に住んだことのある人（他地域生まれであることが確認できる人は出生地を現在の地名で併記した。）

初代野村徳七 大石順教(僧侶 大阪市) 今東光(僧侶・作家・国会議員 神奈川県横浜市) 司馬遼太郎(作家 大阪市) 榊莫山(書家・作家 京都府南山城村) 葛西健蔵(アプリカ創業者 大阪市) 辻井昭雄(近畿日本鉄道相談役 西岡京治(農業指導者 ソウル) 篠原とおる(漫画家 愛媛県新居浜市) 大月みやこ(歌手) 六田登(漫画家) 天童よしみ(歌手 和歌山県田辺市) 上田秀人(小説家 歯科医) 三池崇史(映画監督 大阪市) 河内家菊水丸(河内音頭) ジミー大西(タレント・画家 大阪市?) 桑田真澄(元プロ野球選手) 青木宗高(俳優) 上重聡(日本テレビアナウンサー) 鰻和弘(漫才・銀シャリ) 平野早矢香(卓球・ロンドン五輪メダリスト・ミキハウス 栃木県鹿沼市) 福原愛(卓球・ロンドン五輪メダリスト 宮城県仙台市) 清水翔太(歌手)

② 他地域で生まれて八尾市域で学んだり働いていたことのある人

田中友幸(柏原市 映画プロデューサー・旧制八尾中学) 五味康祐(大阪市 作家・旧制八尾中学) 塩川正十郎(東大阪市 国会議員・国務大臣・旧制八尾中学) 山野さと子(東大阪市 歌手・八尾高校) 細川茂樹(岐阜県大垣市 俳優・大阪経済法科大学)

③ 先祖・祖先や親類などが八尾市域に関連のある人
安井算哲 萩原朔太郎

④ 八尾市域を訪れたことが日記や報文などの著作で確認できる人

曾良 貝原益軒 伊能忠敬 エドワード・S・モース W・ガウランド W・G・アストン R・ヒッチコック 坪井正五郎 山崎直方 鳥居龍蔵 喜田貞吉 梅原末治 堀辰雄

⑤ 八尾市域の歴史に関連の人物（近世以前の人物。伝承・伝説の人物を含む）

聖徳太子 物部守屋 日羅 弓削道鏡 在原業平 俊徳丸
三好長慶 蓮如 教如 木村重成 徳川秀忠 井伊直孝
藤堂高虎 安井道頓 中甚兵衛 大塩平八郎 伴林光平

こうやって概観すると「八尾市の有名人」という括り方もできるかもしれないが、ここにあげた方々のお名前は一部であり、八尾市域に関連のある人々が各界にまだまだおられることは言うまでもない。また、①については「八尾市出身」と「八尾市生まれ」を完全には分けられなかったのがこのようにしたが、もっと細分化できるかもしれないし、適切な別の分類方法があるかもしれない。

本稿ではこの中から文化・学術・芸術・芸能の分野に関連する人々を何人か簡単に紹介してみたい。

2. 作家・小説家の方々

今東光さん^{1・2}

八尾市に関連の深い小説家と言え、まず今東光さんを挙げないわけにはいかない。

1951（昭和26）年12月、八尾市中野（現在八尾市西山本）にある天台院住職を拝命した今さんは1975（昭和50）年まで約23年間当地に在住し、河内の人々の機微や生活を描く小説を多数発表された。1957（昭和32）年には『お吟さま』で第36回直木賞を受賞されている。

勝新太郎さんが演じた「八尾の朝吉」が活躍する映画『悪名』は1961（昭和36）年に公開され、シリーズ化されたが、1960（昭和35）年に週刊誌に連載された同名小説が原作である。『こつまなんきん』や『河内カルメン』など今さん原作の河内ものの小説は多数が映画化されている。

1968（昭和43）年には参議院議員となったが、この選挙の事務長を務めた作家の川端康成さんをはじめ多くの文人との交流があったことが知られている。

司馬遼太郎さん^{2・3}

今さんと交流があった中の一人が福田定一さんで、1955（昭和30）年に「司馬遼太郎」のペンネームでデビューしている。国民的作家と呼ばれ、『龍馬がゆく』や『坂の上の

雲』などの作品が映像化されている。

司馬さんが東大阪に住居を構えたのは1964（昭和39）年3月で、当時の住所は布施市中小阪であった。1979（昭和54）年8月に、現在「司馬遼太郎記念館」となっている東大阪市下小阪の住居へ転居されたので、1996（平成8）年までの作品の大半が東大阪で執筆されたことになる。

しかし司馬さんが八尾市において住居を構えておられたことはあまり知られていない。久宝寺や若江堤といった八尾市域が登場する短篇小说はあるが、八尾のことはあまり執筆されていないように思う。

1958（昭和33）年5月に守口市から八尾市大字教興寺（現在八尾市高安町南）へ転入されているが、翌年12月に大阪市西区西長堀南通の「マンモスアパート」へ転出された。布施市中小阪へ移られたのはその後のことである。

八尾市在住の期間は約1年半しかないが、この短い期間に第42回直木賞を受賞した出世作『梟の城』（原題『梟のいる都城』）の大半が執筆されている。

五味康祐さん^{2・4}

1953（昭和28）年に『喪神』で第28回芥川賞を受賞した小説家の五味康祐さんは大阪市出身だが、旧制八尾中学（現：大阪府立八尾高校）の40回の卒業生である。ベストセラーとなった『柳生武芸帳』は1957（昭和32）年に東宝で映画化されている。

上田秀人さん⁷

時代小説で今注目されている上田秀人さんは八尾市内で歯科医院を開業しておられ、診療所内の書斎には執筆用の資料が置いてあり、『奥右筆秘帳』など人気のシリーズが八尾市内で生み出されている。息子さんに残せるものを求めて小説を書き始められたのだが、診療は続けながら、執筆に精力的に取り組んでおられる。

3. 映画・テレビに関わる方々

田中友幸さん^{4・5・6}

五味康祐さんの『柳生武芸帳』を映画化したのは東宝の映画プロデューサーであった田中友幸さん（柏原市出身）で、田中さんはこの作品の監督と共同で脚本も手がけている。二人は旧制八尾中学の先輩後輩で、田中さんは中学の

32 回の卒業生である。1963（昭和 38）年には五味さん原作の『秘剣』も田中さんが映画化している。

田中さんがプロデューサーとして携わった映画はゴジラシリーズなどの特撮作品や黒澤明監督作品など 222 本にのぼり、東宝株式会社の社長、会長を歴任した。また大阪万博やポートピア 81 などの博覧会で東宝の特撮技術を駆使した映像を手がけたのも田中さんのつくった会社である。

田中さんは少年時代から活動映画好きで、八尾中学在学中は休みになると道頓堀の映画館や松竹座に入り浸っていたという。田中さんも五味さんも八尾市域出身ではないが、大衆文化の旗手を八尾の学び舎が輩出したことに違いはない。そして田中さんが育てたゴジラはハリウッドで 2 度目のリメイクが行われている。

三池崇史さん^{8・9・10}

映画『ゴジラ』がなければ『ウルトラマン』は存在していなかったかもしれない。この『ウルトラマン』の本放送を 1966（昭和 41）年に八尾市内の文化住宅で見ていたのが映画監督の三池崇史さんで、インターネットで公開のコラム「三池崇史のシネコラマ」ではその思い出とともに、2005（平成 17）年にテレビ『ウルトラマンマックス』の監督を担当することが述べられていた。

雑誌インタビューによると、三池監督は 1960（昭和 35）年 8 月、大阪市城東区の生まれで、尾鷲で過ごした後、小学校入学時に八尾に移られたことが語られている。1960 年生まれなら小学校入学は 1967 年 4 月になるので、八尾で『ウルトラマン』を見ていたという事は、入学前に八尾に移っておられることになる。

八尾市立八尾中学校を経て、大阪工業大学付属高校、横浜放送映画専門学院を卒業。多くの撮影現場を経験したのち、1991（平成 3）年にオリジナルビデオで監督デビュー。1995（平成 7）年に劇場用作品を初監督し、アウトローが登場する作品から、アイドル映画・ファミリー向け作品まで幅広く手がけておられる。他にも謎の遺跡「トンカラリン」や古代山城の「鞠智城」といった熊本県の歴史を紹介する郷土映画 3 本も監督しておられ、熊本県内の公共施設で公開された。1998（平成 10）年には米国『TIME』誌の「これから活躍が期待される非ハリウッド系監督」に日本人で唯一選出されている。

近年は『十三人の刺客』などの三池作品が海外での国際映画祭で上映され、カンヌ国際映画祭では 2011（平成 23）年に『一命』、2012（平成 24）年に『愛と誠』、2013（平成 25）年には『藁の楯』が上映されている。

そのような国際的な映画監督が思い入れをこめて監督したのが『ウルトラマンマックス』であつたり実写版『ヤッターマン』（2009 年）であつたりする。『ヤッターマン』は 1977（昭和 52）年 1 月より放映されたテレビアニメの実写化で、原作放映時には監督は高校生であつた。つまり八尾におられたころに放送されていた『ウルトラマン』や『ヤッターマン』も監督に影響を与えた映像作品なのである。

青木宗高さん¹¹

2011（平成 23）年 5 月のカンヌ国際映画祭では『一命』の上映に際して、同作に出演した俳優の青木宗高さんもかけつけ、三池監督と共に舞台に立っておられる。同作品のロードショーに際して同年 10 月にお二人で八尾に凱旋し、『一命』や『ウルトラマンマックス』撮影の裏話などが語られた。この凱旋がきっかけで三池監督と青木さんは 2012（平成 24）年に「八尾の魅力大使」に就任されている。

大阪府立八尾高校の卒業生である青木さんは、数々の映画・ドラマに出演し、2007（平成 19）年の連続テレビ小説『ちりとてちん』でヒロインの兄弟子で夫となる落語家を演じた。大河ドラマ『龍馬伝』や『平清盛』では後藤象二郎や弁慶といった歴史上の人物を演じ、2012（平成 24）年放映のNHKドラマ『はつ恋』でのヒロインの夫役などの演技が注目されている。

4. 高安郡の「ドルメン」を訪れた先人たち^{12・13・14}

本稿冒頭のリストアップの「④八尾市域を訪れたことが日記や報文などの著作で確認できる人」でエドワード・S・モース、W・ガウランド、W・G・アストン、R・ヒッチコックという 4 人の外国人の名を挙げておいたが、彼らについては少々説明しておく必要があると思い、一項目を設けることにした。（本項で扱う先人たちは歴史上の人物として敬称を省略する。）

米国人のモースは大森貝塚を発見・調査した人として有名である。英国人のガウランドは大阪造幣寮（現在の造幣局）に勤務していた御雇い外国人で、英国外交官のアスト

ンやアーネスト・サトウと親交が深い。米国人のヒッチコックは大阪にあった第三高等中学校の英語教師として来日し、滞日中の1887(明治20)年に日本であった日食の米国観測隊にも参加している人物である。

モース、ガウランド、ヒッチコックの3人に共通していることは、生駒山地西麓の村々にある「石窟」とか「塚穴」とよばれていた石組みを踏査して、母国で発表した著作で「ドルメン」として紹介していることである。とりわけ、ガウランドとヒッチコックの場合は「ドルメン」だけでなく、仁徳天皇陵などの陵墓も訪れて当時普及し始めたガラス乾板で写真撮影していることが注目されている。

モースが高安郡を訪れたのは1879(明治12)年6月で、八尾市が現在「高安千塚古墳群」として国史跡をめざしている地域である服部川・郡川の村々の「石窟」を踏査した。

ガウランドやヒッチコックの著作には服部川の「ドルメン」のガラス乾板写真があることから、1887(明治20)年ごろに服部川を訪れて撮影をしたものと推定されている。しかし、ガウランドはそれ以前の1881(明治14)年12月にアストンと高安郡を訪れていることが判明している。

冒頭のリストアップには加えなかったが、他にも著作の中で高安郡の「石窟」・「千塚」を紹介している英国の人々がいる。アーネスト・サトウが1881(明治14)年に共著で出版した日本についてのガイドブックには高安の「千塚」の記述がある。しかし、サトウ本人が高安郡へ来て書いたのかどうかは不明である。日本で英語教育を行なったJ・サマーズは1879(明治12)年5月に高安郡を訪れ、当地の「石窟」のことを書いた文章を2編残している。しかし彼らは「ドルメン」とは呼ばず、サマーズは「石窟」を大昔の人の住居としてとらえている。

実はサマーズが1879(明治12)年に勤務していた大坂専門学校の日本人教員(モースの記述では小川教諭)も「石窟」は大昔の人の住居であると考えていた。「高安郡の石窟」を踏査した小川教諭は東京大学の矢田部教授に手紙で報告したのだが、大昔の住居に興味のあったモースはその手紙を見て、「高安郡の石窟」踏査を九州・関西旅行の予定に組み込んだ。小川教諭の案内で現地をみたモースは、本来は住居ではなく墳墓であることに気付き、これらの巨石構造物がいかんして作られたかに関心を寄せたのである。そして帰国後に発表した文章などで、世界中に見られるテーブル状の巨石記念物の「ドルメン」の一例として紹介した。

現代日本の考古学で扱う「ドルメン」は弥生時代の支石墓を指す場合が多いが、モースが「ドルメン」と呼んだ「石窟」は古墳時代の横穴式石室を主体部とする古墳である。当時は「古墳時代」という概念が確立しておらず、「横穴式石室」という用語もなかった。ガウランドもモースの用法を踏襲して「石窟」を「ドルメン」と呼んだのだが、明治時代に先駆的な古墳踏査や研究を行なった彼らは、「日本考古学の父」として再び脚光をあびているのである。

本章は、主に「中河内に関連する切手」という拙文を基にまとめ直したという経緯があり、ご本人に直接お話を伺うということとはしていない。ゆえに採り上げ方や情報収集に偏りがあることは否めないし、また筆者の力不足を露呈している部分でもある。

各人の多彩な活躍を一括りに論じるわけにはいかないが、本稿で採り上げた人たちが八尾市域で触れた人情・機微や風土と、この地で過ごした日々の出来事や経験は、その作品や文章の中に反映されて日本中や世界に発信されていることをこれからも伝えたいと思う。

参考文献

- 1 市民と文化を考える会(1988)『今東光の横顔 生誕100年に寄せて』。
- 2 三上幸寿(1996)「司馬さんのことなど」『河内どんこう』第49号、やお文化協会。
- 3 足代健二郎(2001)「司馬さんのいた町のこと②」『河内どんこう』第64号、やお文化協会。
- 4 大阪府立八尾高等学校同窓会会報『ゆうかり』連載「シリーズ 人 輝ける先輩たち」
2000年 第44号 ゴジラ(神)を放った男 映画プロデューサー 田中友幸
2001年 第45号 芥川賞作家「柳生武芸帳」の五味康祐氏
- 5 田中友幸(1983)『東宝特撮映画全史』東宝株式会社。
- 6 田中文雄(1993)『神を放った男 映画製作者田中友幸とその時代』キネマ旬報社。

- 7 上田秀人・徳間文庫編集部(2013)『上田秀人公式ガイドブック』徳間書店。
- 8 『三池崇史のシネコラマ』第10回「ウルトラマン」(朝日マリオン・コム 2005年6月16日更新。なお、このコラムは2013年9月現在、サイトから削除されている。) <http://www.asahi-mullion.com/column/miike/50616index.html>
- 9 「スペシャルインタビュー 荒ぶる映画魂 三池崇史」(『大阪人』56号「大阪映画伝説」特集 財団法人大阪都市協会 2002年)
- 10 久保田正子(2000)『『お宝』3部作へ自治体映画奮闘』『産経新聞』7月26日(大阪)夕刊10面。
- 11 中西隆子(2008)「ようこそお運びで…「ちりとてちん」の収録セットを見に行つて」(『河内どんこう』第85号 やお文化協会)。
- 12 Morse, E.S.(1880) “Dolmens in Japan” The Popular Science Monthly, Vol.16.
- 13 ハリス, V.・後藤和雄(2003)『ガウランド 日本考古学の父』大英博物館・朝日新聞社。
- 14 上田宏範(2006)『ロメイン・ヒッチコック 滞日二か年の足跡』橿原考古学協会。

第4章

美男に在す八尾地蔵：八尾でオペラを創造する

Creating Opera of Yao: A Libretto on Yao Jizo or Ksitigarbha Stone Statue

志賀山勢州 (Shigayama Seshu)

1. 私の八尾地蔵さま

「八尾には、日本有数の美男地蔵がいっぱいいるんだって」と、友人が問うた。「そう！日本の三大地蔵といわれている、それは美男のりりしいお地蔵様がおいでなの！」私は、誇らしい気分で胸を張って応えた。八尾市本町五丁目の、山号を初日山、寺号を常光寺という、臨済宗南禅寺派に属するお寺のご本尊、地蔵菩薩のことである。八尾地蔵と呼ばれて親しまれている、あのお地蔵さんのことだ。

江戸中期に発行された『諸国地蔵尊番付』には、西の大関は河内の八尾地蔵と載せられている。その頃にはまだ、横綱という職責はなかった。私は、このお地蔵さんが大好きだった。私達が作った、今や、地元だけにとどまらず、又、幅広い芸術創造作品の中にあっても、凜と輝き、多くの人達の心を惹きつけてあまりある八尾の誇り、私達市民の大切な財産。ここに・・・ 創作オペラかわち歌しばい「美男におわす八尾地蔵」を私達は持っている。

これは、身の程を弁えぬ、不遜なまでの過剰な自信、暴挙といっても良い程の私の想い、強い希いから生まれたといっってよい。私個人にとっては勿論、一緒に力を尽くし、この作品を世の中に送り出した仲間達にとっても、何にもまして大切な、かけがえのない、真にいとしい舞台芸術作品なのだ。

2. 狂言「八尾」

この作品が生まれるキッカケとなったのは、狂言に「八尾」という演目のあることを知ったことだった。

「八尾市史」によると、狂言「八尾」は、江戸初期に刊行された狂言記に収められていたとあり、一方「河内名所図会」には、7月14日の縁日の図というのが載せられてあり、江戸時代に於いて、地蔵盆会が盛大に行われ、善男善女の参詣客で大いに賑わった、と記されている。

この、狂言「八尾」というのは、まさに、初日山常光寺のご本尊、小野篁（おののたかむら）作と伝えられている地蔵菩薩が、その物語の中心になっている。

小野篁という人は実在した人物で、六道の辻まで行って来てお地蔵様や閻魔大王にお会いしてきたという参議、平安時代の初期に京にいたといわれる方で、八尾地蔵は、等身大の木彫立像として、千百年以上の歴史を持つ、美男のお地蔵さまだ。

3. 亡者と閻魔

狂言「八尾」は、娑婆（河内の国八尾の里）から冥土へ向かう閻魔大王への八尾地蔵からの文をたずさえた一人の亡者と、罪人を待ちかまえる地獄の閻魔大王が主役というもので、狂言には非常に珍しく、地謡、鼓や太鼓、笛などのお囃子が入り、登場人物の、亡者と閻魔大王が二人ともに、空吹（うそふき）武悪（ぶあく）の面をかけているという、他の狂言ではめったにない形で上演されている。

美男で評判だった八尾地蔵が、実は、閻魔大王の稚児さんだったという、奇想天外なホモセクシアルがテーマになった、実にユニークな狂言として出来上がっている。

私は、故茂山千之丞氏とその一門によるこの狂言の公演を、プリズムホールにおいて実現させたが（1991年）、この時、心の中に湧き上がってきた、とどめようとしてとどまらぬ、激しい炎のような感情、胸の奥深いところから奔流となってほとばしり出た強い想いが、創作オペラかわち歌しばい「美男におわす八尾地蔵」を創作する端緒となった。

4. 「ぶんこん」

私達は、八尾の文化を根底から支え、さまざまな文化振興の一助を担っていると密かに自負する、八尾市民文化懇話会という自主組織を持っていた（通称「ぶんこん」）。

これは、八尾市に文化会館が建設されることがきまり、市からの呼びかけに応じて集まった有識者、専門分野を含む、市民35人が、いろんな構想や希望などを1年かけて話し合った、市民文化会議の主たるメンバーと他のさまざまな分野で核となって活躍する人達が集い、1986年3月にうぶ声を上げた市民団体である。

今や、大切だった大事な仲間のほとんどが、浄土へ籍を移してしまった・・・

あの頃は、毎月「ぶんこん」という会報を発行し、文化フォーラムや小さな音楽会、「ぶんこん展」としての美術展などの催し、秋には、いろんな事業やパフォーマンスを展開するなど、幅広い活動をしていた。

5. 「オペラを作ろう！」

そんなときだった。「ぶんこん」の会長だった作家の故かたおかしろうさん、事務局長で頑張っていた故柏木十四夫さんに声をかけ、忘れもしない、プリズムの喫茶室の片角で、「常光寺のお地藏さまを中心にしたオペラを作ろう！狂言には負けていられない。地藏、亡者、閻魔の3人が主役の、どこにもない創作オペラよ。台本は、あなた、かたおかしろうさん、作曲は、いろいろ一緒に仕事をして来た中村茂隆先生、主役の3人の歌い手も、私の中ではもう決まっているの。みんなが力をひとつにすれば、絶対実現できるわよ」といった。

火山が噴火するような激しい私の勢いに、2人は辟易しながらも、何とか考えてみようということになり、時をかけて話し合い、「ぶんこん」の会議にかけ、ついに、勝算があったわけでも、何の保証があるわけでもなかったこの突拍子もない企画に、みなは決意を固め、何とかなる！いや、何としても成功させるのだ！矢は放たれてしまったと、ひたすら創作オペラの実現にとり組み、少しずつ少しずつ一つになって走り出した。

そして、(財)大阪府文化振興財団に、「大阪府芸術劇場」の申請を申し入れ、選考の結果、平成5年度の公演として決定し、協賛大阪府、大阪府文化振興財団、それに、八尾市、八尾市教育委員会、八尾市文化振興事業団(当時)、八尾市商工会議所など18団体の力添えを得て、1993年8月18日の初演が決まった。

6. 出来ないことはない！

各テレビ局、新聞社などへ強烈なアピールを送り、稽古は、顕証寺や集会所、幼稚園や、学校の講堂、プリズムホールの練習室などを使って行い、美術担当は故西中博画伯、制作委員長は故井上満寿夫氏、衣装デザインは私がして、友人やぶんこん会員の人達に縫ってもらい、資金集めのたしにと「ぶんこん特別展」を開催し、絵画や書、染色工芸品、革細工など、会員協力による展示即売会をやったり、八尾の街々を走りまわって協賛して下さる方を探したり、それぞれが何十枚もの葉書を書いて呼びかけたり、出来る事は何でもやった。

創作オペラかわち歌しばいのタイトルの「美男におわす八尾地藏」は、私が、河内どんこう35号に書いた、八尾地藏についての拙文をそのまま使っている。

作：かたおかしろう 作曲：中村茂隆 指揮：船曳圭一郎 演出・振付・キャスティングプロデューズ：志賀山勢川ソリストは、八尾地藏晴雅彦、亡者西垣俊朗、閻魔大王新川和孝、(いずれも関西二期会)、私がずっと心に暖めていた、これ以上はいないという素晴らしい歌い手達。合唱、アンサンブル、童子や踊り手には、地元の人達の協力を得た。みんな、夢中になって燃えていた。

7. 仰天手段って？

公演が近づき、NHK、朝日放送、関西テレビなどが、稽古場風景、常光寺のお地藏さんや本堂、片岡英逸前住職の話などの取材を含め、「八尾市民による快挙」・「河内弁オペラ誕生」と夕方のゴールデンタイムにそれぞれ、かなりの時間をさいてオンエアしてくれ、そのおかげか、あれよあれよといっているうちに、どんどんチケットが売れ始め、400席ほどの小ホールでは収容できない人数にふくれ上がり、前代未聞の仰天手段を敢行した。のちのちまで、こんなことは聞いたことがないと驚かれた、公演3日前に大ホールに変えたのだ。

スタッフとの打ち合わせや仕込みも、すでに小ホールの予定ですませてあった。かかわっていた人間のすべてがびっくりし、信じられないととまどったが、だが、これしか方法がないのだと、真夜中のような時間から、各方面に連絡、スタッフ、キャストとはすぐさま段取りを打ち合わせ、またたく間に、大ホールでの公演の覚悟、準備はととのった。

もしかしたら??・・・と、最初から大ホールも私は押さえていた。ソリスト、合唱、アンサンブルなど、舞台上に乗る人間は60人余りになる。寸法からいっても、やはりこれは、大ホールが必要な作品ではあったのだ。

8. やった!

1993年8月18日、ついにやってきた公演当日は、開場の何時間も前からつめかけた観客は劇場周辺に長蛇の列を作り、開演してからは、常のオペラの客席とは異なり、拍手が湧き、笑いが溢れ、涙にむせび、終幕は全員の手拍子と歓声のうちに幕は降りた。

回収したアンケートは驚きの95%、そのほとんどが、とても良かったと好意に満ちたもので、八尾市民が、みんなで、この作品を応援してくれていると感動した。



初演の折のプログラムに、大阪府文化振興財団事務局長木元達也氏(当時)が、地元まつわる歴史や文化を今回のように活かすこと、地元人間が参画し、地域の施設を活用、地域の文化蓄積を活かす事業が、新しく文化を育む・・・と書いて下さっている。

その後、1995年に、第645回府民劇場として再演。土俗性も地域性もしっかり根ざしつつ、市民も行政もひとつになり、八尾発信の創造舞台として更に飛躍出来たと自負している。

1997年には、阪神・淡路大震災の被災者への応援メッセージとして、神戸松方ホールで、兵庫の地元の子供達にもこのオペラへの参加を求め、近松門左衛門原作の楽劇、台本菅沼潤「曾根崎心中」と2本立てで上演。

2002年には、八尾市・八尾市文化振興事業団主催のもと、この作品のもととなった狂言「八尾」を茂山千之丞とその一門との2本立てで公演し、大阪舞台芸術奨励賞を受賞した。

そして2008年、八尾市制施行60周年、プリズムホール開館20周年の記念事業の一つとして、桂雀々の落語「地獄八

景亡者戯」の2本立てで通算5回目の公演を実現。

この頃はまだ元気に、先頭に立って支えて下さっていた作家の故井上満寿夫さんが、地域の文化振興にとって重要なこととして、地域に広く専門的な人材を育成する環境・機能を有すること、文化・芸術振興を志向する恒常的な市民集団が存在すること、文化振興も、環境・福祉・教育とともに、公共性を有していること、とプログラムに書いていらっしゃる。

9. 道鏡のこと

「美男におわす八尾地蔵」の他にも、私達は、1998年12月、2日間にわたって、八尾地蔵のスタッフと同じメンバーを中心に、創作オペラかわち歌しばいの2作目「若き日の道鏡」作:かたおかしろう、作曲:中村茂隆、指揮:船曳圭一郎、演出・振付・衣装デザイン・総合プロデュース:志賀山勢州、を制作・公演。主役の道鏡にはこの人の体のあくときを・・・と、日程を考えたほど思い入れが強かった、井原秀人(関西歌劇団)、孝謙天皇には西垣千賀子(関西二期会)、友情出演に落語家の桂小米朝(現桂米團治)を迎え、スケールの大きな作品を、八尾市制施行50周年、プリズムホール開館10周年事業として、市民と行政が共働して創造、大ホールを2日間いっぱいにすることが出来た。

この作品は、「美男におわす八尾地蔵」初演の幕が降りたとき、「次は道鏡だ!」と、私は叫んだらしいのだが、ずっと胸にあたためていたもので、5年後に、ようやくその希いが叶った。

高僧、道鏡禅師は、八尾は弓削が生んだ大人物だが、歴史上、希にみる悪僧、などと汚名を着せられ、今日まで、ゆがめられて来たものを、真実の姿を明らかにし、復権させたいという、地元市民の熱い願とともに、とり組んだものだ。都を襲った、病魔、疱瘡の大流行の中にとび込んで、人々を救い、苦業の末身につけた薬草への深い知識をもって、庶民の力になった道鏡禅師。一生をつらぬいて、孝謙女帝との愛を生きた道鏡を、真実の人として描きたかったのだ。私達はいつも、郷土の題材、地域の文化遺産などにテーマを求め、創造舞台を実現したいと考えている。

10. 地域文化の魅力

これまでも、小さなパフォーマンスや朗読で「琴になった八尾木」や、鉄鉢が空を飛ぶという信貴山縁起の中の

話（作かたおかしろう）、タンゴの生演奏に乗せて、俊徳丸の物語（作井上満寿夫）など、私が朗読するなど、いろんな形で表現してきた。

2008年2月には、「なりひらの恋—高安の女」伊勢物語よりを上演。これは、なりひらと高安の女を考える会、八尾市、八尾市文化振興事業団の主催で、作井上満寿夫、あべ泉、演出・振付志賀山勢州、出演には狂言関係、新劇の俳優、オペラ歌手など、巾広い人材を求め、八尾市日本舞踊協会、和萌会の踊り手を加え、昼の部夜の部を超満員にして実施することが叶った。

これは原点「伊勢物語」の「筒井筒の段」からの取材で、手ずからしゃもじをとってご飯を盛る高安の女を見て、いとわしくなり通わなくなった業平に、女はその後も和歌を送り待ちつづけた・・・という内容で、雅びな男と、ひたむきな高安の女、なりひらの妻の女2人を中心に、芝居を展開した。これも、八尾の魅力を深め、地域文化を育て発信し、芸術文化を通じ誰もが心豊かに暮らせるまちを目指すという、八尾市に住むものとして、小さな歩みのひとつになればと、井上満寿夫さんとともに、創造した作品である。



11. もう一度の「美男におわす八尾地蔵」

多くの勿体ない人々を浄土に送ってしまった今日だが、これからの日本が世界に向かって勝負出来るのは、文化の力である。日本人が持つ、自然を愛でる豊かな心、しなや

かな感性による、芸術文化の創造、一人の人間としての魂の輝き、人の手や目の確かさをもう一度考えなおして、しっかりと歩いてゆくことが、これからの日本を担う若い人達への、私の心からの希いであり、祈りだ。これまで、私達が培ってきたさまざまなこと、役に立つことがあれば、どんなことでも応援し、手伝いたい。これからもまだまだ創作活動の中でいきいきと生きて行きたいと、私は考えている。

今年（2013）の秋、11月8日（金曜日）プリズムホールにおいて、初演から20年を経て、今一度、私達の宝、創作オペラかわち歌しばい「美男におわす八尾地蔵」を上演する機会に恵まれた。八尾市文化芸術芸能祭60回記念として、八尾市文化芸術芸能祭実行委員会主催による公演だ。素晴らしいソリスト、指揮者、アンサンブルの中心メンバー、スタッフ、キャストみな、20年前からお互いに手を取り合い、共に作ってきたオリジナルの人達、そしてそこに、新たなバレエや河内音頭の人達にも参加していただき、最高の舞台を創造する！何と嬉しく有難いこと！

みんなの心と情熱を籠め、それぞれの人間のやるべき事にいのちをかけて、もう一度、じっくりと取り組み、良い舞台を作り上げよう。豊かな楽しい時間は、魂と躯を元気にさせてくれるから。

おんかかかびさんまえいそわか



第 5 章

西村市郎右衛門と講念仏踊り

Mr. Nishimura Ichiro'emon and Konenbutsu Dance

坂上弘子 (Sakajo Hiroko)

1. 大和川の付け替え

宝永元年 (1704) 大和川が付け替えられたことは、周知の歴史上の事実である。大和川と石川が合流する地点、現在の柏原市安堂のところで、直角に西に曲げられ、堺に流された。河内を流れていた多くの支流も玉串川と久宝寺川 (長瀬川) にまとめられ流域跡には新田ができた。また、東大阪市や大東市地域では洪水が少なくなり、新田もでき、木綿栽培による経済効果はいうまでもなく、河内の経済を変革した。

しかし、付け替えは、全てハッピーではなかった。付け替え後の新大和川は南の方から流れてくる水を、東西に遮断したことになったため、新大和川の北側の地域、太田・弓削・沼・田井中・木の本などの当時の志紀郡の村々は水不足になってしまった。

2. 付け替えに纏わる悲話

付け替えのマイナス面を象徴する悲話が「講念仏踊りの伝承」である (講は甲・小・子・古・呼・功などの字も用いている)。

ある年の夏、日照りが続き新大和川の北側の村々は旱魃にさらされ、村人は新大和川から、水を引きたいと願った。そこで弓削村の庄屋西村市郎右衛門は奮起して、新大和川に樋を切って水を通したい旨を大坂の代官所に願い出た。しかし許されない。日照りに苦しむ村人を見かねた庄屋西村市郎右衛門は代官所すなわち幕府の許可なくして、覚悟のうえ樋を切り旱魃から村人を救ったという。当然、村人は喜んだが、西村市郎右衛門は処刑されお家断絶になった。それを知った村人は悲しみ嘆き、弔いの念仏を唱えていた。そこへ旅の僧が通りかかり、念仏に合わせた踊りを教えた。この旅の僧についても考えなければならないが。以後、村人は西村市郎右衛門を偲ぶ「講念仏踊り」と称する踊りを

毎年の盆には踊った。白装束で鉦と太鼓の囃子で踊る。これがこの地域における盆踊りになり、それなりに続いたという話である。

この話の真偽はわからないが、付け替えの欠点として、水不足の地域ができたことを物語るものであり、この話に似た事実があつて、誇張され脚色されて話ができ、後々まで実話として伝えられてきたのかもしれない。

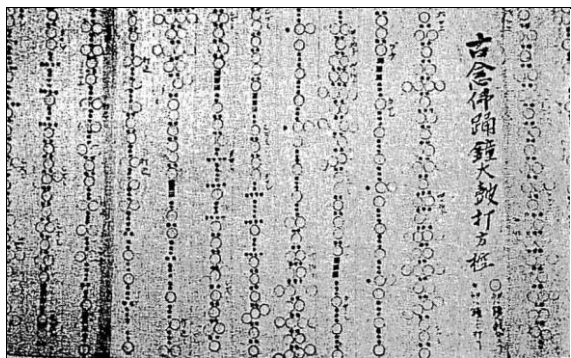
とにかく大正 5 年には西村市郎右衛門を顕彰する碑ができています。現在の JR 志紀駅の東、JR 大和路線と外環状線の立体交差点の下に建てられている。また、大正 7 年には毎日新聞で「念仏踊由来 志紀村の義人」として連載されている。やはり義民的精神にはだれしも心を打たれる、まして庄屋が犠牲になり村人を救ったというのであるから、忘れられない美しい話である。

3. 講念仏踊りの歴史とその再現

この踊りが、いつから始まったのか確証はなく、不明であるが、明治・大正まで続いたようである。明治 24 年の踊りの記録や大正 6 年 8 月「小念佛入費」、同 14 年 8 月 15 日付、田井中の安傳寺過去帳に同寺住職の「念仏踊ニ就テ」という記録が残っている。また昭和 8 年「講念仏踊覚書」には、鉦と太鼓の打ち方や掛け声が記録されているので、先の戦争前までこの踊りは残っていたようである。戦中はどうなっていたかは分からないが、おそらく中断されていたのであろう。

昭和 60 年ごろ、田井中で元大阪市内の小学校教員であった堀内末一氏を中心になって指導し、この踊りを復活された。けれども平成 16 年(2004)「大和川付け替え 300 年記念」のころには、途絶えてしまっていた。

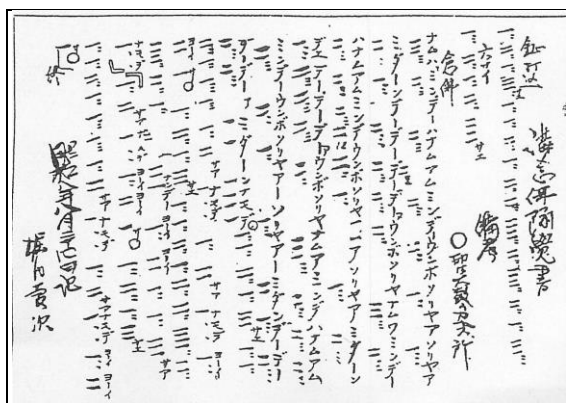
古念仏踊鐘大鼓打方控



(明治11年8月10日新調)

(出所) 澤井 (1978) 36頁。

講念仏踊覚書



(昭和8年8月)

(出所) 田井中郷土史編纂実行委員会(1996)125頁。

この記念の年に、私は、この踊りを復活したいと思った。手係りは田井中の堀内末一氏に関係することだけ。当時役所で環境の仕事をしておられた越道氏が奔走し、曙川東小学校教員の兼田小百合先生が堀内氏の指導をうけ、踊りを覚えておられることを調べてくれた。早速、兼田先生に会い、この時期に復活したい旨をお願いした。兼田先生の指導で地区の福祉委員会が母体となって子ども会活動として「講念仏踊り」を再現、復活していただくことになった。

兼田先生の努力と子どもたちのガンバリ、さらに曙川東地区福祉委員会の役員さんの世話が大きく、復元・保存・継続が順調にしている。現在も曙川東福祉委員会の財産として健在である。その経過と現状については「第15章 講念仏踊り」をご高覧いただきたい。

4. 西村市郎右衛門について

さて、話を西村市郎右衛門に戻そう。私なりに市郎右衛門を検証してみる。入手できた限りの下記の文献で弓削村庄屋西村市郎右衛門を検証すると、

①八尾市立歴史民俗資料館蔵文書

「京保十九年 用水組合村々定證文 寅八月 太子堂村」に河内志紀郡西弓削村庄屋市郎右衛門以下、十名の署名押印の記事がある。

① 紀郡太田村庄屋柏原家文書

宝暦六年・同十年・明和元年・同七年・安永五年の記事に弓ヶ村庄屋 市郎右衛門の名がみえる。

③ 同家文書 「河州志紀郡 弓削村市郎右衛門家相續一件書」に、●印は本家の市郎右衛門家、○印は分家の五兵衛家との系図がある。

(分家)

(本家)

○分家元祖 五兵衛

●一代 五郎左衛門

○二代 五兵衛

●二代 市郎右衛門

○三代 五兵衛

●三代 儀兵衛(法名 得甫)

○四代 五兵衛

●四代 市郎右衛門

●五代 市郎右衛門(法名 得誠)

(※ 本家と分家の間で養子に入る場合もある)

④ 柏原市雁多尾畑の光徳寺(こうとくじ)は西村家の菩提寺であり西村一族の墓碑群がある。そのうち2基に、法名から③系図に見られる、三代儀兵衛と五代市郎右衛門の墓碑が判明できる。三代儀兵衛は享保八年(1723)に没し、五代市郎右衛門は安永四年(1775)に没していることが解る。

5. 西村市郎右衛門は付け替え後も生存していた

以上から、弓削村庄屋西村市郎右衛門は付け替え後の記録にあり、実在しているが「講念仏踊り」の主人公であったかどうか解らない。

また③の系図をみるかぎり、お家断絶などしていない。系図に年号はないが、二代目・四代目・五代目の3人の市郎右衛門がいる。前記、光徳寺墓碑銘から、付け替えの宝

永元年(1704)の後には、四代目、五代目の市郎右衛門は生存していたことになる。

6. 義民西村市郎右衛門

それでは、義民の西村市郎右衛門はいなかったのでしょうか。しかしまだ結論を出すのは早い。この事件が新大和川の付け替えの時に起こったという確証はないので、もし、もっと前の話だとすると、義民の市郎右衛門がいたことも考えられる。たとえば二代目の市郎右衛門だとすると、三代目は儀兵衛の名に変わっているのが、注目される。何故かわったのか、探求する必要があると思える。やはり、今後とも新しい史料を探す努力をすれば、いつか講念仏踊りの西村市郎右衛門の存在を説明できるかもしれない。

7. 語り継がれる西村市郎右衛門伝承と講念仏踊り

この伝承と踊りは地元の誇りである。伝統を絶やさないでいれば、いつの日か解明できる日が来るのではなかろうか。言い辛いことではあるが、やはり講念仏踊りの話は創られたものではなかったか、大和川付け替えの欠陥に苦しみながらも耐え抜いた村人の心意気を顕すためであろう人物を主役にしたのか。正直解らないのであるが、日照りで困った時、奉行沙汰になる程ではないが、水の「もめごと」があった時、庄屋さんが治めてくれたのかも知れない。あるいは、この話同様の事実があったが、何らかの理由で、打ち首は免れたか。とにかく犠牲的精神の持ち主で、善政をしき、村人の崇敬をあつめ慕われるあまり、エスカレートし、踊りの好きな河内の風土や人情にマッチして、美談ができあがっていった。なんといっても語り継がれ踊り継がれてきた、この話と踊りは地元の誇りである。

参考文献

澤井浩三(1978)『八尾の古文化財』(その5: 民俗・生活) 八尾市総務部広聴課。

大森靖彦(1984)「志紀の功念仏踊: 音譜の復元について」『河内どんこう』第20号。

田井中郷土史編纂実行委員会(1996)『戦後50年記念 田井中郷土史』田井中地区連合自治会。

第6章

ブータンの農業指導に捧げたダショー—西岡京治

Dasho Keiji Nishioka and His Supports for Agriculture in Bhutan

西辻 豊 (Nishitsuji Yutaka)

1. はじめに

平成23年の秋、国賓として来日中のブータン国王と王妃が京都・金閣寺を訪れた時の新聞記事で、ご両人が小雨の中で、金閣寺住職に傘を差し掛けておられる写真が掲載されていたのが、ご両人の心の優しさを感じさせ印象に残っている。

ブータンはヒマラヤ山脈に接し、中国とインドに挟まれた人口70万人、面積は九州と同じくらいの小さな国である。ブータンが最近になって特に注目されるようになったのは、前国王が「国民総幸福量」という考え方を提唱されたことからだ。世界各国では経済発展によって国民が幸福になれるとの考え方で、国民総生産(GNP)を指標にして比較をしている中で、ブータンでは伝統や自然に配慮し、健康、教育、文化などと生活水準のバランスを求める仏教的な価値観を基本にしていて、国民の大多数は「自分は幸福である」と考えている。

2. 国王から「ダショー」の称号を受ける

このブータンで農業指導に一生を捧げ、立派な業績をあげ国王から「ダショー」の称号を受けられた西岡京治^{けいじ}さんは八尾市出身の人だ。

西岡氏がブータンで亡くなられた時ブータン国王は国葬を決定し、農林大臣が葬儀委員長として指揮を執り、3日間にわたりお通夜が行われ3,000人が葬儀に参列、沿道には5,000人を越える人達が棺を見送ったと伝えられている。

西岡氏の業績については、多くの出版物があり、その業績をたたえ、国際協力の手本として語られることが多くなっているので、ここではそれらの内容について詳しくは触れないが、経済発展を追い求め、国民総生産を高めることだけでは国民の幸福を求めることに応えられないということを議論するようになった今、ブータン国王から「ダショ

ー」という称号を与えられた西岡氏の生き方を学ぶことによって、幸福追求の一つの道、国際協力のあり方を知ることが出来ると思い、『河内どんこう』に掲載された40号、41号から西岡氏の業績をたどってみたいと思う。

3. 学術調査隊から農業指導者に

西岡京治氏は1933年に京成で生まれ、終戦により八尾市本町に復員され、大阪府立八尾高校、大阪府立大学農学部を卒業後大学院に残り、大阪市立大学の研究生となり、1958年に西北ネパール学術調査隊に参加され、二条大麦、六条大麦の野生種を発見され、大麦栽培史の空白を補充する重要な業績を残した。

その後大阪府立大学の東北ネパール学術調査隊の副隊長として、半年間チベットに滞在されたが、1964年に国際協力事業団よりコロボ計画専門家として、ブータン政府農林省農業局に勤務されたのを契機として、ブータンで28年間過ごすことになる。

上記の経歴からみて、西岡京治氏は研究者としての印象を受けるが、氏はブータンの人達と共に農業に従事し多大な成果をあげられた実務的指導者でもあった。日本で始めて本格的なブータン探検記を書かれ、ブータン政府と深い関わりがある大阪府立大学の中尾佐助氏は、直弟子の西岡氏がブータン行きを希望した時、「彼はブータン人と良くあうと考えた」といい、お世話をされている。また、大阪市立大学の川喜田二郎教授は西岡氏のブータン入りに際し、「最初の1年間は技術指導よりも地域の人達に溶け込むことを考えよ」と指導され、氏もそのことを忠実に実践され、ブータンの人達から信頼され、慕われることになったといえる。

ブータン政府要人も、「西岡京治氏は民族衣装・ゴがよく似合い、ゾンガ語を話し、ブータンの食物を食べ、ブータ

ン人と一緒に働き、ダショー西岡はブータン人である」といったが、このようにいわれるまでには新婚まもなく主人と一緒にブータンに行かれた夫人と共に随分苦労されたそうである。

4. 焼き畑農業を定住農耕に

1964年からの2年間のコロンボ計画専門家としての実績が認められ、1966年にはパロ県ボンデ村に農場を開設して農業指導が本格的に始まる。この農場では日本式の野菜作りから始まり、大根、タマネギ、ジャガイモなどが良く出来、ブータンになかったトマトやキャベツも大成功を収め、各地域で農業指導が行われていく。

1972年からはブータン中央部シェムガン県の開発計画のための調査を、1975年にはブータン政府による第4次5カ年計画立案に参画、翌1976年からはシェムガン県の開発計画の責任者としての仕事が始まる。

シェムガン県の開発事業は、今まで焼き畑農業をしてきた山岳地帯を開発のための基盤整備からスタートするもので、農民が直接参加して計画を立案し、水田の開発、水路、道路、橋の建設、村民の生活基盤整備をするという「新村建設事業」である。

西岡氏は焼き畑農民の中に入っていく、人々との対話を続け理解を求め、協力して貰うことにより、最終的には道路を200km、水路366本、そして水田700ヘクタールを開き、5万数千人の人達を焼き畑農耕から定住農耕に変えたといわれている。

5. 父親以上と慕われる教育者

1982年からは第5次5カ年計画に参画、日本政府の援助を受けパロのボンデ農場に国立農業機械化センターを発足させ、翌年には農具の製造、改良部門を強化して農業の機械化、効率化を進め農業指導が各地に広がっていった。1986年には国立種苗センターが出来、パロの農夫達は西岡氏のことを「彼は私達と住み、我々の生活水準を向上させ、父親以上のものである」といわずまでになっている。

1992年5月大阪府立大学で行われた「西岡京治氏を偲ぶ会」で西岡氏と20年以上家族同士の付き合いをしてこられた東京大学医学系大学院の大井玄教授は、西岡氏の業績を国際協力の手本であると話しておられる。国際協力が成功を収めるには、協力国が自立性を養い、協力事業が持続することで生活向上につながる必要がある。西岡氏はこの三点を見事に成し遂げられた「文化人類学者」であり、さらに、単なる学者でなく、優れた教育者であるといっておられる。

西岡氏のことを知った八尾市は、当時の山脇悦司市長が八尾市で西岡氏の名前を冠した基金を設け、海外協力に活動する人達に対する支援事業を興そうと考え、西岡夫人にそのことをお願いに参ったが、夫人は西岡京治氏の心情を思いそのようなことを「主人は望まない」としてお断りになった。このような立派な日本人が八尾市から出たことに感謝し、その精神を市政に活かすことで西岡氏のご冥福を祈ることとした。

②知と創造性

Wisdom and Creativity



環山楼

(八尾小学校内)

The old building of *Kanzanro* an old private school, which is located at Yao Elementary School

第7章

八尾の教育基盤を築いた環山楼

Kanzanro: Establishing Yao's Educational Platform

坂上弘子 (Sakajo Hiroko)

1. はじめに

八尾市立八尾小学校校門の南側に、八尾市指定文化財の古い和風の建物がある。「環山楼」という。この建物は、いつ頃、だれが、何のために造られたのだろうか。

環山楼は学塾あるいは私塾といわれる。だから、学問をする所であった。環山楼の創立については、平野郷（現大阪市平野区）の学問所、がんすいどう含翠堂から始めなければならない。

写真7-1 八尾小学校の敷地内にある環山楼



(出所) 筆者撮影

2. 平野・含翠堂

平野郷は、平安時代初期の征夷大將軍として知られる坂上田村麻呂の第二子の坂上広野麻呂がくまた杭全荘を所領したことに始まる。十五世紀ごろから、坂上七名家と呼ばれる諸家（土橋家・三上家・成安家・末吉家・辻菟家など）の人々を中心となり地域開発、自主運営に努力し、平野自治都市を発展させた。

享保二年(1717)、平野郷でつちほしともなお土橋友直が中心となって含翠堂（がんすいどうがんすいどう）が創設された。当時、碩学者であった伊藤東涯・三宅石庵・五井持軒・中井しゅうあん整菴・藤澤とうがい東咳などを講師に招き、郷民の教化活動はもとより、困窮民の救済活動的なこともしていたらしい。その運営も全て七名家により自治的におこなわれた。

3. 含翠堂と八尾の若者

この含翠堂に八尾郷から通うおうぎやじんざぶろう扇子屋甚三郎という若者がいた。扇子屋甚三郎は含翠堂の当時の中心人物であったと思われるつちほしむねのぶ土橋宗信に、伊藤東涯が平野に来られた時は連絡してほしいと頼んでおいた。

4. 伊藤東涯が八尾に来た

伊藤東涯が含翠堂に来た。伊藤東涯が書き残した『初度含翠堂行』（天理大学付属図書館古義堂文庫蔵）によると、享保十二年(1727)、五月九日、伊藤東涯は京都堀川を出発して、平野に赴き含翠堂に着き、一泊する。十日はそこで論語の講義をする。翌十一日、知らせを受けた扇子屋甚三郎たち（東涯の『初見帳』によると麴屋源兵衛・堺屋吉右衛門・松下一郎右衛門・小山屋善七・同 四郎兵衛・塩屋傳右衛門の6名）が、伊藤東涯を平野に出迎え、久宝寺村を通過して八尾寺内村に招いてきた。

上記の『初度含翠堂行』に、この様子が書かれている。「(略) 寺内村にいたる。某氏の別荘邑の東南にあり、亭あり、上に小楼あり、東南にむかふ、松月亭と云」とある、某氏とは寺内村の豪商石田利清のこと、当時は石田利清のみならず、石田家一族は小山屋の屋号で油や肥料を売る商売を営み繁盛していた。京都大学総合博物館蔵の「八尾寺内村屋敷地惣絵図」によると小山屋は18の屋敷がある。村の東南にあるという松月亭、小楼の場所はさんや産屋とよばれ、現在の八尾市役所西館の裏(西側)であった。その小楼からは、高安山から二上山、金剛山など見渡せた。ここで東涯は講筵をする。これが環山楼の始まりといえる。

5. 「環山楼」と命名

享保12年(1727)のことである。石田利清はその小楼の命名を東涯に請うと、東涯は周りに山々を見渡せることから

「環山楼」と名付けた。このことは『環山楼記』・「環山楼記(記文)」に東涯が記している。この楼記(108.3cm、42.6cm、2.5cm)の板は現在、市内の某家で所有されているのが、環山楼の唯一の遺物である。享保12年5月11日、それ以来、環山楼は近隣の若者が集う塾になったと考えられ、郷民教化の基礎となった。

6. 扇子屋甚三郎の発想

以上が環山楼のできた経過である。河内で数少ない塾や学問所となった環山楼は大きく評価されてよいと思う。環山楼を創設したのは、場所を提供した石田利清とされているが、そこには伊藤東涯を八尾に招いた扇子屋甚三郎の存在が大きかった。彼の東涯を八尾に招くという思いつきが、環山楼の創設につながり、若者が学ぶことに目覚め、八尾のまちづくりに供した、その影響は大きい。

写真7-2 法蔵寺本堂と環山楼関係者墓群



(出所) 筆者撮影

7. なぜ伊藤東涯を招聘したか

彼は平野・含翠堂の講師を招くのに、なぜ伊藤東涯を希望したのか。含翠堂には、上記のように、享保9年(1724)に大坂懐徳堂を開設し、学主でもあった三宅万年や当時の碩学者といわれる学者が何人もいたにもかかわらず、伊藤東涯を指名した。

梅溪昇『大坂学問史の周辺』によると、含翠堂では、三宅万年は享保3年に1回、9年に2回、「孟子」を講義しているのに対し、伊藤東涯は享保12年に4回、「論語」の講義をしている。孔・孟の差異など私には解らないけれども、東涯は、父仁斎より学んだ古義派の(朱子学などを媒体としない)論語本来の意を説いたのではなかろうか。そういうことを知ってか知らずか、扇子屋甚三郎は伊藤東涯を八尾によんできた。

寛政2年(1790)、幕府による「寛政異学の禁」で朱子学

以外は禁止される。その講義内容の記録がないのが残念だが、おそらく含翠堂と同じように古義堂派の論語を講じたのであろうと思う。その論語の解釈が若者をどのように変えたのか知りたいものである。

8. 麟角堂

戦国時代、久宝寺に久宝寺城主渋川満貞が学者を招いたことを創設とされる学問所「麟角堂」があった。天正3年(1575)に安井定重(久宝寺寺内町を掌握する安井家の重鎮)が復興し、堺の学者今村道和を招き漢籍の講義をした。江戸時代には伊藤東涯が訪れ講筵をした。『論語』の講義をしたに違いない。当時、麟角堂に祀っていたと伝えられる「孔子画像」には享保2年(1717)の伊藤長胤(東涯)の賛がある。八尾寺内村に来る10年前のことである。扇子屋甚三郎はこの影響を受け「わが村にも伊藤東涯先生をお迎えし、『論語』の勉強をしたい」と思ったのかもしれない。

大正2年再び安田覚三郎により復活され、西村天囚が開講、大正11年には私立学舎の許可も受け、郷民の漢学の道を開いた。

9. その後の環山楼

環山楼は近隣の学問を志す若者たちの場となったと考えられるが、寛政年間(1789~1800)をピークに約100年間存続したと思われ、石田家の家運が傾きかけるのに沿って環山楼も衰退の道をたどっていく。だから環山楼は石田家一族のための私塾だったという見解もある。

10. 『環山楼記』と『環翠楼記』

環山楼は同寺内町の西尾三右衛門家に引き継がれたが、建物と共に文書など、どの程度までが西尾家に移ったかは分からない。また、西尾家のもとで学塾としての性格は保たれていたのかどうか、残念ながら不明である。上記の『環山楼記』は西尾家には移らなかったらしく、西尾家は伊藤東涯の曾孫である伊藤重光に揮毫を依頼している。それに答えて伊藤重光は、曾祖父伊藤東涯の文書を祖父の伊藤東所が写し集めた『紹述先生(伊藤東涯)文集』を参考にした。しかし、そこには環山楼を環翠楼と記されていたため、伊藤重光は『環翠楼記』と揮毫した。大正5年の大阪府『史蹟調査委員会会報(二)』「史蹟講演並郷土史資料展覧会、八尾会場記事」には環翠楼額・環翠楼記は西尾三右衛門蔵と

ある。どうやら環翠楼額もあったようであるが。今、環翠楼記は市内某家で保管されている。

11. おわりに：環山楼を大切に

このように、環山楼関係文書は環山楼記・環翠楼記、が残されているのみで1点の文書も無い。今後の出現を待つ

しかない。しかし、一部とはいえ建物が残った。これは大きな財産である。石田利清がいつ建てたかは分からないが、少なくとも享保12年(1727)年には存在した建物である。この座敷で、八尾近隣の若者が生き方や未来について、青春を語り合ったと想いたい。そして、彼らが八尾の土地柄をつくりあげ、八尾の歴史の一齣になったことは確かである。

参考文献

- 梅溪昇（1991）『大坂学問史の周辺』思文閣出版。
坂上弘子(2002)『八尾の学塾舎環山楼主石田家資料』
天理大学付属図書館（2005）『古義堂文庫目録』（復刻版）八木書店。
八尾市(1958)『八尾市史』八尾市教育委員会。
八尾市(1960)『八尾市史：資料編』八尾市教育委員会。
やお文化協会(2011)『八尾の史跡』NPO 法人やお文化協会。

第 8 章

八尾の郷土食を保存・革新する

Preserving and Reforming Local Dishes of Yao

澤田 参子 (Sawada Sanko)

1. 八尾の食文化

近年、さまざまな食をめぐる問題が顕在化しており、生活意識や生活様式の多様化を背景として、加工食品や外食、調理済み食品への需要が高まり、食のサービス化・外部化が進展した。生活習慣病の増加や食生活習慣の乱れ、家庭の食文化継承力の低下などが指摘されている。内食・中食・外食などの言葉を生み、個性的で、複雑な食生活をするようになった。外食・中食産業は食生活の利便性・快適性・楽しさなどに大きく貢献している。食の外部化は、供給事業者側の食品製造・流通技術の発達と社会環境の変化による消費者側の需要が一致した結果の動向であり、今後も進展していくと考えられる。

食文化とはその地域において、一定の様式として人々の間で伝承されてきた食の生産、調理、加工、食の作法など全般をさすが、その地方の気候的・地理的条件（自然の条件）と食物獲得の技術・調理や保存の技術（人間の条件）、生活様式や流行等その他社会的な条件の影響も大きい。一般に郷土食または郷土料理と言われるのはその地域に根付いた産物を使い、その地域独特の調理方法で作られ、地域で広く伝承されている地域特有の料理「ふるさとの味＝郷土料理」のことをいう。先人たちが引き継ぎ伝えられてきた郷土料理が今、どれほど伝承されているのだろうか。家族形態の変化で 3 世代の同居家族が減り、我が家の家庭料理が伝承されにくくなっている。子どもの孤食・個食が問題になっているが大人にもこの傾向が多くなり、むしろ当たり前のようにになっている。孤食とは一人孤独で食事を摂ることを言い、これに対する言葉は共食である。個食は同じ食卓を囲んでも、一人ひとりが別々の料理を食べることをいう。個人の嗜好や生活パターンが異なることが背景にあるが、家族が同じ食卓を囲み同じものを食べてこそ、共食の喜び、家族の団らん・家族の交流が行われ、我が家の

料理も伝わるのである。また、家事担当であった女性が就業し、調理にかかる時間が十分取れなくて調理済み食品の利用や外食になりがちで、我が家の味、我が家の料理が伝わらなくなっているのも現状である。

郷土食を継承するには家庭内調理が不可欠である。家庭内調理においては、わが国の気候風土によって培われてきた野菜の調理技術や家庭料理の味などを次の世代へと継承していくという食文化的意義も大きなものである。家庭内調理の頻度や行事食の実施数の多い家庭の方が野菜の利用が多く、年代別では 50 歳以上の方が 50 歳未満より野菜を多く利用しているという報告¹⁾もある。

大和川の付け替え後、新田では耕地開発が進み、この畑地で河内木綿が作られたが、その後、河内木綿は機械の近代化や外国綿の輸入の影響で衰退した²⁾。花卉や甘藷、大根、いちごなどの栽培に移行していった。水はけの良い新田には葉ごぼう（若ごぼう）が広く栽培された。近年八尾の農家や農業人口は都市化や農業従事者の高齢化などで減少しつつあるが、現在も野菜や花卉などの農業が盛んに行なわれている。特に枝豆・若ごぼう・紅たで・小松菜・ほうれん草・春菊・しろ菜等の軟弱野菜を多く栽培している。中でも、大阪えだまめ・大阪こまつな・若ごぼうの 3 品目は「なにわ特産品」として選定されている。

なにわ特産品とは、大阪府と JA（農業協同組合）がなにわの食文化に根差した農産物の中から、府内でまとまった生産量があり、独自の栽培技術で生産されている 21 品目を「なにわの特産品」として選定している⁴⁾。八尾枝豆は外観品質、味ともにすぐれ、近畿地方で一番の生産量を誇っている。枝豆の旨みは収穫後 2 日間で半減するので、鮮度が命である。八尾は卸売市場にも近く、収穫の翌日には店頭に並び、美味しい新鮮なものを提供し喜ばれている。

若ごぼうは八尾市を代表する特産物として大阪府下トッ

ブの生産量である。若い根とやわらかい軸（葉柄）と葉（葉肉）までまるごと食べることができる。束ねた形が矢に似ていることから「やーごんぼ」とも呼ばれ、「春を告げる野菜」として親しまれ、近年全国的にも知られるようになった。

枝豆の産地は豆の種類は違っても全国で生産されているが、若ごぼうは八尾の他、福井県や香川県で生産されているくらいで、関東ではほとんど見られない。八尾から全国へ発信し広げていったと言えるだろう。



豆ごはん



若ごぼう天ぷら

2. 八尾の郷土食

郷土食とは、季節ごとにまたは祭礼の日などに、その地域の家々で作られる同じ香りを持つ食べ物であるといえるが、年が経つにつれ、変化はまぬがれないものである。それらはごく普通に家庭の食事として献立に組み込まれているものもある一方で、まぼろしの食事というニュアンスでその存在すら忘れられたものもある。節分の食べ物と言えば「焼いわし、麦飯、味噌汁、煎り豆」だったのが、今は「海苔巻の恵方食い」の方がよく知られている。鰯を食べることすら知らない人もあり、料理法が変わって魚臭がなくなり、鬼追いにならない。クリスマス料理は早くから日本でも知られているが、バレンタインやハロウィンなども今では定着している。若い人はかぼちゃと言え、ハロウィンと答えるが冬至という答えはない。一方、忘れかけていた行事がマスコミヤ町おこしで広く知られるようになったものもある。七草粥や半夏生はんげしょうのたこ料理なども商業ペースで宣伝されて広く知られるようになった。

地元で農業を続けている教興寺地区の家庭で行事に作る郷土料理と日常の料理を掲げると次のようになる。

春（3月～5月）

桃の節句・雛祭り：ばら（ちらし）寿司・おすまし（はまぐり）・きりこ（あられ）・白酒・菱餅 三色菱餅……白は雪、緑は

新芽、赤は花を表す……

彼岸——彼岸団子（丸い団子、ころころ団子）・ぼたもち……

牡丹の花が咲く頃の餅……

春ごと—あえ餅（よもぎ）・押しずし（生ぶし）・干ずいき巻きずし・野菜煮物春ごと……忙しい農繁期の骨休め。ご馳走を持ち寄り休日を楽しんだ

端午の節句—ちまき・柏餅・赤飯・ばら寿司



生ぶしの押しずし

夏（6月～8月）

田植え始め、終い—たこの酢もの……タコの足のよう
に植えた稲が根付くように……

め（あらめ）と油揚げの煮物・小麦団子（豌豆あん）・みそ汁
半夏生はんげしょう—たこ酢もの・半夏生団子（小麦 小麦粉 もち米）……麦粒が口にあたりぶしぶし団子、麦色からあかねこともいう……

七夕・夏まつり—たこ料理・はも料理・赤ご飯・押しずし・ずいきの巻きずし・きゅうりざくざく（みそあえ）

土用—土用餅・うなぎ

お盆—お迎え団子・小豆粥・おひら（高野豆腐、白瓜、ゆば、人参、かんぴょう、どろいも、椎茸、こんにゃく、南瓜、ごぼうの煮物）

・しんかい（なす、南瓜、ずいき、かんぴょう、いんげん、十八ささげ けいとうの葉などの味噌和え）

・赤ご飯・そうめん・ずいきのお浸し・飛び魚塩焼

・お送り団子



お盆の仏前お供え



七色しんかい

ずいき けいとう葉 いんげん なんきん かんぴょう
なす 十八ささげ

秋 (9~11月)

月見—お供え団子……里芋と米を炊いて搗き、丸いおにぎりを13と1つ供える。お月さんを加えて十五夜という……丸い菜桶さいとうにりんご、梨など丸い物をいれる
・月見の煮物(里芋,なす,油揚げ,いんげん(千石まめ),こんにゃくなど) ・月見だんご・さつまいも、栗なども供える(すすき、萩、けいとう、菊など秋の草花を活ける)

彼岸—彼岸団子・おはぎ……萩の花が咲く頃の餅……

秋まつり—あえ餅・箱寿司・赤飯・えいの煮つけ・えいのおから・ふなの昆布巻・煮豆

赤えい……えいの煮つけはご馳走で、その煮汁は冷えると煮こごりになり、あったかいご飯の上にかけてと美味しい。又、煮汁でおからを煮るのもよい。

じゃこ豆……この頃、貯池の池ざらえをし、鮎や小魚などを昆布巻や煮豆にした。今は池がなく川魚屋で購入……



月見のお供え

冬 (12月~2月)

亥の日—亥の子餅……11月初めの亥の日に食べる。子孫繁栄、万病除去……

冬至—「ん」のつくもの(なんきん,れんこん,ごんぼ,だいこん,にんじん,こんにゃく,きんかん)を煮物、汁ものなどにする。……中風にならないまじない……

年越し—おつもりそば(年越しそば)・おつもりぜんざい

正月—雑煮(豆腐,丸餅,小芋,雑煮大根,金時人参,白味噌仕立て。角を作らず輪切り)・にらみ鯛(焼魚)・おせち(煮しめ,

くわい,かまぼこ,田作り,黒豆,なます,棒だら伊達巻,かずのこなど)・おみ(味噌の入った粥,しろ菜,餅も入る)

寒の入り—大根飯(大根・油揚げ)・みそ汁

大寒の頃—かき餅・きりこ(えび,青のり,ごま,豆)

七草—七草粥(なずな,かぶら菜,水菜,なたね菜,はこべ,大根葉など身近にある野菜)

小正月—小豆粥・ミニおせち(煮しめなど少々)

節分—煎り豆・麦飯・焼いわし・味噌汁(干しかぶら,豆腐,油揚げ,ねぎ,味噌)干かぶらのようにしわがよるまで生きできるように



節分献立

日常に作る河内の郷土食

・おかいさん(茶がゆ)

・おみ(おみい)(みそ味の粥に餅,葉菜,そうめん入れる)

河内の茶がゆ……河内の農家では、夜明けから日暮れまで田畑で忙しく働き、その疲れた体には茶がゆがさらさらとのどに流れ込み、空腹と渇きをいやしてくれた。お茶を茶袋(ちゃんぶくろ)に入れて煮立った米に入れ、ゆっくり炊く。おかずにはこうこ(たくあん)がよくあう。河内の人は粥を「おかいさん」という。お豆さん、お芋さん、おこうこ、飴ちゃんなど日常の食べ物に愛着と敬意を表して「お」や「さん」をつける。おステーキさんとは言わない。……

・ばら寿司……ちらし寿司は酢飯の上に具を散らしてあるものをいい、ばら寿司は野菜や高野豆腐など細かく切った具を酢飯に混ぜこんだものをいう。大阪(河内)ではばら寿司という。

・いも粥 ・麦飯 ・ねぎ飯 ・大根飯

・生ぶしの押しずし(箱ずし)

・ずいき(煮物・巻ずし—生だけでなく干ずいきも)・こうこの混ぜずし

・河内のつべ(里芋,大根,にんじん,こんにゃく,油揚げを入れ、汁を多くして煮る)

・八杯(はちはい・はっぱい—油揚げ, 木綿豆腐の入った汁の多い煮物。おろし生姜をのせる。……美味しくて八杯も食べたといわれる……)

- ・船場汁 (塩サバ,大根)
- ・なすのしんかい(みそあえ)・はりはり (鯨, みず菜)
- ・大根のてっぱい(大根, しめさばの酢みそあえ)・かしわのすき焼き……祭りや特別の日に食べた
- ・けんちゃ (ごぼう, 人参, 大根, 里芋, 油揚げ, 豆腐はくずして入れる。冬野菜を汁で煮込みあつあつを食べる。けんちゃん汁がなまった)
- ・あえ餅(枝豆, 小豆の餡をまぶした餅)・よもぎ餅 (ゆぐみ餅)
- ・きりこ (あられ)
- ・かきもち
- ・河内の丁稚ようかん
- ・枝豆の料理は塩ゆでが簡単で美味しいが、豆ご飯、揚げ物、スープ、パスタ、餡等、色も美しくどんな料理でも作ることが出来る。
- ・若ごぼうは炊き込みご飯、煮物、揚げ物、パスタ等の他、葉はお浸しやあえ物、草餅も作る。独特の歯触りとほろ苦い味と香りが美味しさを感じる。

3. 八尾の郷土食の普及

小学校の学校給食は日本各地の郷土料理を取り入れた献立を作成し、その地域のことや特産品を広く知る学習を全国的に行っている。八尾市の小学校でも大阪および八尾の郷土料理や八尾で収穫される野菜を使った料理が献立に出てくる⁵⁾。雑煮、節分献立、河内のっぺ、きつねうどん、小松菜、しろ菜、枝豆、若ごぼう、春菊などがメニューにある。料理方法も従来からある料理だけでなく洋風・中華風と変化にとんだ料理があり、「給食だより」にはその料理に因んだコメントや料理の作り方なども掲載される。

また、地域の農家と協力して、子ども達に八尾の食べ物の話をしたり、畑で作物の成長を観察したり、収穫の体験等をして身近に農産物を感じる学習をしている。幼稚園児や小学校低学年の子どもには収穫時の野菜を見せてその花を当てるクイズをすると、若ごぼうの花は6月頃に咲くが知らない子どもが多く、大騒ぎになり、楽しみながら野菜に興味を持つようになる。子どもを通じて家庭の食事にも影響を与え、八尾への関心が高まり、家族の団らんの話題

にもなり、ほほえましい家庭の様子がみえてくる。

中学校では、家庭科の授業で郷土料理を知るというテーマで若ごぼうを使った料理を実習している学校がある。JA(農協)で若ごぼうの調達をすると、JAの人が「短期間の旬のものだから今、味わってほしい」と地域の農産物への熱い思いが語られ、この気持ちを生徒に伝えなくてはと使命感を持って授業に取り組んでおられる先生がいる。授業後は全国の郷土料理を調べたり、家庭で若ごぼうを使った料理を作った生徒もいる。この学校の周辺には田畑も多くあり、通学途中で野菜の生育状態や出荷している様子などを見ることができ農産物への関心も高い。

農産物の直売所は市内20か所あり、産直便の取り扱いは郵便局やJAの他、個人で取り扱っている所もある。また、特産物を使った料理を提供している飲食店や菓子などを販売している店が八尾市内だけでなく、市外でも見られるようになった。その他、各種団体やサークル等でも地場の野菜を使った料理講習会を行い、いちご狩り、若ごぼう堀り、枝豆収穫などの体験会を開催しており、遠方からの参加者もある。親子で自然に触れることができ、親世代は子どもの頃を懐かしみ、子どもは新しい発見をして家族の楽しみも増えていく。学校給食の献立表と学校給食だよりは八尾市のホームページに掲載されているし、八尾市立病院栄養科の栄養だよりは八尾の郷土食を紹介しており、ネットで見る事ができる。事業所の集団給食施設でも郷土食を取り入れられている。寺院でも以前は法要の後、食事を提供していた所もあったようだが最近では少なくなっている。しかし、恩智神社近くの寺(感応院)では、新年法要日には「お雑煮・おせち・御酒」を、節分会には「麦飯・干しかぶらのみそ汁・焼いわし」を、盆施餓鬼法要には「茶がゆ」を参詣者に振る舞われる。寺院と信徒が郷土食を通じて気持ちが繋がり、参詣者は有難い気持ちになる。



(平成24年度八尾市学校給食献立表・給食だより)

平成 25 年 2 月分 学校給食予定献立表				
月	火	水	木	金
				
1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25
26	27	28	29	30
31				

4. これからの郷土食

郷土食と健康との関わりはどのようになっているのだろうか。長寿県として知られていた沖縄県は男性の平均寿命は1985年には1位だったが、その後急降下し2000年は26位、2013年には30位になった。女性は長らく1位だったのが2013年には3位になった。現在も伝統食を食べる65歳以上の高齢者は男女とも長寿日本一を保っているが、60年代以降食の欧米化が急速に進み、高たんぱく、高脂肪、高カロリーの食事が増え、塩分摂取も多くなり、伝統の郷土食を食べる人が減っていることが要因であると指摘している⁶⁾。

八尾市南高安地域では1965年より(現)大阪府健康科学センターの協力のもと、健康診査を実施している。1977年には「成人予防会」を結成、集団検診を中心とした予防活動を実施しており、その活動を八尾市、健康科学センター、大阪大学等の関係機関が支援している。2010年度の結果、高血圧者の割合・糖尿病の有所見率についてはいずれも他地区より低かったことが「行動変容プログラムの作成およびその検証」(2012年度)⁷⁾に報告されている。この報告書では食との関連は解明しにくい、「八尾市食育推進計画」(2011年)⁸⁾によると、栄養摂取に気を配る人の割合や緑黄野菜をほぼ毎日とっている人の割合が2002年より減少している。また、住んでいる地域での食に関して感じていることのうち「食の文化や伝統、季節性などを大事にしようという雰囲気がある」の割合は国の調査44.1%に対し、八尾市は28.2%と低く、他の項目もすべて国の結果より低くなっている。八尾市に長く住んでいる人や高齢者と八尾在住の短い人や若い人とは八尾への思いや食への思いに相違があるのだろう。八尾市で生産されている若ごぼうや枝豆を知っていて食べたことがある人は成人で7~8割以上あるとみられることから、料理方法など広く知らしめ、地

産地消に関する取り組みを各分野で推進していくことを八尾市の食をめぐる課題としている⁸⁾。

郷土食といえば、昔の食べ物だ、どんな料理か知らない、作り方がわからない、作る手間がかかるなどの理由で関心がなく、作らないという人が多い。郷土食として根付くにはその食べ物へのいろんなこだわりが込められている。神仏や祖先を敬う気持ちであったり、自然の恵みに感謝したり、人生の節目や長寿の願いなどの思いを込めて、時間がかかっても手間がかかっても郷土食を作ってきた先人たちのこだわりがある。そこで生きてきた人達の歴史でもある。郷土食を食べることは安心・安全な地域の生産物を利用することにより地域を活性化し、生活習慣病の予防にもなり、家族・地域との絆を深め、八尾への郷土愛を感じるなど素晴らしいことが多くあり、ぜひ郷土食に心を寄せていただきたい。

5. 郷土食を生かした地域のとりくみ

食からの町づくりは、農家だけでなく消費者もともに考える市民参加が重要である。地域資源である食の活用にはじまり、市民参画、生涯食育、地産地消などにこだわって食のまちづくりを成功させた都市(福井県小浜市)¹⁰⁾がある。八尾の農家には、安全・安心な野菜を提供しようと大阪エコ農産物⁹⁾の認証を受けて頑張っている農家がある。化学肥料や農薬を減らし育て方にこだわり環境にもやさしいエコロジカルな農産物を作るには、雑草取りや害虫駆除に人手がかかり大変だが誇りを持って農業をおこなっている。また、農業後継者不足で八尾の農業の先行きが心配される中、よりおいしいものを、より高品質なものをこだわって作っている若手生産者のグループ(八尾堆肥研究会)もある。栽培技術や堆肥等の研究をしながら野菜を生産しており、生産者の顔の見える、安心できる野菜を提供している。こ

のようなこだわりの野菜は、販売価格が少し高くても消費者は生産者を信頼して購入している。

一方、生産農家の女性達が、農産物直売所「おんち若菜の会」を立ち上げている。地域の農産物の販売だけでなく、みそ餅等の加工品の製造・販売も行っている。地域特産物のブランド化に向けて、食品メーカーと連携して様々な加工品を販売している。いろいろな団体に野菜野菜の話や料理講習をしたり、料理店や食品加工業者と交流したりしている。「地域の高齢者に懐かしい味を届け、次世代への食育活動を進める」ことをポリシーとして幅広い活動を行って

いる。農業を愛し、農業を育て、新しい町を創ろうという意気込みが伝わってくる。各地でこのような食文化を守る組織が出来ることを期待する。



おんち若菜の会

参考文献

- 1) 上村昭子・阪上愛子・澤田参子(2009)「近畿の家庭における野菜の利用状況：大阪府」『食生活研究会誌』vol. 29, No.5, 34-47 頁。
- 2) 八尾市史編集委員会 (1988)『八尾市史』(前近代) 本文編、554 頁。
- 3) 日本の食生活全集大阪編集委員会 (1991)『日本の食生活全集27聞き書大阪の食事』181 頁。
- 4) 大阪府環境農林水産部農政室推進課地産地消推進グループ「なにわの農産物農産加工品リーフレット」
- 5) 八尾市教育委員会・八尾市学校給食会(2013)「学校給食予定献立表」第 545 号、2 月の学校給食だより
- 6) 毎日新聞 (2013) 「イマジン第2部 くらす 長寿危うい沖縄」その1,その2 (3月20日 東京朝刊)
- 7) 大阪府立健康科学センター(2011,2012)「行動変容推進事業における医療費分析と行動変容プログラムの作成およびその検証」報告書(平成23年度)八尾保健所管内(八尾市) (平成24年3月)大阪府福祉部国民健康保険課 健康医療部健康づくり科
- 8) 健康日本2 1 八尾第2期計画及び八尾市食育推進計画(平成23年)八尾市健康福祉部保健推進課
- 9) 大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ「大阪エコ農産物認証制度」
- 10) 大熊武(2009)「御食国若狭おばまの食のまちづくり」『季刊まちづくり』23、9/7、22 頁。
- 11) 八尾の郷土食を21世紀につなぐ実行委員会(2000)「太陽と雨と土のめぐみ」『伝えたい八尾の郷土食』所収。

第9章

小学校教育の新たな可能性: 久宝寺小学校の試み

New Directions on Primary Education: A Case of Kyuhoji Elementary School in Yao, Osaka

小林俊王 (Kobayashi Toshio)

1. 地域とともに歩む学校に

学校の沿革史によると久宝寺小学校は、明治時代初期の1873年12月1日当時の堺県河内国第一百番小学校として、渋川郡久宝寺村・許麻神社内に開設され、その後、顕証寺内に移転するなどの経過を経て、1878年に現在の寺内町今口に建てられたと記されている。今年で創立140年を迎える歴史と伝統のある学校である。



4年前、校長として久宝寺小学校に赴任すると、地域の方から新任の校長はコミュニティセンターで講演をすることになっているからと知らされた。どんな話をするか思案した結果、聞く方が少しでも身近に感じられる話をしようとして「久宝寺の歴史と学校教育」について話すことにした。実際、私は、34年前に初任者教諭として久宝寺小学校に8年間在籍した。3年生を担当した時は、顕証寺を見学した折、庫裏の広い玄関の天井に吊るされ、江戸時代に門主が京都の本山に行くときに使われたと語り継がれている駕籠を今でも思い出す。「百聞は一見にしかず」、私も子どもと一緒に見たことや聞いたこと、訪ねて回ったことが、時を過ぎても忘れることができない。教師は、地域に入り苦勞して調べ聞き取りをして学んだ事の中の一部を子どもたちの学習教材に生かしていくわけである。ここで教材化できなくても調べ学んだことは、いつの日か役に立つ機会がやってくるのである。そんな経験が今回も校区を回り写真に写し、久宝寺村誌や久宝寺に関わる内容をまとめ、パワーポイントを用いて映像を見ながら、学校教育に関連する地域の遺

物や歴史、地理的な要因など学習に役立つ事柄を2時間余りで説明した。その後、会場に参加していた地域の関係者や久宝寺の歴史を詳しく専門に調べられている方から補足して頂き、「ぜひ、学校でも教えてや。これからの子どもたちが久宝寺をもっと大事にしてもらわないと」ともいわれた。また、久宝寺校区に移り住んでこられたPTAの役員や保護者の方から「そんな有名で貴重な文化財の中に住んでいたんだ。勉強になったよ」といっていただいた。

教育とは「共育」であり「協育」といわれる。特に、小学校教育では、地域の方々の「自分たちの学校」の意識が大切と思う。幸いにも久宝寺小学校への地域の協力は他の学校のどこにも負けない協力をいただいている。学校では、生活科や社会科、総合的な学習のなかで、それぞれ教科の目的と発達段階に応じて地域を教材として学習している。



2. 地域で育つ子どもたち

学習指導要領小学校社会科の目標を見ると次のように記されている。

(1) 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。

(2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社

会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

(3) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

特に3年生・4年生の学習では、上記のように地域の一人としての自覚と誇り、愛情を育てることを目標にしている。その地域の学習をもとに学年があがるにつれて大阪府、近畿地方、日本、世界へと広げていくわけである。学習法や資料活用、つけたい力についても明記してある。

3. 今、求められる学力

久宝寺の地域の方々の学校への期待を考えると、身近な校区の観察や調査をはじめ、校区の教育資源を活用した作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を行うなど、学校はもっと地域に出かけ本物の社会から学ぶことが多いと考えられる。

しかし、時間的な制約などもあって、校区や地域教材を十分に活用できないのが現状である。内容を厳選し、学び方を学ぶ学習を充実させる中で、学習で身に付けようとする資質や能力を育成していくことである。

ところで、最近では小学校でもパソコンやインターネットを活用した授業をすすめる傾向にある。10年前に比べるとパソコンも小型化し持ち歩け、携帯電話からインターネットや音楽まで聞くことができる、まさに便利社会になってきた。しかし、辞書で言葉を調べたり地図帳で位置を確かめたり、自分でグラフや新聞にまとめるなど基礎的な学習を積む前にこのようなインターネットで写し取って資料化することが当たり前になると、課題に迫り考える力を伸ばせるのか疑問である。自分で歩き、聞き取り、見て、資料を作るなど、みる、きく、さわる、臭いをかぐ、味わうといった五感を使っただけの作業をする経験が資料の作成力や今後の資料の読み取り力や、そこから考える力や活用力に繋がるといえる。

このような中、現在の学習指導要領改訂のもとになっている2006年のPISA調査³の読解力において、日本の子ども

³ OECD(経済協力開発機構)のPISA調査は、日本で言えば高校1年生を対象としたテストで、2003年度では41カ国の参加。「知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかどうかを評価」するもので、国際的な学力評価として近年、日本でも注目されている。

たちが、資料から必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意でも、取り出した情報同士を関係付けて理解し、自分の知識や経験と結び付けたりすることが、やや苦手であるという結果が出ている。基礎的な学習や資料活用の経験や考える力を身に付けさせることが、授業における学校の課題といえる。さらに、学習の機会についても、子どもは、社会を常に自分とのかかわりの中で考えている。自分と身近な人と出会い、身近な社会とつながり始めることから、子どもは社会を認識し、こだわりを育てていく。身近な地域を題材にすることで、学習の過程で地域の人や環境から学習課題の解決に関するてがかりを集めることができるという。そして、課題について自分で資料やグラフに表したりまとめをするなどし、学習の成果を子ども相互で発表し、意見をだし練りあい伝え合う経験をすること、つまり学習の仕方を知ることにより他の資料を読み解いたり、他の課題にも応用できる基礎になるといえる。ある文部科学省教科調査官が、学習を漁にたとえ、「中国の老子の言葉で、弟子や子どもには「魚を与えるな。釣り方を教えよ。」とある。魚(答え)を与えるとそれがなくなれば再び「魚(答え)をくれ」というだろう。しかし、一度釣り方(学習法)を知れば自分で答えを導くだろう。」と話されたことを思い出す。



4. 校区をとりまく環境

さて、ここで地域とつながり地域に支えられる久宝寺小学校を取り巻く①歴史的・②地理的・③社会的な環境の一部をあげてみたい。

(1) 歴史的環境について

古代・飛鳥時代に聖徳太子がこの地に「久宝寺」を創建したことが名称の由来といわれる。戦国時代に本願寺第八世蓮如がこの地で布教活動を始め、西証寺(のちの顕証寺)を創建し、周囲に環濠をめぐらせて環濠集落・寺内町が久宝寺の人々により形成される。それ以前はこの地の土豪で安井氏が屋敷地に環濠を巡らせて支配していたようで、安

井氏も創建に協力し、環濠を二重にして防御を嚴重にするなど、寺内町の様相となり、戦国時代における一向宗の拠点のひとつとなる。戦国時代から江戸時代にかけて多くの門徒衆や商人が集まり、地域の中心として賑わったようだ。かつて周囲に張り巡らされた環濠や土居は現在も一部に残り、久宝寺小学校はその端に位置し、体育館の側溝は名残をとどめている。碁盤目状の町割りはほぼ当時の状態をとどめ、主要道路は東西に7本、南北に6本で構成されている。このうち表町通りがかつての八尾街道の道筋にあたる。また、寺内町作りを指揮した安井氏率いる久宝寺の人々は、秀吉の依頼に応じ安井道頓を中心に道頓堀を作り、その名残として大阪府中央区の久宝寺の地名は有名であり、寺内町の水平線や排水を考えた土木技術など当時を知ることができる。実際、その知識をもとに目線を下げると、緩やかな勾配を見ることができる。

(2) 地理的環境について

大和川に接し度々の洪水による影響もあったが、砂地は綿作に適し、綿つくりとそれから絞り出される綿実油（当時の行燈の油？）の生産活動やその輸送としての剣先舟を活用した輸送業なども見られ、現在の長瀬川に残る久宝寺船着き場は商業活動の盛隆を残している。大阪から奈良への船による輸送中継基地ともいえる。

現在は、久宝寺の西側に大阪府道2号線中央環状線（中環）が大阪万博（1970年）に合わせて整備され、多くのトラックや商用車が往来している。また、1988年には、近畿自動車道が全線開通し八尾インターから5分で寺内町に到着する。周辺にはシャープの工場や関連下請け会社、星電

気、帝国チャック、松本油脂やそれに関連する中小工場が今でも多く点在している。

さらに、JR久宝寺が2008年東西線の始発駅となり、1日乗降客が13,000名を数える。北には1925年に開通した近鉄大阪線久宝寺口が位置し、乗降客は1日約6,000名である。それぞれ学校からはJR、近鉄とも10分程で駅を利用でき、大阪市や神戸などへの衛星都市としての役割も担っている。

(3) 社会的な環境について

保育園が3（まぶね保育園、どんぐり保育園、白鳩保育園）、幼稚園1（久宝寺幼稚園）、久宝寺小学校、久宝寺中学校、八尾高等学校などの教育施設が整い、その出身者も地域に多い。公共施設として久宝寺コミュニティセンター、府営住宅2地区（府住、北府住）、大阪府緑地公園や八尾警察署など多くの施設が機能している。また、歴史的な建物（顕証寺、念仏寺、発願寺、許麻神社）、江戸期の「うだつやむしこ」を備えた古民家住宅や町並みなどの文化財も残っている。許麻神社の祭りや鬼追い式などの地域の年中行事も長く受け継がれている。3年前より大阪府の地域ミュージアム構想に指定され、街並みセンターが中心となり「久宝寺灯籠まつり」が開催されている。久宝寺小学校の児童も万燈会に絵付けを行い寺内町に並べていただいている。「雅楽」や「巫女の舞」などが見られ幻想的な夜を迎えられる。

一部であるが、以上の様に久宝寺小学校を取り巻く①歴史的・②地理的・③社会的な環境をとらえ「地域教材」として、学校でどのように活用しているか説明を行う。

5. 地域と連携した学習（久宝寺校区）

2年生	教科・教材名	生活科 2学期「まちをたんけん 大はっけん（学校までの地図を作ろう）」
	教科ねらい	探検の目的を明確にもち、グループに分かれて計画や準備を行い、安全に気を付けて探検することを通して、地域の人や場所とのかかわりを深めることができる。
	取り組み	学校を中心に、自宅の方向や学校までの道順（建物・信号・気にいった場所・お店・友達の家など）を絵地図に書く。これからの3年生への地図学習への準備を行う。校区の見学のほか登下校時に確認するなど、そこでめぐり合う人や場所、ものにこだわりをもたせたる。 気付いたことや分かったことを、カードに書き整理させ、学習に生かすとともに友達に伝えることができるようにする。
	地域の協力	学校が指定する登校経路を中心に同方向のグループに分け、グループごとに保護者

	に付き添ってもらい安全を確保する。
学習のまとめ方	学校から自宅までの絵地図を作り、大きな模造紙にはる。グループに分かれ、同じ方向の児童でお勧めの場所や危険な場所の壁新聞を作り、参観日に発表会をする。
3年生	教科・教材名
	社会・総合 1～2学期「 校区探検・農家の仕事 」
教科ねらい	自分たちのまちの地形や土地利用の様子、集落の分布、商店や主な公共施設、鉄道や道路の様子、古くから残る建造物などを観察・調査したり地図に表したりして、場所によって特色があることに気づくようにする。
取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・初めに屋上から方位、位置、特徴をとらえた後、学校を中心に東西南北に分けて、公共施設や建物、宅地や農地など方角を確認しながら調査をする。コミセンや街並みセンター、許麻神社、顕証寺、JR久宝寺駅などを見学し位置や方位も確かめる、また、事前に説明をお願いしておき、建物の見学や説明を聞いたり質問も行い、学校で各自がまとめる。その後、校区マップに建物や見学した場所や説明を書き、その他に看板や目印などを記入し、校区地図を完成させる。 ・農家の仕事で「べにたで」生産地農家を見学し、働く人の努力や工夫を聞き取り、今後どうしていくべきか話合う。 「べにたで」生産農家は、現在府下2軒になっている。
地域の協力	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの公共施設に事前に協力を要請し、見学・説明・質疑応答をする。五感で感じ取れるようにしていただく。 ・「べにたで」農家の筒井さんには長年にわたって、児童の見学に合わせて仕事を見せていただいている。歴史のある「べにたで」作りのこだわりを聞かせていただく。その後も、田植えや収穫なども見学をさせていただいている。
学習のまとめ方	<ul style="list-style-type: none"> ・校区地図に見学場所や自宅、世話になった農家の場所など、情報のまとめとして今後も学習する時に活用する。 ・紅たでは壁新聞づくりをしてまとめる。今後、どのようにしていくか、話し合う。
4年生	教科・教材名
	社会・総合 1～2学期「 ①火事から守る・②大和川の付け替え 」
教科ねらい	<ol style="list-style-type: none"> ① インタビューなどを通して、地域に住んでいる人が中心となって組織された消防団について調べる。また、火災に備えて地域につくられている消火栓や防火水槽などの設備を調べ、地図にまとめる。 ② 地域の災害に対する備えについてさらに調べるとともに、慌てずに行動するための防災計画を考える。 ③ 自分たちの地域にある、昔の人が残してくれたものや先人たちの働きについて調べ、調べたことについて自分の考えをまとめる。
取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の中にある「消火のためのもの」を発見していくことから学習に入り、関係諸機関と連携していることを見学・調査した。 ・大和川付け替えでは、築留地区の発展に貢献してきた先人の働きとともに見学・調査した。
地域の協力	<ul style="list-style-type: none"> ・「火事からまちを守る」では、消防団、マンション管理人、商店街会長、コミセンなど「消火のために働く人」に出会わせる。特に、地域の人に「子どもたちにこんなものを見せてほしい」「こんなことを語ってほしい」と依頼し活躍して頂いた。

	・「大和川の付け替え」では、地域に残る元の大和川のなごり学習を、八尾高校の狐山をはじめ堤防あとなどのポイントで具体的に説明をいただいた。
学習のまとめ方	① 見学グループ別発表会 ② 見学・調査した場所や学んだことを校区の地図上に表す「マップ作り」 ③ 学んだことを学習新聞にまとめ、発表した。
5年生	教科・教材名
	社会・総合 2学期 「工業生産とわたしたちの暮らし工業（地域の工場）」
	教科ねらい
	① 学したり資料を集めたりして、中小工場の特徴や、大工場とのかかわりをとらえることができる。 ②日本の工業生産について、工業の発達している地域や、その特色を理解することができる。 ④ 本の貿易の特徴や、諸外国との協力の重要性についてとらえ、考えたことをノートにまとめて話し合う。
	取り組み
	自動車産業を教科書で取り上げている。校区の大工場と中小工場に依頼をし、校区の6工場に見学する。ネットで工場の概要調査をしたのち、グループで見学する。内容は、①質問事項の検討 ②グループ別に見学 ③見学まとめは新聞づくり ④発表会（交流会） 授業では、一人ひとりが考えを伝え合い、学級で練り上げ各児童が考えを持ち、日本の工業の特徴や課題につなげ、これからの工業にまとめる。
	地域の協力
	6工場 ①木村工機 ②モリタエコノス ③熊野合成 ④フコク産業 ⑤下平電気 ⑥松本仏壇製造所 に協力をいただいている。 ・携帯電話部品製造や特殊車両製造、シャープ下請けなど立地を活用したか会社に児童の受け入れをお願いしている。児童の見学写真、社内報に載せていただくなど協力的である。
	学習のまとめ方
	工場見学新聞を個人やグループで作成し参観日に発表する。お世話になった会社には、児童一人一人のお礼状を渡している。
6年生	教科・教材名
	総合 3学期 「寺内町を調査しまとめよう」
	教科ねらい
	① 会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てるようにする。 ② 会的事象から学習問題を見いだして追究・解決し、社会的事象の意味をより広い視野から考え、適切に判断し、目的に応じた方法で表現する。
	取り組み
	6年3学期のまとめの時期に、歴史学習や公民の学習を終え、校区の歴史や地域の自慢をまとめる。5年生の情報学習や6年の歴史、PCのパワーポイントを活用したまとめ、最後の参観日に学習発表会として取り組む。
	地域の協力
	4年生の大和川の学習のガイド役を地域の高齢者をお願いする。この方たちは、若いころ、「久宝寺歴史散歩の会」通称「久歴さん歩の会」を結成されていたメンバーで詳しく調べた方たちである。久宝寺船着き場、今口や物見の松、東口、「うだつやむしこ」を備えた古民家住宅、久宝寺城跡、許麻神社、念仏寺、顕証寺、浅野家などポイントでガイド役をしていただいている。この方たちも発表会に招待する。また、お礼の手紙を送ることもしている。すでに4年以上すぎ、子どもにもポイントを押さえ、教えすぎず難しくならないようお願いしている。今回の協力者は10名。

	名ガイドです。
学習のまとめ方	学級ごとに6分割する。質問は各自で考えて行う。調査後、班でまとめ後、パワーポイントで発表する。例えば、報道番組風にする場合は、シナリオを書き、アナウンサーやADなどになりきり発表を行う。どの組も工夫を凝らし個性を発揮させている。参観日と同様の内容を5年生にも発表し、6年生への学習の参考にしている。

特に6年生の「寺内町調査」は、もう何年

以上は、子どもたちが地域に向かい学んだことである。子どもたちの反応は、今まで知らなかったことを知る喜びとともに、調べたてきたことをまとめ、発表する中で、友達や保護者、招待した地域の方に学んだことを「教える」ことを楽しんでいた。自分たちの住んでいる校区・地域の素晴らしさに愛着を持ってくれたようだ。



6. 学習意欲を高める地域を生かした授業作り

前述の学習指導要領の中にある、

- ① 地域社会の一員としての自覚をもつようにする
- ② 地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする
- ③ 考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てる

に少しは取り組めているように思う。

か続いている。ガイド役の方は、約10名ほどであるが、若いころ「久宝寺歴史さん歩の会」として、久宝寺を研究された先生と一緒に話しを聞いたり、古文書を読んだりしたメンバーである。4年生の大和川付け替え前後の学習で狐山や真砂・高砂の「砂」のつく理由や寺井戸の話など、まさに学習に役立つ内容を子どもたちに聞かせていただいた。2月には、八尾市・東大阪市・柏原市の3市の育成会合同研修会にも、このメンバーがガイド役になるなど、地域でも学校でも認知され活躍をしている。こういった繋がりを今後も大切にし、その輪を様々な教育活動に広めたいと思う。地域の方々の「おれたちの学校」の意識を大切にし、子どもたちが「勉強っておもしろいな」「校区っていい所だな」「地域の人っていい人だな」「これからも、住み続けよう」といえる子どもを育てたい。やはり学習意欲を喚起するためには、子ども自身のかかわりの強い身近な地域に根ざした授業づくりが大切である。また、発達段階や目の前の子どもに応じた授業構成を念頭に置いた教材開発を行うことが学校に求められる。

第10章

河内木綿を栽培・研究したひと、その復活・研究に努力したひと

Reformers and Researchers of Kawachi's Cotton: Interactions between Practice and Theory

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. 河内は綿作の先進地帯であった

江戸時代、河内国は綿を大規模に栽培し、実綿・繰綿として出荷、また自家産の綿を使って農家で織り上げた木綿は河内木綿として名声を博し、木綿問屋を通じて、広く販売流通した。

日本に綿が伝わったのは、平安時代、崑崙人の人が伝えたとされる。その後室町時代に勘合貿易で中国から伝来したと思われるが、いつどこで始まったかははっきりしない。八尾市内久宝寺では、久宝寺城主安井満貞が伝えたといわれているが、証拠が有るわけではない。東海地方の三河国は、三河木綿として有名で、記録的には一番早く存在が確認されると研究されているが、史料の残存だけではなんともいえない。京都などの寺院では輸入の木綿が入り、足袋地などに貴重品として扱われていたことが、僧侶の日記に書き残されている。

畿内の農家では文禄、慶長の頃にはすでに栽培や織物としての加工がなされていたことは確実である。富田林の文禄5年、慶長9年の検地帳には紺屋、ぬのや、さらしや、といった職業名が出ている。また東大阪市の旧家の記録には、大坂の夏の陣の時、宿陣した徳川家康に菖蒲木綿の単物を献上し、5月5日、端午の節句で、出陣前に勝布とは吉事であると大変喜ばれた。5月6日は大坂夏の陣である。山手の畑地では綿栽培が始まっていたことを示す。

河内農家の綿作は17世紀には先進地帯であった。その綿作り農法などを学びに九州福岡から来た人がいた。この人は宮崎安貞で、40年後に農書の代表的な書物『農業全書』を出版した。宮崎安貞は、元和9年広島で生まれ、25歳の時に郷里を出て、筑前国黒田藩に仕えたが、農業、農法を学ぶために畿内諸国巡遊の旅に出、老農から農法を学んで帰国、その後は筑前国志摩郡女原（現在の福岡市西区）の村里に住んで40年、自ら開墾に従事し、田畑を開き、農業

を営み、『農業全書』を書きあげた。元禄10年（1697）刊行（岩波文庫ほか）。墓と書斎は今も同所に大切に保存されている。

『農業全書』巻之六に、三草之類第一、木綿（きわた）の項がある。木綿（綿、わた）は南蕃から宋代に中国に伝わり、「本朝にも百年以前其たねを伝え来りて今普く広まれり。南北東西いずれの地にも宜しからずと云ふ事なし。其中に付て河内、和泉、摂津、備後、凡土地肥饒なる所、是をうへて甚だ利潤あり。故に五穀をさしをきても是を多く作る所あり」。また綿が出て来て、広く人々が着られるものになった。「しかれば綿を作り出す法を委しくして、民用ともしからざる様にすべき事、是又上に立てる人の天意にうけ順ひ、民を憐む仁政の一端にして、国家の急務なるべし。しかりといへども、畿内地方は其術を得て多く作り出せども、遠国の末々は今も其作りやうおろそかにて、事たるほど作り出す事なく、科を土地と風気におほせてやみぬる事是多し。取分き木綿は作る法委しからざれば、実りあしき物なるゆへ、其事詳に何れの農書にもしるしをけり。」として、木綿（綿）を作る法を詳述している。畿内の河内などで見分した最新の綿作農法である。

宮崎安貞が河内、和泉、摂津、大和など畿内のどのあたりの農村を訪ねたのか知りたいものである。『農業全書』は宮崎安貞の死去直前に稿本が完成したが、完成にあたり、知人の貝原益軒に添削を依頼、益軒は叙文、後序も書き、出版に当っては巻十一の付録も書いて、先学の志に込めている。貝原益軒は福岡藩医で儒学者であるとともに、『筑前続風土記』、『大和本草』などを書いて、歴史、伝承、社寺、風俗に委しく、また植物学にも通じていた。益軒の『南遊紀行』は京から河内、紀州、大和等の名所旧跡を巡った紀行文であるが、河内では山根木綿の記述がある。これは宮崎安貞との交遊により関心があったかもしれない。

貝原益軒の墓は福岡市内福岡城の西、金竜寺にあり、銅像と墓石が並ぶ。

2. 綿作の農書

つぎに、綿作に限って江戸時代に出版された農書を見ると、『農業全書』から140年ほど後の天保4年(1833)に出た大蔵永常著の『綿圃要務』がある。大蔵永常は、郷里は豊後国日田郡で、子供の頃、祖父が農業の道に委しく、中でも綿作りに精通していたのを見て育った。永常はのち大坂に出て、綿作やその売買、木綿の商売の実際を見て、綿作が農家にとっても商業としても多くの利益をもたらすことを知り、綿作の実際を老農に聞き、これを書き留めていたが、書店の求めにより出版した。綿の名、種類からはじめて、作り方、収穫の仕方まで絵入りで詳細に書き、最後の播州姫路辺、備中、備後福山辺、和泉国大鳥郡辺、大和国、河内国の綿の作り様を書き、最後に大坂の綿問屋での綿の善し悪しを論じている話まで書いている。

同書の「河内国綿作りやう」では若江郡八尾、平野辺では半田とあって、田の土をかき揚げた方に綿を作り、低き溝へ稲を作ることを絵に示して紹介している。掻揚田ともいった。また木綿を織って諸国へ売り出す事夥しく、河内木綿とあって、諸国で重宝されていること、糸を紡ぐことは女に限らず男もしている状況を紹介している。河内八尾辺りの木綿作の盛んな状況を紹介しているのであろう。

3. 河内農家の綿作覚書き

さて、河内の農家では暦を見、天気を気にして、毎日農作業に励んだことである。しかし綿作は明治、大正時代までには完全に途絶えたので、その作り方、農作業の実際は現在に伝えられていない。綿作先進地帯であった江戸時代の元禄前後や江戸時代後半において、綿作は全国に行き渡り、出荷額、販売競争が激しくなった頃、それぞれ時代ごとに作付方法や品種の選び方などに変化があったことと思われる。そんな中、河内農家の中で、収量を上げ、品質を向上させるように子孫に残した日記や覚書きが2点発見されて、翻刻されたものがある。

一つは『河内屋可正旧記』で、昭和25年、近畿大学講師の野村豊氏が河内石川村学術調査の際に見出されたものである。南河内大ヶ塚村の庄屋河内屋五兵衛可正が元禄初年から宝永末年まで約20年間に書き綴ったもので、自家の子

孫のために、大ヶ塚村の人の動きや村の出来事、来由、処世訓などを書きとめたものである。来由記と名を付けている。全19巻、その中の第12巻に農作のこと25項がある。可正の家は代々酒造業を営む豪農で、田畑も多数所持していて、作人に作らせていた。その作人の農作業を指導し、良作を導くために適切な耕作の指導をする必要があり、また子孫にもその智識を伝えることが必要であった。木わたの種のこと、こやしの入れ方、肥料のわたの実かすのこと、麦や米づくりを考えての綿作地の耕作の仕方など、細かな注意を書いている。作物では綿のほか、やまのいも、竹の子、たばこ、麦作、米作、茄子作、なたね作、とうきび作、牛蒡作、大根作、桐の木作、なたね作などの記述がある(河内屋可正旧記、清文堂史料叢書)。

もう一つは八尾市八尾木(旧八尾木村)の庄屋の長男に生まれた木下清佐衛門が書き残した『家業伝』がある。この史料は同志社大学教授農学博士岡光夫氏が、昭和38年大阪の古書店から購入されて、翻刻、現代訳も付けられて出版されているものである(日本農業全集8、農文協)。

原著は『家業伝行司』と題していて、天保13年、この一書を編んで家族や子孫に伝えようと思うと書いているので、子孫に家業である農業、農作業の知識を伝えんがため、この書を纏めたものである。岡氏の研究によれば、父清左衛門は天保8年に没し、文化14年生まれの子清左衛門が継いだ。天保13年は著者25歳の時で、大病を患う中で執筆した。文中、『農業全書』『農業余話』『農稼業事』『綿圃要務』の書名があがっているので、出版されていた農書を読むなどの勉強家でもあったことがわかる。

木下家は八尾木の庄屋家で、天保13年の石高は53石余、所有面積は3町7反1畝、これを自作が2町3反8畝、小作に出しているのが1町3反3畝である。自作地の内、米作が1町2反余、裏作で菜種を作る。残りの1町1反余が綿作で、裏作に麦を作っている。庄屋役をしながら農業もする農家であるので、農作、特に綿作の出来不出来は家計に直接影響をするものであり、綿作は家業の中心的な作物であったといえる。『家業伝』はまず木綿作意話、綿作日記と綿の作り方から書き始め、その後米、麦、大根、豆、芋の項があり、続いて肥料、耕作地のこと、年中行事と続く。その中心は十八夜前後から始まる綿の種播きから綿や米の収穫に書き及んでいる。追記として、綿栽培の纏めをし、嘉永3年から安政3年までの毎年の綿作の日付をおって作

業状況などを書いて纏めている。綿作りの努力、苦勞が書かれ、綿作技術を子孫のために伝えようとした苦心が目にと留まる。江戸時代後期の農家が綿作収量を高めようと努力した姿が伺える。

4. 河内木綿の特徴

河内木綿と云う場合、河内の田畑で栽培し、収穫した実綿、繰綿をさす場合と、糸繰りをして織った白木綿、木綿の織物、木綿の染物などをさす場合もある。ともに河内木綿といわれる。この河内木綿を褒める人々は多かった。

元禄2年(1689)刊の貝原益軒著『南遊紀行』では、山の根辺りでは木綿を多く植える、また木綿を多く織りいだす。山の根木綿とて京都の人、これを良とす、と書いている。天保4年(1833)刊の大蔵永常著の『綿圃要務』では、河内綿の方最上なるべしと、大坂の間屋のある老巧の人々はいへるよし、といっている。

『日本風俗図会』に所収されている菱川師宣画の『和国百女』には、今もむかし、河内の国山のねぎといひし所はもめんの出所にて、諸国へうりひろむる、とある。

正徳2年(1712)刊の寺島良安著の『和漢三才図会』には、いまだ織らざるものは「きわた」といい、既に織りたるものをもめんとよぶ。木綿をもって紡いで布となす。布は勢州松坂を上となし、河州・摂州これにつぐと書いている。

享和元年(1801)刊の秋里籬島著の『河内名所図会』には、国中の民婦は多く務めて絁を織る、棉布を鬻いで恒の産とす。これ他邦に勝れて剛地也、と書いている。河内の綿布は剛地、強い地である、丈夫であると書いている。

天保13年(1842)刊の大蔵永常著の『広益国産考』には、諸国の綿の出来性によって、いろいろ持ちいる所がかわる。河内木綿はきれいなれども糸太く地厚きを名物とする。諸国の暖簾・湯単は河内木綿にかぎる、と書いている。

嘉永6年(1853)刊の喜田川守貞著の『守貞漫稿』には、今の世、河州を木綿の第一とし、また産することはなはだ多し。京坂の綿服には河内木綿を専用とする。しかれども、よりいと細からず、染色美ならざるが故に、江戸にてはこれを用いず。けだし京坂も河内木綿は最下の服のみ。丁稚等仕着せと名づけ、戸主より給うの服にこれを持ちいる。河内島は久しく堪えるなり。河内綿にも一端価銀三十目余の物は本結城と同じくはなはだ美なるものもある、とされ

ている(『河内の綿作りと木綿生産』八尾市立歴史民俗資料館を参照)。

これらの書物でみると、河内木綿は糸太で丈夫で長持ち、厚手の生地であった、縞木綿では本結城に劣らないものもあったが、染色も美とはいえず、実用本位のもので、庶民の着物として愛用されたものといえる。

八尾の木綿問屋「綿吉」(綿屋吉兵衛店)の販売先を記入した帳簿を見ると、八尾の木綿は湖東地方(近江)に多く販売されていた。近江商人の人たちの行商の服装となっていたのである。丈夫で長持ちする河内木綿の特性は、日本各地に売られ、加工されて、多くの人の仕事着になって重宝されていたことが想定される(棚橋1982)。

しかし、幕末からの外国綿の輸入、明治になってからの近代紡績業の発達で、河内の綿・河内木綿は、その繊維の太さ、短さ故に太刀打ちできず、凋落の道をたどっていった。この点の研究は武部善人氏が八尾市在住中に研究され著作となっている。それを参照されたい(武部1957)。

河内木綿は本来は実綿、繰綿とともに、手紡、手織りの厚地の白木綿が諸国に販売流通されたものである。自家用として、織り糸を種々に染めて縞木綿を織ったり、白木綿の上に型紙を使って藍染をして布団地などを作成したりした。

河内農家の縞帳(農家自家製の織り見本帳)によると、縦縞系がもっとも多く愛好されたとみられる。縦縞では棒縞、大名縞、千筋縞が多い。格子縞では小形格子縞が多かった。これに対して大和の縞帳では、色調、縞の構成において進歩的、洗練されたものが多く、江戸・大坂へ販売されることが多かったからではないかと思われる(辻合1965、1972)。

河内木綿は本来白木綿が中心で販売されたので、縞木綿や藍染木綿は自家用として織られ、染められたものが多かったからであろう。藍染の河内木綿では、中型の型紙で藍または紺に染めたものが多かった。庶民に許された色であったからであろう。文様の基本は菊や唐草、牡丹、桐花文などの植物紋で、これらは瑞祥文として、不老、長寿、子孫繁栄を祈願したものといわれる(辻合1989、村西2009)。

5. 河内木綿の研究と復元

江戸時代、河内農家の代表的な生産物であった綿作綿織物の生産、つまり河内木綿の生産は、幕末明治の輸入綿花

綿織物で衰退していき、大正4～5年の段階で消滅してしまった。第二次大戦後の自由な歴史・経済の研究の中で、河内木綿を農業経済学の観点からはじめて研究されたのは、八尾市大窪に在住されていた大阪府立大学教授の武部善人先生であった。先生は河内木綿の生産が近代的な機械制織物業に発展出来ずに消滅していった過程を研究し分析された。その著書『河内木綿の研究』が、当時の出版事情の悪い中、八尾市長、助役、市議会などの方々が協力され、昭和32年、八尾市公民館内郷土史料刊行会の出版物として出版されたことも特筆すべきことである。この刊行会では同年、松田毅一氏の『河内キリシタンの研究』も出版していて、河内八尾の郷土の歴史を正しく知り、よりよい社会を建設していこうとする人々の努力があったことに感心するものである。昭和30年の『八尾市史』刊行、八尾郷土文化研究会、そして昭和50年のやお文化協会の設立へと続く流れがある。

ところで、武部先生は、この著書の中で、河内木綿の間屋であった綿屋吉兵衛の西岡家文書を紹介され、また巻末に参考史料として付属されたことで、河内木綿への関心が高まったことであった。

次に河内木綿の織物としての研究を始められたのは、八尾市恩智在住の辻合喜代太郎氏である。戦後、河内木綿の衰退から相当の年数を経過していたので、江戸・明治の河内木綿の織物、布団地などは顧られることなく、蔵の片隅に捨てられていたのも同然の状態であった。昭和30年代に家々で見捨てられていた河内木綿の布団や着物を北、中、南河内の旧家をあたって、丁寧に探訪されて収集され、研究資料としての『河内木綿譜』という大部の著書を昭和40年に出版された。そこには河内木綿の実物木綿裂れが添付され、縞木綿、藍染木綿の研究に大変貴重な文献となっている。

辻合先生は、大阪市立大学、京都府立大学の後、琉球大学に奉職され、琉球では紅型に親しまれた。帝国女子大学（当時）に移られてからは、八尾市内で河内木綿の展示や講演をされて、河内木綿の美しさ、文様の数々を説明された。また市民とともに河内木綿技術の伝承・保存に努められ、先生の指導を受けて、河内木綿の復元に意欲をもやす市民も多くあった。先生は資料館の建設計画時から検討委員会委員長を務められ、開館後は運営委員長として、資料館の発展に尽力された。

そのこともあって、辻合先生が平成5年に逝去された後、八尾市は、西辻前市長らが尽力され、平成10年にご家族から先生の収集された河内木綿資料の寄贈を受け、八尾市立歴史民俗資料館で保管することになった。この辻合喜代太郎氏収集染織資料は大小あわせて2400点にものぼり、江戸時代、全国的に先進地帯として有名な河内木綿の顕彰や研究にはなくてはならない貴重なものである。当時、私は資料館館長として市の河内木綿館構想を考える立場にあったが、経済の低迷等で立ち消えとなった。亡き先生に対して申し訳なく、残念の限りである。常時展示できる施設があればと思うものである。

八尾市の歴史民俗資料館は昭和62年の開館であるが、同じ中河内の東大阪市ではその10年前に、東大阪市立郷土博物館を開館した。その展示資料として河内木綿の収集調査が昭和48年に、学芸員の酒野昌子さんを中心に行われた。博物館や資料館での河内木綿の展示は東大阪市郷土博物館が最初ではなかったであろうか。綿を鉢植えに植えて栽培、開花させて展示したが、外来綿であったように思った。私はこの時東大阪市教育委員会の調査に参加させてもらい、酒野さんに同行した。綿織り機が旧家から見つかり、酒野さんがその図面を書いたりして研究されていた。私は江戸時代の河内木綿問屋が買い集め、販売した地域によって差があることに興味を持ち、東大阪市文化財調査報告書2『河内木綿』に書かせてもらった。

ところで、辻合先生の指導を受け、八尾市民の間に河内木綿の復元に意欲を燃やす人々が出てきたことを報告しておきたい。河内木綿の藍染染色に興味を持った人、縞織物に興味を持った人、河内木綿の綿作に興味を持った人などが河内木綿の復元、復活を願い、それぞれの活動を開始した。

その中に、河内木綿の綿作の復活を目指し、河内農家で農業に従事していた八尾市小阪合在住の寺尾和一郎さんがいた。昭和2年生まれで、勿論木綿を植えたこと、見たこともなかった。昭和49年、菓子製造業の「與兵衛桃林堂」（八尾市東本町、家屋は現在登録文化財に指定されている）で開かれた帝国女子大学名誉教授辻合喜代太郎博士が収集され収蔵されている手織木綿展の展示を見、講演を聴講して、江戸時代の河内農家が盛んに河内木綿を栽培し生業としていたことに感動、同じ農家として、河内木綿の栽培、復元に取り組もうとされた。種子そのものがなかったので、

昭和51年、奈良県の農家から種子を譲り受け、現在の八尾農協本店近くの住宅に囲まれた南小阪合町の農地で栽培を開始した。植える時期、種子の準備、畑の用意、種子の蒔き方、育て方、収穫の仕方まで試行錯誤して記録を取り、昭和57年に河内の畑地での耕作方法を自分なりに復元完成した。昭和59年からは河内綿の種子を市民サービスコーナーで無料配布したり、小学校や幼稚園で綿織体験実習などをしていかれた。昭和62年には市立歴史民俗資料館ができ、近くの農家から農地を借り、綿栽培を始めたが、その指導は寺尾さんをお願いされた。それ以来資料館での綿栽培は学芸員により現在も続けられていて、収穫した綿で綿織実習や藍染実習に役立っている。平成2年には辻合先生の主宰されている河内木綿研究会の一員として、大阪「花の万国博覧会」会場で河内木綿を栽培、全国・海外からの来場者に「河内綿」を配り、「河内木綿」の本場であった河内八尾を発信した。平成3年には綿畑の中に河内木綿工房を建て、入口看板に「河内綿畑と綿作業場」と書いた。植物の綿は棉の字を使い、収穫した綿花は綿の字を使い分けておられた。その工房を見学に行かせていただいた私は、そのような寺尾さんの主張だと感じた。その後、大阪市平野区や泉佐野市での木綿栽培を指導されたりして活躍されていたが、平成13年、享年75歳で逝去された。

平成13年3月、八尾市文化推進協議会の安積由高会長は「河内木綿シンポジウム」を開催することを提案され、パネリストとして八尾市立歴史民俗資料館から学芸員で河内木綿の研究や藍染実習をされている李熙連伊氏、河内木綿伝習所代表の西川悠子氏、河内木綿藍染保存会会長の村西徳子氏、資料館で河内木綿ボランティアをされていた平嶋淳子氏、文化会館で寺尾さんの指導を受け、綿織体験などのボランティア活動をされている市民と文化を考える会の浅川昌孝氏、それに資料館長の棚橋がコーディネーターとなって、文化会館会議室でシンポジウムを開催し、市民へ河内木綿の大切さ、復元への情熱を語る会を催した。これは『河内木綿を語るシンポジウム』（平成13年）としてまとめられている

平成13年（2001）、村西徳子氏の河内木綿藍染保存会がNPO法人となった披露パーティの席上、保存会の名誉会員であった安積由高氏（安積バレエ団主宰）が、ロシアのサンクトペテルブルグにあるエルミタージュ美術館で河内木綿展をしたらどうか、動いてみるという夢のような提案が

あった。保存会の賛意を得て、安積氏はバレエでのロシア出張の折、美術館関係者に打診、実現に向けて動き始められた。平成15年（2003）年はサンクトペテルブルグ建都300年にあたる年で、河内木綿にとっても大和川付け替え（1704、宝永元年）300年、河内木綿栽培拡大の年でもあり、両国の意義深い年でもあることから実現に向けて動き出し、大阪府や都市提携のある大阪市の協力もえて、安積氏や保存会事務局長西野民夫氏らが美術館との交渉にあたり、話が進んだ。



八尾市ではエルミタージュ美術館河内木綿特別展のため、安積氏、西野氏、前八尾市長西辻豊氏が発起人となり準備委員会が開かれ、出典資料の検討に入った。結局、江戸時代からの河内農家や商家に伝承されている木綿資料（オリジナル資料）としては市内本町（西郷）の旧木綿問屋「綿吉」の西岡家、市内黒谷旧庄屋家坂本家、市内老原の旧木綿問屋「嶋治」の寺川家の協力を得、これに資料館所蔵の辻合喜代太郎氏収集の木綿資料と大阪芸術大学文献資料を加えて出品、それに河内木綿復元作品として河内木綿保存会村西徳子氏の型染作品、河内木綿伝習所の西川悠子氏の復元織織作品の合計123点が出展されることになった。特別展は9月30日から11月30日までの2か月間開催され、多くの鑑賞者が来られ、成功裡に終了した。八尾からも市民36名がツアーを組んでロシアを訪れ、美術館での展示を楽しんだ（エルミタージュ美術館河内木綿特別展委員会事務局長西野民夫氏の「郷土八尾の文化遺産 河内木綿夢の展覧会が実現」（『河内どんこう』72号）。



現在も、辻合先生の指導で藍染や織物に興味をもたれた、保存や復元に活動されている方々がおられる。八尾市立歴史民俗資料館では、平成21年(2009)から年に一度、河内木綿まつりを開催し、資料館の特別展として河内木綿の展示をし、それと同時にこの展示に協賛している市内で活躍されている河内木綿関係の諸団体でも、それぞれで河内木綿の展示、活動の実際を市民に見てもらっている。

NPO 法人河内木綿藍染保存会は理事長の村西徳子さんが辻合先生との出会いから型染の手ほどきを受け、染めを始められ、復元創作活動を続けられてきた。平成12年5月、保存会を設立、その中心となられた。現在、河内木綿の染と織の復元と伝承を目的に、藍工房・村西を活動場所として河内木綿塾を開講されている。

河内木綿伝習所は辻合先生の河内木綿研究会から出発したもので、先生亡きあと、代表は西川悠子さんである。河内木綿の縞・格子織りの復元を目的として、八尾市立北高安小学校内の一室で綿織り、糸紡ぎ、機織りなどを行っている。

NPO 法人やお文化協会は、理事長が西辻豊氏(元八尾市長)で、河内文化の継承普及を目的として、郷土史『河内

どんこう』の発行や、八尾市指定文化財環山楼の公開管理業務の委託を受けて水曜、土曜の週2度開館をしている。『河内どんこう』の紙上での河内木綿の紹介や環山楼内での展示をして、河内木綿の普及に努めている。

NPO 法人 HICALI は、安中新田会所跡旧植田家住宅の指定管理をしていて、植田家に伝わる河内木綿などの生活資料を展示している。

(財)八尾市文化振興事業団は八尾市文化会館の指定管理をしているが、故寺尾和一郎氏の収集した木綿資料や復元作品を保存管理し、その展示や綿織体験などを実施している。

NPO 法人歴史体験サポートセンター楽古は、八尾市立しおんじやま古墳学習館の指定管理をしている。この河内木綿まつりでは、綿を使った工作体験を実施している。

この他、社会福祉法人などでは、河内木綿を題材にした絵ハガキ、お菓子、テーブルセンターなどの河内木綿関連商品の開発販売に取り組んでいる。

このように河内木綿の伝承復元に多くの方が取り組んでこられ、現在もその努力が続いている。

参考文献

- 大蔵永常(1833)『綿圃要務』
棚橋利光(1982)『河内木綿の販路』(八尾市史紀要、第4号)。
武部善人(1957)『河内木綿の研究』郷土資料刊行会。
辻合喜代太郎(1965)『河内木綿譜』衣生活研究会。
辻合喜代太郎(1972)「縞帳：河内・大和」『八尾市史紀要』第2号。
辻合喜代太郎(1974)『手織木綿』桃林堂。
村西徳子(2009)『河内木綿：文様と藍染の美』藍工房村西。

③場・みちと創造性

Space, Roads and Creativity



能楽高安流

Takayasu Noh Theater

第 11 章

高安と能楽

Takayasu in Yao and Noh Play

坂上弘子 (Sakajo Hiroko)

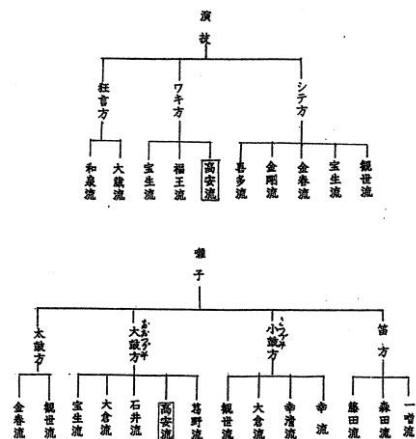
1. 高安は能楽ゆかりの地

奈良時代、シルクロードを経由して中国から散楽さんかくが入ってきた。散楽とは、唐時代に流行した軽業(かるわざ)のような雑技・舞・物まね・音楽などを包括した芸能と考えられている。『新猿楽記』(藤原明衡あきひら)によると、散楽は日本で田楽でんかく、猿楽ざるかくといわれるストーリー性をもつ舞踊・舞台上で演じられる劇に発展していった。それらの芸能は村の鎮守の神様に奉納され、村人は崇敬をもって鑑賞するようになったのではないだろうか。猿楽はしだいに能とよばれるようになり、笑いの部分が狂言に発展したというのが定説らしい。能と狂言をあわせて能楽というらしいが、私たちの認識では能楽といえば能のこととってしまう。

能を大成したのは世阿弥といわれているが、室町時代、1374年、京都今熊野において、観阿弥・世阿弥の父子が演じた能が、時の将軍足利義満を魅了したことがきっかけとなり、能は武士階級に広まった。やがて織田信長に次いで豊臣秀吉と、武將に好まれ武士のステータスになり、保護されるようになった。さらに江戸時代になると、神社・寺院でも演じられ一般庶民に浸透し親しまれていったらしい。

能は演ずる役と囃す役とで構成される。それらの役割のなかで専門化され、演ずる役はシテ方、ワキ方、アイ狂言に分かれ、囃す役は笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方に分かれた。そして、それぞれの分野の中で観世流とか宝生流とかいうように家を中心に流派が生まれたのであろうと思っている。

第 11-1 図 能の流派



2. 能楽高安流は高安が発祥の地

ワキ方と大鼓方

高安流はワキ方と大鼓方にある。ワキ方は、舞台上に最初に現われ、面をつけず、武士・旅人・僧など実在の男性を演ずる。シテ方のように色彩あでやかな装束ではなく、例外を除き、どちらかといえば地味な感じのする装束で、主役のシテ方が舞っている間は、舞台に向かって右前のワキ柱のところで座って演技することが多い。

大鼓方は「おおかわ」ともいわれるらしい、「イヨーオッ！」の掛声とカ〜ンと響きわたる大鼓のひと打ちは、場内を厳かに清閑にさせ、男性的魅力を最高に感じる。この大鼓が、能全体の演技、その能曲を導く役目をする。

高安流は、シテ方観世流ほど多くの人々に知られていないことは事実であるが、能の発展とともに歴然と今も存続している流派である。そして、高安流は高安山麓で発祥した。

高安流に魅せられた原点

私は、棚橋利光氏の「高安城を探る会」(第 11 章参照)に入会しているので、『日本書紀』に記載のある 7 世紀の高

安城を追求することが原点である。地元高安の土地柄などを知るべく「高安」という語には今も敏感になっている。高安城を探る会で謡曲に造詣の深い会員さんから「高安流」があることを教えてもらったのが高安流との出会いである。能については何も知らなかったのが、がむしゃらに能を観、図書館に通って勉強もした。

高安流ワキ方

高安流ワキ方は、元は金剛流の座付きであった。現宗家高安勝久師よりご教示いただいた高安家系図によると「金剛伊右衛門、河内国高安郡高安明神(八尾市神立の玉祖神社)に社仕、高安太夫與兵衛ト云フ長助父也、三好ノタメ京六条ニテ討死」、「高安太夫横田長助、河内国高安住人依而高安オ名乗ル、天正十三年乙酉長久手合戦ニ尾劔小牧ニテ討死」、「高安與八郎、後太郎左衛門ト改ム、高安流初代、法名孤雲壽閑居士」(以下現在まで続く)とある。

整理すると、金剛伊右衛門 ⇒ 横田長助 ⇒ 初代 高安與八郎(後に高安太郎左衛門) ⇒ 二代 高安太郎左衛門 ⇒ 三代 高安彦太郎と続き、現在は十四代 高安勝久師に至り、活躍中である。

これで見ると、金剛伊右衛門が玉祖神社に仕えていて、六条合戦(1569年)戦没した。息子の高安太夫横田長助は高安の住人であったため、高安太夫高安長助と名乗ったが、天正十三年(1585)小牧で戦死し、息子の高安與八郎が高安流初代となり、高安流ができた。よって、ワキ方高安流は16世紀に高安山の麓で発祥し、現在まで続く流派と考えている。

高安流大鼓方

大鼓方の系図を、野上豊一郎『能楽全書』で見ると、初世 高安与右衛門道善ちかよし允美、弘治3年、二世 高安与兵衛ちか允英、永禄12年没、三世 高安与兵衛美堅、慶長元年没と続き、十六世 高安道喜、昭和21年没後、現在は安福建雄氏の宗家預りとなっている。

初世の高安与右衛門道善允美は『信長公記』に高安権頭ごんのかみ、『信長記』には高安権守ごんのかみと記され「天下無双の鼓の名手」とある。いずれも六条合戦の項に見られ、三好の軍勢に加わり討たれている。高安と名乗っているからには、河内高安に違いないと考えられ、弘治3年(1557)に59歳で没しているとある。が、六条合戦は永禄12年(1569)であるから、

初世の没年と一致していない。どう解釈すればいいか。

高安流を生みだした土地柄

2012年は『古事記』編纂1300周年の年であった。この『古事記』に高安山が登場するのを初めとして、高安千塚古墳群は早くから考古学界に知られるように、高安山山麓には、各時代の遺跡・史跡が散在する。『伊勢物語』の業平伝承地や民俗的な遺産も存在する。すなわち生駒山から高安山の山系は河内と大和を隔てており、古代より往来は激しく要衝の地であった。また人の暮らし向きに適した条件に合った土地にちがいになく、この山麓に人々が集まり住んだと想われ、自ずと歴史が形成され、そんな土地柄、風土が能の高安流を生みだした思っている。

3. 恩智での能楽

上記の玉祖神社を中心とする高安流の能集団とは別に、恩智神社を拠点とした能集団があったことが判っている。高安山山麓は、明治以前において河内国高安郡であった。高安郡の大庄屋である恩智の大東家に残された多くの古文書がある。その中に、高安太夫、高安吉助、などと高安を名乗る能役者の名が見られ、「難波常舞台」とか「曾根崎常舞台」など演能のチラシのようなものがあり、高安又太郎・高安仁兵衛・高安九十郎なる能楽師の名がみられる。また、高安郡垣内村の旧家に翁面などの能面・文書が残存し、それらは2012年八尾市の文化財の指定を受けた。

「井筒」・「弱法師」は高安ゆかりの曲

高安山麓に題材をとる能曲が多いことも、現在では能と地域関係を深くしている。「井筒」「弱法師」は謡に親しんでいる人や能に関心のある人には必ずといってよいほど熟知されている。

能曲「井筒」

「井筒」は『伊勢物語』23段、井筒の傍らで遊んでいた幼馴染の男女が成長して結婚する。女(井筒の女)の親が亡くなり経済状況が悪くなる。男(大和の男)は高安の里に来て高安の女と懇ろになるが、女が自ら飯を給仕する(昨今この解釈には諸説あるが)のをみて高安の女のもとに通わなくなった。この説話をもとにし、大和の在ありはらでら原寺を舞台に、大和の男は在ありわらのなりひら原業平、大和の女は紀有常きのありつねの娘という設定

でストーリーが展開する。勿論、高安の女とのことも話に出てくる。また、高安を舞台にし、高安の女を主人公とした「高安(女)」という能曲もあるが、現在は廃曲になっている。

能曲「弱法師」

「弱法師」は高安郡山畑村が舞台。当地の長者高安通俊は世間の告げ口により、息子の俊徳丸を家から追い出してしまう。しかし、その呵責にさいなまれ四天王寺で修行をする。そこに施しを受けに来た盲目の稚児がわが子俊徳丸であると判り、高安郡山畑村に連れ帰るといふ話。四天王寺西門に夕陽に西方浄土を祈る《日想観》がこの物語に全体に漂う。下村観山の「弱法師」の絵には大きな夕陽が主張するように描かれている。高安から眺める夕陽は最高に美しく、夕陽に照らされる高安山もほんとに美しい。弱法師は伝承であるにもかかわらず、山畑にある6世紀の横穴式石室をもつ古墳を俊徳丸塚古墳と呼び、俊徳丸の墓と伝えられている。

歌舞伎では弱法師は「摂州合邦が辻」というタイトルで演じられるが、かつて俊徳丸を演じる歌舞伎役者はこの墓に参りにきたという。実川延若が寄進した焼香台などがある。近くには俊徳丸屋敷跡と伝わる場所もあり、市内外の史跡めぐりのグループが再々訪れている。

高安流を知ってもらおう

2001年5月、能楽はユネスコ世界無形遺産に認定されたことは多くの日本人の知るところである。高安流も能の流派のひとつとして、発祥以来、連綿と今日まで続き、舞台上で演じられている。この事実を特に地元高安山麓の人々や八尾市・河内の人々、ことに子どもたちに知ってもらうため、小中学校や、また留学生を対象としたワークショップを行うなど、意義を認識してもらいたいと、啓蒙活動をしている。

高安ルーツ能実行委員会

2008年8月、「高安ルーツ能実行委員会」を立ち上げ、観世流シテ方山中雅志師を中心に高安流を広めようという意志をもった人たちが集まった。「高安能」と称して、1年に1回、高安流の役者による高安に関連する能曲などの演能会を以下の如く主催している。

第1回 平成20年10月19日(日) 13:30～ 芝能

1部 トークショー 「高安と能楽」 大竹会館

2部 心合寺山古墳もけいの広場

仕舞「弱法師」「土蜘蛛」 能「井筒」

第2回 平成21年11月3日(祝) 13:00～ 芝能

1部 トークショー 「高安と能の関わりを深く知ろう」大竹会館

2部 心合寺山古墳もけいの広場

仕舞「井筒」「土蜘蛛」 能「弱法師」

第3回 平成22年11月3日(祝) 13:00～ 芝能

1部 トークショー 「高安のお話」大竹会館

落語 「弱法師」立花家千橋

2部 心合寺山古墳もけいの広場

仕舞「井筒」「土蜘蛛」 能「弱法師」

第4回 平成23年10月22日(日) 14:00～ 薪

1部 シンポジウム 大坂経済法科大学

「名曲の数々を生んだこの地 高安とは」

講演「俊徳丸物語と富士太鼓」棚橋利光

高安ルーツ能実行委員会

パネルディスカッション「番外曲高安とこの地の風景」

2部 「薪能」 玉祖神社

仕舞「井筒」「松虫」 能「富士太鼓」

第5回 平成24年10月20日(土) 14:00～ 薪能

1部 大阪経済法科大学

講演「高安庄と高安氏」小谷利明

パネルディスカッション 「時を経た流派と高安」

2部 「薪能」 玉祖神社

仕舞「弱法師」「土蜘蛛」 能「井筒」



以上のように、能に高安を発祥の地とする高安流という流派があることが市民に浸透し、認められつつあるように感じている。しかし、困ったことがある。演能のための資金の調達である。公的バックアップを期待してやまない。

第12章

河内国の大和川付け替えの大変革

Renewing Yamato River's Flow in Kawachi

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. 大和川流路の変遷

河内国は浪速の入江（現在の学術用語では河内湾とか河内湖という）を淀川や大和川の流れが、長年にわたり土砂を運んでできてきた堆積平野が大きな面積をしめている。大和川の本流・支流は多くの分流となって北西方向に流れ、上町台地の北に出て、淀川（大川）と合流し、仁徳天皇時代に掘られたという難波の堀江から大阪湾に流れ出ている。出口が狭いため、上町台地東側には、難波の入江と総称される多くの入江があった。

中河内の八尾近辺でいうと、亀瀬の峡谷を出た大和川は、北西に何本にも分かれて流れ、土砂を運び、平地を造っていった。大和川水系が作り埋めて行き延ばしていった平地と、寝屋川・淀川水系の造った平地が入江を埋めていき、近世初頭まで中河内と北河内の間には深野池や新開池などの大きい湖沼を残していた（河内湖）。

この川が作った国、川の中の国、川が取り巻いている国、これが河内国という国名となっている。それ故、河内平野は河内そのものである。大和の山々や盆地はこの川の水源地であり、また南の羽曳野丘陵から金剛山系に続く山々も大和川の水源地である。こちらの流れは石川や東除川となり、狭山池に流れ込み流れ出るのは西除川である。

大和川の分流は時代により大きく変わってきたことは考古学の発掘調査結果で、近年明らかになってきている。現在、我々が付け替え以前の大和川として思い描く川の流れに近づいてきたのは7世紀代から9世紀代と見られている。八尾市二俣で大きく分流した大和川は東の川を玉串川といい、西側を長瀬川という。長瀬川は八尾市植松付近で北へ折れて北上する。

7世紀から9世紀代はこの植松付近からもう一度西へ分岐して流れ、大阪市の平野の町を通過して北上する流れがあった。奈良時代から平安時代初めにかけて、この川を河内

川と呼んでいる。つまり現在我々が大和川といっている河内を流れている川は河内川であり、その本流は二俣から西に分かれ植松を通り平野の方向に流れている川の流れが大和川の本流であると見ていたことである。植松でわかれた長瀬川は北流する(阪田 1997)。

『日本書紀』の仁徳天皇13年冬10月条に見える横野堤を築くとある横野堤は渋川郡の西岸河内川に面して築かれた川堤であろう。また『続日本紀』延暦7年6月16日条に和氣清麻呂が「河内撰津両国の堺に川を掘り、堤を築き、荒陵の南より河内川を導きて西の海に通じさせる」といって、工事に当たらせたとするのは、玉造方面へ北上する河内川の流れを荒陵の南から浪速の海へ抜いて、洪水などの水害を少なくしようとするものであった。この工事をするということは、河内川の本流は植松から平野方面へ流れていたことを示している。

和氣清麻呂の河内川の改修工事は成功しなかったのであろう。大和川、つまり長瀬川は中世以後、植松から北へ流れているため、記録はないが、この後のいつかの時代に、河内川の流れを植松付近で川が堰き止められ、長瀬川へ流れるという流路の変更があったものとする。自然か人工か、流路の変更があったことは確かである。室町時代、両畠山の戦乱で植松堤を切るなどのことが行われたので、それ以前に植松堤による堰き止め遮断があったことが考えられる。

現在の付け替え以前の長瀬川、現在の長瀬川跡地にできた長瀬川水路（井路）はこの形になっている。植松付近で大きな決壊があったのか、渋川郡植松の土地が長瀬川の北岸にも大きく残る。現在渋川神社は川西にあるが、中世以前いつか分からないが、決壊以前は川向かいの土地にあったといわれる。平野方面への流路が何時なくなったのか、知りたいものである。植松堤を切るというのが『大乘院日

記目録』文明 15 年 8 月 22 日条に出る。畠山右衛門佐義就
が応仁の乱の時、長瀬川堤防を切って洪水を起こしたので
あるが、植松の右岸か左岸かにより洪水の大きさも変わる。

一方、長瀬川の方も、『続日本紀』天平宝字 6 年 6 月 21
日条に、河内国長瀬堤が決壊、2 万 2 千 2 百余人を動員して
修造したとある。大水が出ると長瀬川の決壊があったこと
が知られる。河内川の本流がなくなる以前とすると、一方
の長瀬川の流れも、大雨の時期には大水がでることがあ
ったことが知られる。

二俣で分流してすぐの長瀬川の両岸に弓削の地名がある。
右岸沿いに旧村の東弓削がある。左岸に弓削村（西弓削）
がある。どちらにも弓削神社があり、どちらも式内社に比
定されている。洪水により川の両岸に神社ができたと伝え
ている。東弓削に古代の弓削寺、由義宮の跡があると見ら
れている。まとまった遺構が出土しないのは、長瀬川の氾
濫で流されてしまったからであろうか。

もう一つの大和川分流の玉串川沿いにも氾濫の跡の錯綜
地がある。若江郡の式内社三野県主神社が現在は川東、河
内郡内で右岸堤防跡近くに鎮座している。

考古学の発掘調査は八尾市の全域で行われているが、ど
の遺跡も川の土砂をかぶっている遺跡が多い。何回も何回
も川の氾濫や洪水にみまわれ、埋まってはまたその上に集
落や田畑を作った歴史が刻まれている。まさに河内は水の
国であったことがわかる。川の氾濫で土砂が流されてくる
が、洪水のときは養分を残していくので、河川の水ととも
に生活してきた歴史があったのであろう。この状態が江戸
時代の和川付け替えでどうか変わったか、次に考えていき
たい。

2. 大和川付け替え工事

大和川の付け替えの大事業は宝永元年（1704）の 2 月か
ら 10 月にかけて幕府の命令で大名の力を動員して行われた。
江戸時代に入って、河内国での水害の被害は、まず元和、
寛永年間、2 度にわたる大和川の堤防大決壊で、柏原村の堤
防 300 間が切れ、人家、人命の大被害があった。以後、延
宝 2 年（1674）年の法善寺堤の決壊以後、川下の河内郡低
地部で何度も決壊が続いた。川が運ぶ土砂の堆積がひどく、
年々河底が上がり天井川化が進んだことで決壊しやすくな
り、また川下の深野池新開池とその下で水捌けが悪くなる
一方であった。

この事態に川下村からの付け替え要望も強くなる中、幕
府では付け替えを考慮に入れる動きが出てきた。万治 3 年

（1660）の片桐石見守の見分、寛文 11 年の永井右衛門の見
分、延宝 4 年の彦坂老岐守の見分の時、それぞれ水害見分
をした後、測量の杭打ちをするなど、柏原村付近から西の
浪速の海（大阪湾）への付け替えを調査する動きがあった。
幕府当事者の苦悩と議論があったことは新井白石に『畿内
治河記』に書かれている。だれがそれを考えたのかは分か
らないが、当時の奉行の中に付け替えの考えが早くあった
ことは注目すべきである。しかし現地調査で試しに杭打ち
してみると、敏感な付近の村では警戒感が広まり、反対の
声がかかるようになり、試みの調査だけということで、そ
の場を引き上げていくことが続いた。その度に付け替え流
路に想定された村々では反対陳情のため庄屋などが江戸へ
行き、また付け替えを願う川下の村々も江戸へ人を送るこ
とになり、見分の役人が来る時は大変な緊迫した事態とな
った。また大坂城下奉行所前では両者の小競り合いも起る
ことになった。

こうした中、幕府は結論を得るため、天和 3 年（1680）
年稲葉石見守らに畿内河道を巡見させ、治水の専門家河村
瑞賢等を随行させた。瑞軒らは摂津河内大和の河川を廻り、
山地も状況も調査し、淀川大和川水系の調査見分をした。
その結果、開発で山が荒れ、土砂が河川に流失することが
河川の流れを邪魔し、洪水を引き起こすとの結論を出した。
幕府は貞享元年から 4 年かけて、河村瑞賢らに河川の浚渫
を大々的に行わせ、安治川の開鑿や大坂の諸河川の浚渫を
行った。

しかし、この河川浚渫は河内国の大和川水系での洪水氾
濫被害には効果が出なかった。大坂の河川の浚渫はされた
が、河内の低湿地、深野池・新開池付近の水路などの浚渫
はなかった。

この事態に恐らく幕府内では大和川の付け替えしか事態
の打開の方法がないとの結論になったのであろう、突如、
元禄 16 年（1703）、大和川の付け替えが決定され、動き出
した。河内低地部の中甚兵衛らも驚くほどの急展開で、付
け替え反対を主張していた村々も江戸に陳情に行く暇もな
く、決定となった。

これまで付け替えはしないしないといってきた、その実
は新流路の研究をしていたので、相当詳細な調査ができて
いたのか、大和川の新流路については、早々と、柏原村か

ら大田村の南、瓜破村と羽曳野丘陵を迂回する形で廻り込んで、依羅池を通過して、浅香山に出、遠里小野から堺と安立町の間を抜けて堺近辺の大阪湾にでるコースが確定した。

図表 12-1 西暦 1703 年代大和川流域の図



(出所) 元禄十六年大和川河内国志紀郡宇築留ヨリ未流
泉州堺浦エ川遷図 (柏原市大和川築留堤防上の説明板より)

付け替え工事は姫路城主本多中務大輔忠国に助役を命じ、若年寄稲垣対馬守、勘定奉行荻原近江守らを普請御用に、それに普請奉行に大久保甚兵衛らを命じた。元禄 17 年 3 月になって工事の中心人物姫路城主が急死、代わって岸和田藩主岡部美濃守らが手伝普請役に命じられて付け替え工事を行い、同年宝永元年 10 月、一年未満で工事を完成させた。幕府の工事はできたとしても、付帯工事の方が大変であったように思われる。

3. 村々の用水水路、樋の設置

まず、新大和川より以南の土地での水捌けの問題である。これは反対諸村が主張していたところである。石川の分流である東除川、狭山池から流れる西除川らの流れが新川で止められてしまい、はけ口をなくし、洪水となるのではないかとの問題である。これは新川の南に落掘川を付け、諸川の水をここに流し、川下まで導き新川本流に流し込む工事をした。有効の解決策であったが、第 2 次大戦後でも堺東部で水害が起こっている、万全ではなかったのだら

うか。

次は、新川より北の地域である。この地域は大和川の水で弥生時代以来稲作などの農耕をしてきたところである。新川ができ、旧川が止められると、たちまち水不足が起こることが予想された。しかし一村一村ではなんともできないので、村々が組合を作って対応する必要があった。旧大和川沿いの村は築留堤防に樋を設置してもらい、旧川の中に水路を作り、水を引き、各村は旧川でやっていたように水路から樋門を開いて水を流すことにした。築留樋組 78 村の組合である。

旧川の柏原村青地樋からの水と小河川からの水が集って平野川となっていた流域 21 村は青地樋組合を結成、新川堤に青地樋を設置してもらい、水を取り入れ平野川に水を流し、農業水路とした。

築留樋、青地樋など多くの樋は新川堤防構築時に樋門を幕府の手で開けてもらったが、旧河川敷に水路を作り、樋門や導入水路をつくることは組合村にまかされた。詳細はよくわからないが、この工事は各村とも必死で大変な工事であったのではなかろうか。青地樋に関して、弓削村の西村市郎右衛門が幕府の許可を得ず樋を作り水を通し罰せられたとの話も伝えられている。

特に築留樋の場合、柏原村築留から北の寝屋川に入るまでは非常に長距離であり、川下では自村まで来るまでに水がなくなり、水不足は必至のことであったであろう。河川で囲まれた水は豊富にあった水どころの河内諸村は、この後水不足に悩まされることになる(棚橋 2005)。

自然の川は恩智川と楠根川が残った。河内は低湿地であったので、大水の時は、これらの河川は水吐けが悪く、水害となり、干天の時は水不足となる。一方、新大和川沿いでは、堤防の決壊がこれ以後心配となる。もし決壊すれば、河内から摂津、現在の大坂中が水没するかもしれない。しかし、大和川の付け替えは河内での大きな水害被害をなくした点で画期的な事であったといえる。

参考文献

阪田育功(1997)「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』和泉書院。
棚橋利光(2005)「大和川付け替え後の用水問題」『河内どんこう』第 75 号、第 76 号、第 77 号。

第13章

久宝寺寺内町のまちづくり

Town Development in Kyuhoji Jinaicho or Temple's Ground of Yao, Osaka

高垣匡往 (Takagaki Masayuki)

1. はじめに

八尾市が平成5年度から平成14年度までの10年間で実施した「街なみ環境整備事業」は、久宝寺寺内町まちづくり推進協議会（以下推進協という）と協働で施行するなかで、平成10年度に「まちなみセンター」が竣工した。推進協は当センターを拠点としてまちづくり活動の取り組みを始めた。



2. 実践目標

久宝寺寺内町限定のまちづくりではなく、八尾市全体の主導的事業として位置づけ、八尾市の歴史的文化的の継承、発展の維持ができるよう、自然・歴史的景観の保全整備や、現代的景観の創造に努める。

また、久宝寺寺内町は「重要伝統的建造物群保全地区」に指定されるほど文化的価値は高くはないが、充分に歴史性を残すまちなみは、旧寺内町だけではなく昔の街道沿い跡など各地に多く見られる。

久宝寺寺内町のまちなみでは、多くの「住建地区」で行われているような観光事業との連携を期待したまちづくりは難しく、主に地域教育の一環や、より良好な住宅づくりの意味合いを含めた住環境整備も併せて行う。

3. 具体的な方向づけ

地区の歴史を生かしながらも、現代の生活に適応させるまちづくりとして、住民がまちに誇りを感じることができるようにする。

3.1 継続性

将来に向けた継続的な取り組みを行う。日常的な問題解決、将来のよりよい地域像を画き、その実現に向けて継続性を維持する。特に防犯、防火面に重点指向する。

3.2 総合性

総合的な取り組みをする。まちづくりには「ものづくり」、「ルールづくり」、そして「人づくり」など様々な要素が関連する。目指す地域像に応じて「人づかい」・「物づかい」も加えて総合的に取り組む。

3.3 協調性

住民と行政との協働による取り組みを進める。NPO、企業等多様な担い手との連携をはかり、お互いに汗を流す仲間と取り組む。

3.4 情報共有

まちづくりラウンドテーブルを設ける。肩肘張った議論をするのではなく、テーマを揚げず、座長もなし、フリートーク、その中から問題点を見出し、建設的な意見を採り上げてテーマとし、再度フリートークを行う。若い世代の積極的な参加を望む。

以上は平成15年度総会で提案し承認された。

4. その後の歩み

4.1 まちが人をつくり、人がまちをつくる

ハード的なまちづくりは終わった。これからはソフト的なまちづくりの取り組みを推し進めなければならない。

「まちづくり」の「まち」を市とか町村といった自治体を指すとすれば、まちづくりは自治体の「総合計画」で決めればよい。「まち」のニュアンスは、きめられた区域のことではなく、生活を取り巻く環境や、共同で物を考える人々のつながりといったように漠然としたものと位置づけている。

「物」を主体としたまちづくりは整ったので、これからは、自然や歴史的遺産、伝統文化等、魅力あるものを発掘し活用する。所謂「物づかい」をして集人効果を狙い、まちの活性化を図らなければならない。自然や遺跡は先祖代々からの遺産であり、一度失えば再び現れない、預けられた遺産を増やして次世代に伝えるのが今日生きる世代の「甲斐性」ではなかろうかと、会員（372名）を中心に住民に訴え続けている。

“まちが人をつくり人がまちをつくる。賢明な住民は良いまちに住める”をキャッチフレーズにして、まちを愛する「人づくり」から始めた。まちを愛する人が多くなるほどまちは良くなる。

そのためには住民にまちに対する価値観を高める必要があるので、手段として数回にわたって「寺内町」の歴史について勉強会（古文書解説）や講演会を催したり、年間3～4回ラウンドテーブルを設けてニーズの吸収につとめ、日常生活環境の改善に役立っている。



井の中の蛙大海を知らずでは困るので、毎年1回近府県のまちづくり先進地域で見学会、研修会を実施している。参加者には物見遊山ではなくて、あくまでも勉強会だと主旨を強調し、役員には調査項目を示して、見たこと、聞いたこと、感じたことを記録してもらっている。

対象地域では、旧家を開放して土間や下座敷に土地の物

産や、手工芸品等の展示販売、空き家を利用して喫茶、食堂など多彩な活動を展開している。また空地や露地を利用して若者のライブや大道芸を披露するなど、ボランティア活動にも励み、まちをあげて活性化をはかる意欲をもやしている。まちを愛する人々のつどいと、活動の実態をみてこれからのまちづくりに大いに役立っている。

先進地域に比べてわがまちには、観光的資源に乏しく特産品もない。まちの中心的存在である顕証寺は、宗門では「連技の号」をもち「勅許の紋」を拝受、木造建築の本堂は府下随一のものであっても、門信徒以外は余り関心を示さない。また土地の名産品も「帯喜多の餡巻」に続くものがほしい。人間は欲望の固まりであり、奇を求め、珍品を探す。そこへ行かなければ見られない、食べられない、それを求めて行動する習性がある。わがまちには、人を引きつけるものがないので、人集めは難しい。

4.2 まちを愛する心づくり

先進地域の人々はまちを愛する心を持って活動しているのを見るにつけ、物は無くても心は育てられると考えて「まちを愛する心づくり」に着手した。

「まちを愛する心」を育てるには、子供の頃から始めなければならない。わがまちの歴史的資源を生かした学校教育の場として活用するよう市教委に要請して、近辺小学生を対象に「まちなみ探検」「写生会」「ビデオ鑑賞」等を実施した。また中学生を対象に歴史教室を設けてもらい講師をつとめたり、数多く在る地藏尊のルーツを調べたりして、寺内町の存在価値を学んでもらった。

近年全国的にまちづくりが進み関心が高まり、大学、企業、団体から講演に招かれたときは、会を代表して講師を勤めている。

平成17年度からマスコミの記事や、ロコミで関心を高め、近鉄八尾駅長主催のウォークラリー（毎回250～300名）や学会、企業、団体（平均70～100名）、他府県からの来訪者が増えていることを喜ばしく思っている。

これらの方々に対する案内や説明は、役員の他養成した会員ボランティアが担当している。来訪者が増加しても住民の意識は余り変わらない。



水路清掃

4.3 寺内町灯籠まつり

住民の力でまちをつくるという意識づけの手段として、年2回大水路(昔事の背割水路)の清掃作業を住民と小中学生も参加して実施しているが、会員以外の住民の関心は余りない。

思いつきの行事を継続するなかで、関心を集めるイベントについて考えをめぐらしながら「奈良春日野の灯籠まつり」や「明日香の光の祭典」も参考にしたが、大イベントは多数のスポンサーの力で実施しており、桁違いで太刀打ち出来ない。大きいばかりが能でない、身の程知ったイベントを探り、富田林寺内町まつりを見学し、実施計画内容や予算規模等調査した。富田林では市販木製灯籠を1個千円で住民に購入してもらい、固形ローソクを支給して実施、当日各自家の前に出して点火してもらっている。

集人効果も上がり、地域振興に役立っているのは認めるが、私の考え方と相違がある。考え抜いた末の結論は、幼児から大人まで住民が出来るだけ多く何等かの形で実働して、その成果を世に問えば、まちの住民の自覚心も向上しまちを愛する心も育つであろう。

この考えを基にして「久宝寺寺内町灯路まつり」の実施計画と事業予算等の私案を作成し、役員で審議のうえ満場一致で賛同を得た。

5. 計画の内容

まちなみセンターを挟む東西の2筋とその周辺道路など

800メートルにわたり行う。路肩に設置する灯籠は木製(1辺30cm、高さ50cm直方型)150基とプラスチック製の灯火カップ(半径5cm、高さ10cmの円筒)1000個、固形ローソク1600個、ほか。

制作に当たっては木製灯籠の工作図面(センター長に依頼)を基本にして中学校の工作時間に50個、一般住民で100個の枠組みを作ってもらい、紙張りは女性会の手で行ってもらう。カップの絵は幼稚園60個、小学校600個、中学校200個、一般140個依頼する。木製灯籠の書画は中学校絵画部50基、俳画クラブ50基、一般50基を依頼する。

作業は分担表に基づき各部署の責任者に一任する。予算は原則として会員会費には手をつけない。寄付金も求めない。他人のフンドシで角力をとる。会長は準備作業に一切口出ししない。渉外を担当する。実施当日の計画は別途作成する。

以上のことを提案し満場一致で承了作業を始めた。カップ、固形ローソクは一括購入。木製灯籠の木材は、区域外の材木商にも行き、廃材を寸法通り無償で製材してもらい、多数のボランティアで組み立て作業を行った。

カップや灯籠の書画は各々心を込めたものであり、力の結集の成果が表れている。経費については、府と市にイベントの主旨を説明し、充分の助成をしていただき感謝している。

第1回目は2009年9月27日に実施した。当日は自分たちの作った灯籠を見に来た親子連れや多くの見学者(マスコミ発表4500人)が訪れ、近くにこんなところがあったのかと歴史を誇るまちなみを知り、寺内町が賑やかな雰囲気包まれた。

マスコミの問いかけに「多くの子供達がこの祭りに参加してくれている。歴史的遺産に触れることで、郷土愛が培われるであろう」と答えておいた。

翌年の9月、第2回目を盛大に終了したのを機に、会長職を退いた。本イベントは以降毎年実施しており、昨年は八尾まつりと同時開催を行った。

今後とも、諸行事を継続実施し、内容の充実をはかるため、毎月1回定例役員会を催し、また、更なる事業展開を考えてまちなみセンターの指導管理者の申請を行っている。

第 14 章

八尾の市・お速夜市の伝統

Tradition of Otaiya-Ichi: The Periodic Market in Yao, Osaka

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. 八尾から久宝寺までお速夜市が続いた

八尾の商業といえば、お速夜市という、八尾市内の人は誰でも知っている市が立っていた。今も少規模であるが、大信寺の南側の路上に露天市が立ち、衣服などを売っている。以前は衣類・食料品・農機具・履物・植木など、市の立つ毎月十一日と二十七日の両日はここに来れば何でもそろうと云われたほどであった。このお速夜市、戦後間もなくの頃は、久宝寺の町から八尾の町まで続いていたといわれている。のぞきからくりまで出ていたという。お速夜は命日の前夜のことで、二十七日は浄土真宗祖親鸞上人の命日の前夜にあたる。久宝寺の顕証寺、八尾本町の大信寺ではそれぞれ仏事があり、そのお参りに合わせて市が立ったと考えられる。何時からお速夜市があるのかは定かではないようだ。この市には大和からも東の山越えで平群の人などが買い物に来たと云うから、中河内での最大の市といえるのではなかろうか。

2. お速夜市はいつから

それでは、お速夜市は、いつごろからあるのかという点について、常光寺住職片岡英宗氏が編纂主任となってまとめられた『中河内郡誌』(大正 12 年刊)には、次のような説明が有る。

八尾の市の起源については知るよしもないが、毎歳七月二十四日の地藏会式当日に行っていたことは『河内名所図会』常光寺の項で明らかである。常光寺文書と古老の話で概記すれば、常光寺の縁日には人手が多かったので、寺内村より小屋掛けし店を出す者が多かった。またおどけ芝居、浄瑠璃、相撲、小見世物等の小屋があったが、明治維新前数年にわたり、松平伊豆守等が京都へ上った時、大坂に立ち寄り、当寺へ巡見した。その都度大坂西役所より縁日の水茶屋や辻狂言等の小屋を取り払うようにとの達しが来た

ため、八尾の市は漸次衰退し廃滅した。

しかし商家では如何にしても再興したいとして明治七～八年頃の某月十一日(旧暦二十四日にあたる日)に常光寺門前より街道筋に露店を出すようになった。寺は法要をしなかったが、寺内村の発展があり日を追って盛んとなった。また久宝寺御坊で営まれる速夜日の二十七日に参詣者が多かったので、この日を加えて毎月二回とし、お速夜市の名が始まり、八尾御坊から久宝寺御坊に到る間に店がでるようになった。このように書かれている。

3. 常光寺・八尾の市からお速夜市

江戸時代の享和元年(1801)に出た『河内名所図会』には、八尾西郷村の初日山常光寺のところに八尾市(やおのいち)の挿絵があり、人々が群集する様子が描かれている。7月24日の地藏祭りに常光寺の楼門前が多く参拝客で埋まり、門前の店屋には食べに入っている人々が描かれている。からくり人形のような見世物もでている。説明には「八尾市 毎歳七月二十四日ハ地藏祭とて遠近群集す、六道能化の菩薩なればたのみ奉りて善道へ導きたまふを願ふなるべし」などとある。露天では陶磁器や傘、櫛を売っているし、立ち売りの女の人もいた。天秤棒でものを運んでいる人もいる。二本差しの武士、ホラ貝をふく行者、僧侶、商人、女の人などごった返していた。子安地藏尊のぼりも見える。常光寺が安産の仏さんであったことを物語っている。

この挿絵を見ていると、八尾の市が江戸時代に盛んであった様子を知ることができる。八尾には、常光寺の南に隣接して新しく寺内村(行政村)という商業の町ができたため、その繁栄が八尾の市の成立の基になったと思われる。

この伝統が、『中河内郡誌』の説明にあるように、明治になって毎月2日のお速夜市となったのであろう。年末の12

月27日のお逮夜市には正月準備に買い物に来る人々が詰めかけ、大繁盛していたことであろう。田中幸太郎著の『日本の原風景河内 シャモとレンコン畑』には昭和30年代前半のお逮夜市の賑わいが活写されている。

やお文化協会では、かつて河内一円の風物詩として愛されていたこの「市」の復興が必要と論議し、協会20周年の事業としてファミリーロード買物公園の一角にお逮夜市の石碑を建立した。これを機会にお逮夜市の歴史的価値が再認識されて後世に伝承され、この地に隣接する商店街が活性化することを願った。

現在、近鉄八尾駅を中心にペントモール八尾、近鉄八尾北商店街、北本町中央通商店会、新栄商店会、八尾銀在商店街、ファミリーロード、八尾表通商店街、本町商店会、それに西武百貨店、アリオ八尾がある。これらの商業地は、常光寺や八尾天満宮、八尾御坊など多くの社寺を中心に古

くから商業が栄えた町の伝統を受け継ぐものといえる。八尾駅前広場には河内木綿伝承の地の碑、歯ブラシの碑があり、旧駅跡地にできた買物広場にはお逮夜市の碑が建立されている（『シャオンやおのまちガイド』八尾商工会議所発行、平成21年）。



八尾の市

『河内名所図会』巻之四

④ 集り・交流と創造性

Associating, Interacting and Creativity



「創造的な」お逮夜市

Otaiya Market which had been held on the day of 11st and 27th every month on the roads
Between Kyuhoji Jinaicho (Temple Compound Town) and Yao Jinaicho, which is really creative

第 15 章

講念仏踊り：地域の取り組みについて

Kohenbutsu Dance: The Local Activities

山下 彬 (Yamashita Akira)

およそ300年前から地域に伝承され、時代の流れとともに昭和8年頃に途絶えてしまった「講念仏踊り」を、十数年前に志紀小学校在職中の兼田教諭が大和川についての教科の中で、地域（田井中）在住のお年寄りから学び、数年間、子どもたちと復活したが、転勤と同時に途絶えてしまった。

おりしも「大和川付け替え300周年」を契機に、郷土史愛好家から、復活の声掛けと熱意に賛同して、曙川東小学校に在任中であつた教諭の協力のもと、平成15年に「曙川東地区講念仏踊り保存子ども教室」として、曙川東地区福祉委員会により創設した教室である。

平成16年に、文化庁の委嘱機関「財団法人伝統文化活性化国民協会」へ創設財成申請をし、認可を受けて、鉦・太鼓を購入して、地域の伝統文化を後世に伝承していくために活動している。

当地区の「講念仏踊り保存子ども教室」は地区福祉委員会伝統文化継承事業として、事業推進に微額ながら活動費を予算化しながら取り組んでいるところである。

組織構成は八尾市立曙川東小学校の児童が中心で、兼田教諭や発足当時の保護者並びに、参加者の保護者、小学校の全面協力で、練習・発表などの活動をしている。発表披露においては、主に八尾市域で行われるイベントなどに出演しているが、最近では多数な方面からの出演依頼もあり、関係者の励みになっている。

現在は兼田教諭も定年退職されたが、地域からの要望と兼田教諭の熱意のおかげで、隔週の土曜日、発表が近づけば朝の練習や土・日の練習などを行っている。

この踊りは河内一帯の偉人を偲ぶもので、主に地域での活動を行い、地域の人にその偉業を伝えることができているものと信じている。

子ども教室なので、発表するのは子どもであるが、指導者はこの踊りに関わってきた方々や保護者の皆さんで、世

代間交流の場にもなっている。

「講念仏踊り」という伝承されてきたものを続けることにより、幅広い年齢層との交流が行われ、地域・市域・河内地方一帯の活性化・緊密化に貢献しているものと確信している。

重い太鼓をもって踊るため、参加している子どもからは、踊りの所作に屈伸運動が多く「筋肉痛踊り」といわれるが、練習する中で声を大きく出せるような成果も見られ、何より仲間と踊れて楽しいという、嬉しい声も聞こえてきている。

体力や根気が子どもたちの身につく、また高学年の子どもが低学年の子どもを気遣う優しさを育むことができおり、健全育成に寄与していると思っている。

保護者には、同じ年代の子どもを持つ親同士のつながりや、コミュニケーションが図れ、悩み相談や子育ての苦労を分かち合える環境を提供することができ支持されている。

「八尾市環境フェスティバル」や「八尾市子どもフェスティバル」にも参加しており、講念仏踊りを初めて観覧する人にも理解していただけるように、ペープサート（平面紙人形劇）を使って講念仏踊りの発祥の由来などを寸劇などで演じた後に、講念仏踊りを発表するようにしている。



このような伝統的な踊りを、公的機関ではなく地域の努力で復活・存続させていこうとする取り組みが地域の自立性、コミュニティ力、愛郷心をより強くしていくものと考

えられる。

会員が小学校を卒業する時、地区福祉委員会より、その活動に対し「表彰状」と副賞を贈呈して労い、卒業後も関わりをもってもらいながら、また在校生や新入生に入会を勧めるといった方法で継続している。

小学校の児童数が激減しているため、会員確保に苦渋しているのが現況である。一昨年には、内閣府から曙東地区講念仏踊り保存子ども教室が、平成23年度「子ども若者育成・子育て支援活動事例紹介事業」において、平成23年11月22日付けで、連舩国務大臣・内閣府特命担当大臣より「チャイルド・ユースサポート章」部門(全国で14団体)で表彰された。

この栄誉は、平成16年から「講念仏踊り」の復活並びに継承にご尽力いただいた元曙川東小学校兼田教諭をはじめ、保護者の皆様、参加してくれた児童の皆さんの活動の賜物と深く感謝し、地区集会所に賞状と盾を披露して、地域の皆様とともに栄誉を分かち合っているところである。参加してくれている子どもたちや、今後加入してくれる子どもたちの励みになるものである。

そのほか、「大阪府青少年育成連絡協議会表彰」「八尾

市青少年育成連絡協議会表彰等を受賞した。今後も、この受賞を契機に地区福祉委員会は、地域の偉人西村市郎右衛門翁の遺徳を偲ぶ地域伝統文化「講念仏踊り」の継承に全面的にサポートしていきたい。



また、八尾市で平成23年度からスタートした第5次総合計画において、地域のまちづくりを進めていくにあたり、地域分権という手法を取り入れていくことになり、平成24年度設立「曙川東小学校区わがまち推進計画」に「講念仏踊り保存子ども教室」の全面的な支援策を打ち出し、今後、福祉委員会と連携しながら、さらなる地域伝統文化継承に取り組んでまいり所存である。

第16章

八老劇団：高齢者の生きがいづくり

Hachiro Theater: Making a Reason for Living for People

浜田澄子 (Hamada Sumiko)

1. 結成

八老劇団は昭和48年11月に、60歳以上の八尾市在住の老人ばかりで結成した。もともと老人の生きがいと痴呆予防が目的で始めた劇団である。結成当初はパフォーマンス程度のお芝居で、現在は1時間をこえるミュージカル劇を演じるまでに進歩、レパートリーは35本を超えている。オリジナルの脚本・音楽に、大道具、小道具、コスチューム（衣裳）、かつら等々すべてを手づくりし、芝居を上演するまでのプロセスを楽しんでいる。

2. 変身願望（若返り）

芝居は役柄によっては、派手な衣裳を身にまとうことで何歳にでも若返ることができる。拍手と喝采を浴び最高にエキサイトすることは、高齢者にはどんな薬よりも効果がある。連帯感、責任感で少々の病気も吹き飛ばし、明日への舞台を夢見ている人達ばかりである。

今では、地域の伝統芸能の演劇化、ボランティア公演などを展開し、八尾市内は勿論、周辺市町村の高齢クラブのイベントや、介護施設の慰問等に活動の場を広げている。

3. 名称の由来と高齢者福祉環境

八尾市在住の老人ばかりの劇団、つまり八尾市の「八」、老人の「老」、単純に八老劇団と命名した。結成当時（昭和48年）、今日ほど高齢化が進んでおらず、対策も今ほど必要性がなかった。しかし、現役を引退した人達が、第二の人生を有意義に過ごすための施設がなく、老人福祉センター開設に奔走された角倉俊一氏（後のセンター長）の努力が実り、八尾市社会福祉会館の3階に老人のためのセンターが実現した。

オープン時は利用者を募るも、なかなか集まらず当初は老人クラブ単位で巡回バスまで運行するなど、大変な苦勞

をした。原因は、老人福祉センターを利用することが年寄りくさいとか、まだ老人の仲間入りは嫌だという人が多かったようで、しかしこの後、角倉氏のアイデアで他に例を見ないようなイベントやセンターでの同好会活動が人を呼ぶことになった。

4. ひと味ちがう老人福祉センター

リタイアした人が趣味などに生きがいを見い出すのはよいが、余暇の過ごし方が解らない人は、引きこもりが始まる。そうさせない為にも老人福祉センターへ誘引が必要なのだ。

私は、角倉氏と共に青少年健全育成活動のボランティアをしていたので、高齢者対策の現場で働いてみないかと、誘いがあり、引き受けた。

ユニークな発想で、喜び楽しめる同好会が活動をはじめ充実していく日々だった。府下に次々と老人福祉センターが開設されたが、八尾市の老人福祉センターはひと味違うと思える努力をした。元気でいつまでも若々しく、長生きしたいという願望は歳を重ねるごとに強くなるものだ。そこが着眼点となって劇団の誕生となった。

5. 劇団結成までのドタバタ

冒頭にも述べたように、お芝居は痴呆予防のためであり、台詞覚えや役どころの立居振舞は、過ぎしの青春を呼び戻す、まさに若返りなのである。劇団結成の熱い呼びかけに、物珍しさもあったのか50余名もの老人たちが集まってきた。しかしほとんどの人は芝居をするのが初めてなので、とりあえず踊りの好きな人はオープニングで舞踊を、歌うことが好きな人は、幕間に唄い、そして芝居がしたい人には役者に、それはもうてんやわんやの大騒ぎであった。

脚本、演出は角倉氏、大道具小道具バックの絵は私が担当するなどずいぶん苦勞をしたものである。なにしろ全て

が俄仕込み、人前で演じるのがはばかれるようなものだった。私は絵を描くことは好きだが、芝居のバック絵（吊るし）は仕上がりが、縦5m・横5m、今まで描いたことのない大きさだったので、途方にくれたこと、筆で描いては間に合わず雑巾掛け手法で、やっと描きあげた。



ありし日の角倉氏（1978）

小道具衣裳も有り合わせの材料で、工夫の共同作品を作り、肝心の芝居の練習は後まわし。その製作時間が劇団員の強い絆となったようである。

6. 河内でいう「いちびり」

コミュニケーションがとれてくると、芝居の練習もみんないきいきと、役にはまってくる。しかし公演のための舞台となる機会がなかったので、常光寺の境内や人の集まりそうな公園、沢の川商店街の広いコーナーを借りて発表をした。

観客さえいてくれたら芝居ができ、暖かい拍手に育てられ、意欲を燃やしたものである。今から考えると、みんなが「いちびり」だったんだと。

得意になり「国定忠治」、「陰の母」、「旅姿三人男」、「壺坂霊験記」、「安珍清姫釣鐘の場」、「九段の母」、等々（触り部分）を得意げに公演した。

そんな中、老人ばかりの劇団が面白いと新聞、テレビで報道され、さらに某テレビ局が、当時、宝塚歌劇団が上演し大ヒットしていた「ベルサイユのばら」を八老劇団にやらせてみようという、突拍子もない企画がもちあがった。

劇団員にとっては、夢のようだった。この時は衣裳、小道具、かつらにいたるまでテレビ局が準備、それらを身にまとったみんなは、遠目にはタカラジェンヌと見紛うほどの美しさ、奇妙な若々しい姿であった。

そのあとは、調子に乗り「風と共に去りぬ」や「孫悟空」のシリーズものなど、洋物に取り組んだこともあった。しかしながら拍手を沢山いただいたのは時代劇のほうが多かった。

7. カリスマ性のあるリーダー

涙を誘う「母もの」の演出は角倉氏の独得手法で、人情がたっぷりと味付けされていて、誰にも真似の出来ないスキップや励ましの言葉、厳しさの中にも、情のある叱り方、ほめ方、など角倉氏は人間味のある指導者だった。その角倉氏が昭和61年11月21日に急逝され、しばらくは劇団の時間も止まったようだった。

8. 劇団の後継者は

立派な指導者を亡くした劇団員の悲しみは、あまりにも大きく、休団状態がつづいていた。その後、約2年たったころ、八尾市文化会館プリズムホールが完成した。

ホールの柿落しに、市民活動団体として八老劇団に出演の白羽の矢が立ち、びっくり仰天するばかり、追い詰められたように活動再開した。角倉氏の追悼の意もあって、演目は「ベルサイユのばら」に決定。

なぜなら生前に、大きな舞台で公演したいと言っていたからだ。しかし本舞台での公演は初めて。ほんの触りを演ずるようなわけにはいかず、脚本の手直し、すでに原作者の池田理代子さんに謝らなくてはいけないほど、滑稽なストーリーに変わってしまっていた。

それなら、河内版「ベルサイユのばら」でいこう。無我夢中で大道具、小道具をプリズムホールに見合うものに作り上げ、一応ミュージカル劇仕立てなので、思いついたのが、八尾市の消防音楽隊とジョイント、よくお許しがでたものだ。嬉しかった。しかし劇中での愛の歌も、バックミュージック、すべてがマーチ風、演ずる役者も、老人たち、悲劇も喜劇に、でもみんなは大満足、身の震えが止まらなかった。



「河内版ベルばら」の練習風景（1988）

いつの間にかズブの素人の私が劇団を引っ張っていた。プリズムホールでの公演は時間の引き伸ばしとはいえ、ベルサイユ宮殿で日本国からきた河内の歌舞団が河内音頭を

披露すると設定、宮殿の貴婦人たちも、おもわず踊りの輪の中へ、延々と河内音頭が続き、こんなとんでもない発想は角倉氏譲りかもしれない。プリズムホールを満席にすることができ、延べ1600名立ち見もでるほどで、声援とおひねりが飛び、涙なみだの感動のカーテンコールであった。

9. 生きがいづくりは、高齢者の大きな課題

河内の八尾には、「おもしろい」シルバー劇団があるとの評判がたち、それを聞きつけた各局のテレビ局が、面白おかしく放映してくれた。団員のモチベーションは、いやがうえにも高揚し次々と新作が生まれた。シルバーパワーを発揮することは、同世代の高齢者にも、大きな影響になったと思う。角倉氏の遺志を継いで活動を続けてきたが、それなりの問題が次々と生じたが、初心を忘れず高齢者の生きがいと、痴呆予防の活動に軸をおき、肩を張らず自然体で楽しむことができる。

気を取り直し、オリジナル作品を書き上げ、楽しい演出をすることにした。そして「天界のかぐや姫」、「ちょっと変わった桃太郎の話」、「河内版源氏ものがたり」三作が出来上がった。

作品「浦島三太郎」は、竜宮城ならぬ魚宮城で、三人の太郎が老人になるまで時間を忘れ、もてなしを受け、長居をしてしまう。我に返って、慌てて帰郷すると、定番の玉手箱を渡される。故郷に帰り玉手箱を開けると、白い煙と共に若返る。人生をやり直すというストーリー。



地元 大黒殿での講演「浦島太郎」

また「はだかの殿様」は、悪徳商法をあつかった風刺もの。お殿様までが騙されるという、どのような名作も河内版・八老版に創り上げてしまうことからお笑いになってしまう。

とんでもない演出法で元気高齢者劇団は、自分たちの道をまつしぐら、一生懸命さが評価されて、数々の賞というご褒美をいただくことになった。なかでも、多年の活動、公演実績、ユニークなボランティア活動が評価され、2008年第30回サントリー地域文化賞を受賞、賞金200万円までいただけた荣誉には、天にも昇る心地がした。

その後マスコミだけでなく高齢化問題を研究する大学からも声がかかり、私たちの活動が、家に閉じこもりがちな高齢者を、外に引っ張り出す効果があると、ゼミの学生達に卒業論文のテーマにするようにと、流通科学大学（神戸市西区）医療福祉学科の宮川教授が提案された。

これからますます加速する高齢化問題に、いきいきとお芝居を演じる高齢者が、自分たちの生きがいを見つける姿は、取り巻く家族と共に社会に、一石を投じたことは間違いない。今後は、さらに地域社会に歓迎される存在となり、地元の八尾でシルバーパワーを、アピールしていきたい。

10. スローガン「寝たきりより出たきり」

振り返れば、40年の時が過ぎていた。日々歩み続けた長さや重みは、私たちの財産そのもので、大切に育てていかねばならない。後継者を未だ育てていないが、それまでは、一生懸命頑張るしかない、と考えている。結成40周年記念公演を、2013年10月26日（土）・27日（日）プリズムホールに決定し、その日に向かって着々と準備をしている。

昭和48年の旗揚げ以来、40年は短くもあり、長くもある、様々な失敗や、資金難などの苦勞、存亡の危機に直面するなど、思い出が次々と浮かんでくるが、その都度、誰かの善意に支えられていた。胸を張って八老劇団のスローガン「寝たきりより出たきり」を実践して行こうと思う。現在は団員17名、個性豊かなそれぞれのキャラを持っている。私は役者、舞台監督のよき仲間を支えられて、来る記念公演に向かって、稽古に汗を流している。



第17章

市民活動としての高安城を探る会：発足から発見まで

Takayasu Castle Association as an Citizen's Activity: From Founding to Finding the Buried Castle

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. 高安城の歴史と探る会の発足

今から37年前の昭和51年(1976)6月に市民の歴史研究グループとして高安城を探る会が誕生した。我が国古代の歴史書『日本書紀』に西暦660年の百濟滅亡後、白村江の戦いがあり、唐と百濟救援に行った倭国軍の戦いがあり、倭国が敗戦したため、唐の侵攻に備え、防人の配置や水城の築造、九州から瀬戸内・大和にかけての山城が築城された。筑紫の国福岡県の大野城、佐賀県の基肄城、長門の国山口県の長門城、対馬の国の金田城、大和と河内の国の高安城、讃岐の国の屋島城などがある。

その山城の一つである高安城の遺構を探してみようとしたのである。大正7年、東京帝国大学の関野貞博士が奈良県の史蹟調査のため、信貴山から高安山にかけての山地を踏査されたが、それ以来、長らく遺構としての発見がなかったのであるが、この幻の高安城を市民の手で発見しようとする活動である。

八尾市民の岩永憲一郎さんが、大学卒業後に会社勤務のため九州から大阪に来て八尾市高安町に居住するようになってから、東に見える高安山の山上に古代山城高安城があることを知り、その遺構が見つからないことを残念に思い、一人ではできないが、多くの人の参加を得て探せば、専門家にできないことでも市民の手で探せるのではないかと考え、仲間を募りたいと思っていたことが会を作る発端である。

八尾市には郷土研究の先生方がおられ、昭和30年代の初め、八尾市役所は八尾市史編纂委員会を設置、『八尾市史』本編、史料編を発行していた。その市史編纂委員の先生方が中心となって、八尾市郷土文化研究会を作り、市役所と協力して、郷土史講座や史跡めぐりを開催してこられ、多くの市民が参加していた。岩永憲一郎さんはその郷土史講座の講座生であったので、講座や史跡めぐりの時に仲間を

募ることとなった。

昭和51年の3月、私が担当していた郷土史講座の日に、高安城を探る会を結成したいとの受講生の方々に呼び掛けた。その時、早速、私と岩永憲一郎さん、それに城郭史専門の前田航二郎さんを入れて男子3人、女性は坂上弘子さんと佐々木裕子さんの2人、古代史や国文学、東洋史に造詣の深い方で、合計5人が会の結成に賛同し、発起人になることになった。坂上弘子さんは高安地元に住んでいて、地元知り合いも多く、大きな力になっていただいた(第11章参照)。

当時の岩永さんの市民への呼びかけのひと言に「私たち住む八尾に最も近い高安城が、何の手がかりもつかめていないのが残念です。1300年も眠り続けている秘密の扉は想像以上に厚く、多くの人たちのご協力が必要です。長野県の野尻湖でのナウマン象発掘が成功したように、私たちもこの高安城を広く市民の手で秘密の扉を探しあてようではありませんか」とある(府民センターニュースNo.28)。その後、高安城を探る会を発起して、岩永さんが事務局長、私が会長となり、会員を集めることになった。

5月、八尾市役所記者クラブ詰めの記者の方々に説明したところ、大変賛同していただき、翌日の新聞には朝日、毎日、サンケイ、読売各社一斉に、高安城はどこに、市民の手で探そう、地元で“幻の高安城”探そう、などと報じられ、多くの市民の賛同、参加を得られ、高安城を探る会が発足した。

「千三百年前、唐、新羅の侵攻に備えて八尾市の高安山に築かれたと伝えられる高安城。歴史の流れ、戦乱、自然の営みの中に埋もれて場所すらわからなくなったこの“幻の城”を市民の手でみつけようと、このほど『高安城を探る会』が結成された。八尾市の郷土史講座の熱心な受講生の発案で、発起人も会社員や家庭の主婦ら。『野尻湖のナウ

マン象発掘のように、数多い市民の力で秘密のとびらを開きたい』と広く市民の参加を呼び掛けている」。

2. 探索を始める

6月、会員が60余名となって、山本労働会館で初会合、会の発足があり、毎月一回の例会で古代山城の勉強をして、いよいよ12月に最初の探索となった。なお会員は八尾市、柏原市、東大阪市、大阪市などに亘っていて、幻の高安城を探る会は多くの方々から賛同者を得て発足し、探索が始まったのである。

「12月、八尾市と奈良県境にまたがる高安山で、お年寄り、主婦、会社員、高校生など約四十人が、スコップ、トレンチ棒を手に尾根や谷間を行ったり来たり。『幻の高安城を見つけよう』という八尾市内の歴史マニア『高安城を探る会』のメンバーで、道端の石をにらんだり、地面を掘ったり」。

『探る会』はこの日、高校生から主婦、サラリーマン、七十三歳のおばあさんまで会員約三十人が参加して、高安山の谷へ分け入った。手に手にゴルフクラブを改造したり、ホウキの柄を削った“探索棒”を持ち、顔を地面にこすりつけるようにして慎重な調査を開始。長方形の穴が彫られた“それらしい”石が見つかるなど、一行の胸をときめかせる成果があったが、高安城の存在と結びつくものはなかった。これら地元大阪の報道に対して、東京の読売新聞には「古城探しオリエンテーリング」として、「がんばれ！河内のオッサンたち」と大きな記事になってあらわれた。

会の発足から一年たって、『夢ふくらむ幻の高安城』という小冊子を作った。一年で学んだ高安城の歴史、活動報告、山中で見つけたこれまでの成果などを纏めた。この冊子を早速、山脇市長のもとに届けたところ、その読後感想が市政だよりに掲載された。

「幻の高安城探し」：いつもの通り登庁し、分刻みの打合せが一段落した頃をみはからって今朝届けられた「夢ふくらむ高安城」の冊子を一気に読んでみた。約1300年前に築城されたと「日本書紀」「続日本紀」に記されているが、いまだにその姿がつかまえていない高安城を自らの手で解明しようとする市民組織「高安城を探る会」の活動記録である。

八尾市にこんなすばらしい市民組織ができ、精力的に活動されているのは非常にうれしいことである。

この会は、昨年3月市立労働会館で開かれた郷土史講座の一受講生が呼びかけ結成されたもので、73歳の婦人から15歳の高校生、遠くは愛媛県からの参加など約80名が活動している。

市民文化の向上を願って開いている各種講座の中でこんなに立派な組織ができたことは、市としてもやりがいのあることである。

この会に負けじといろんな形のグループ、組織が市内の至る所にでき、伝統と歴史の町「八尾」にふさわしい人間味豊かな市民文化を育てあげていくことに夢をふくらませながら、私は新たな決意で市政に取り組んでいきたいと考えている」（1977年5月20号）。

市民文化を育てあげていこうとの市長の考えを有難く思ったことであった。

3. 高安城倉庫礎石群の発見

2年が経過した昭和53年（1978）4月2日、待ちに待った高安城の遺構が発見された。その日は曇りがちの天気、今にも雨が来そうであった。奈良県側の平群町久安寺地区の山中でのことであった。地元久安寺の方で親しくしてもらっているご老人に案内されて、金ヤ塚という塚状のところに信貴山の釣り鐘を掘り出したという大きな穴がいているのを見に行った。雑木林のなかで金ヤ塚の話を知っているうちに、周りの平たい山地をトレンチ棒（長さ1mの鉄の棒、会員の製鉄所で製作してもらったもの）で突いているうちに、地面の下に平たい大きな石が埋まっているのを発見、それが今年正月に見学に行った九州福岡県の古代山城大野城の礎石に類似していると言いついて、緊張が漲った。続いて2メートル10センチごとに礎石らしい平たい石が埋まっていそうだとということで、これが発見のはじまりとなった。この日以後、同じ尾根上に6棟分の倉庫礎石群を発見することになった。奈良県教育委員会への発見届などをへて、森浩一同志社大学教授の古代学研究会の大勢の方々の見学があり、5月29日、各紙やNHKなど、一斉の発見の報道となった。「幻の高安城、市民グループが遺構発見、専門家も確認、高松塚以来の快挙」などと、報じていただいた。

この発見で、同年の文化の日に高安城を探る会117名が八尾市から文化表彰を受けた。「郷土に眠る古城を市民グループの手で発見されたことは先人がなし得なかった高安城の解明だけでなく古代史研究上の快挙であり、本市の文化の向上と発見に尽くされた」と表彰していただいた。

同年12月30日の朝日新聞の社説に「遺跡発見ブームの背景」があり、その中で、今年は埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文の発見、宮城県多賀城跡の漆紙文書の発見、大阪府藤井寺市の修羅の発見など話題にことかかぬ年であったと書かれた後、「さらに特筆すべきは『幻の城』といわれた古代の高安城が、アマチュアの手で掘り当てられたことである。日本書紀に記録されていたが、遺構が確認できず、ナゾにつつまれていた山城である。発見したのは『高安城を探る会』であった。約130人の会員は、サラリーマン、自営業、主婦など全くの素人ばかりである。発掘の主体は市民であり、学者がこれに協力した」とある。このように市民グループの発見を高く評価していただいたことは大変うれしいことであった。

翌年(1979)10月には奈良県教育委員会に高安城跡調査委員会が設置され、樞原考古学研究所が発掘調査をするようになった。私たちはこの11月、韓国忠南大学の成周鐸先生の招きで韓国山城の見学に行くことになった。先生は日本訪問時に岩永事務局長の家の近く高安町の知り合いの内に宿泊されることがあり、私たちとは親しくしていただき、共に飲み歓談し、発見した高安城礎石群を見ていただいた中であった。韓国訪問の直前に朴大統領の事件があり、危ぶまれたが、先生が安全だから来いとという言葉で渡航、慶州や新羅三年山城、百濟武寧王陵、公州城、扶蘇山城などの見学ができたことは印象深かった。

翌昭和55年1月、発見の倉庫礎石群の写真や模型、古代山城見学の記録などを見ていただくとう「高安城展」を市民サービスコーナーで開催した。初日から多くの見学者にきていただき、嬉しいの一言であった。この「高安城展」に毎日新聞社の方が見に来られていて、その「余録」欄に次のような記事を載せられている(昭和55年2月4日)。

「先週末まで大阪府八尾市、八尾市民サービスコーナーで開かれていた『高安城展』というのを見た。社会科の学習で訪れたという小学校五、六年の児童二十人ほどをまじえ、熱心な見学者がたえなかった。(河内木綿の生産の中心地であったこと、作家今東光が住んでいたことなどを書かれたあと)。かつてはやった『河内のおっさん』の歌で、あまり上品でないところという印象を与えたこともある。しかしそこに住む市民たちが日本歴史に記録をとどめるような知的大発見をした。そしてその詳しい記録を市民に伝え、子供たちにはそれを教材として勉強している。『地方の時代』

『地方文化』という言葉がさかんに使われている。これは、必ずしも地方に壮大な文化の殿堂を築きあげることの意味すまい。自分の住むまちを愛し、その歴史を知り、その特異性を生かしていく、こうしてこそ全国同一ではない、それぞれの地方の文化が生まれる」。

このような高安城展は、平成8年まで6回開催し、また冊子「夢ふくらむ高安城」は第7集まで発行した。高安山の探索については、発見後、城壁に当たる土塁線や谷間にあるであろう水門などの石垣、礎石以前の掘立柱の倉庫跡がないかなど、高安城の範囲に関わる遺構を探して探索を続けてきたが、現在までその発見はなされていない。



高安城倉庫跡礎石群(3号棟)

(東に矢田丘陵、その奥に東大寺大仏殿の大屋根が見える)

4. 大阪奈良両府県教育委員会による発掘結果

大阪府教育委員会文化財保護課や奈良県の樞原考古学研究所による発掘は、大阪府が昭和56年(1981)から始まり、奈良県の礎石群の発掘が昭和57年(1982)から始まり、私たち探る会の会員は、見学や発掘の手伝いができる場所はさせてもらった。発掘の結果、私たちの発見した倉庫礎石群は古代山城高安城の倉庫跡であることが確認された。この発掘結果の詳細は現地説明会とその後の新聞発表で報道された。それぞれ調査概報が両教育委員会から出されている。

発掘終了から現在まで30数年が過ぎたが、私たちは毎年、年3回は礎石のある現地に行き、倉庫群を保護するため、毎年遺跡地の草刈りを年3回以上してきており、現在に及んでいる。

また会の結成から約10年の昭和60年には、信貴ケーブル線の高安山駅前を高安城跡の史蹟案内石碑を八尾ロータリクラブの協賛を得て建立した。また倉庫礎石跡の遺跡地に高安城倉庫跡の石碑を建てた。その後、平成8年の20周

年記念には奈良県知事・環境庁長官の両者許可を得て、信貴生駒国定公園内の高安城倉庫跡地に発見した経緯や古代山城の解説を書いた説明板を建立した。現在も高安山から信貴山へのハイキングの方や古代史に興味を持ちここを訪れる人に読んでもらっている。

現在、私たり高安城を探る会は発見した高安城倉庫跡礎石群の遺跡地を守るため、環境整備に力を入れ、草刈りな

どに年に4～5回は山に上がっている。それ以外の月は各地の見学に行つて勉強を続けている。私たちが市民活動として山に登り、探索に活躍した時代はもう過ぎ去ったのであるが、いつかまた次の世代の人たちによって、高安城の歴史、遺構の全貌が明らかになる日が来ることを願っている。

参考文献

小田富士雄(1983)『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版。

高安城を探る会(1977-1992)『夢ふくらむ幻の高安城』第1集～第7集。

第18章

やお文化協会

Establishing Yao Culture Association

西野民夫 (Nishino Tamio)

1. はじめに

やお文化協会は昭和50年10月に設立された。当時八尾市は大阪府下7番目の人口(25人)を有する中堅都市として発展を続けており、1年間で1万人ちかくの人口増加を見るという急激な都市化が進んでいた。新旧市民の意識の調和を図ることが市政の進展に必要なことであり、各種の施策や取り組みが進められている中で、市民自らも自分たちのまちを良くしようという人達が相集い、行動を始められたのが「やお文化協会」設立へつながっていった。



やお文化協会設立趣意書には次のようなことが述べられている。

河内のど真ん中、伝統と歴史を持つ八尾も25万人が生活する都市へと発展してきました。その成長が住民生活をどのように変えたか、旧来の住民、新しく移り住んできた人、それぞれ考え方、行動様式の違った人が混在し、「隣は何する人ぞ」という言葉に象徴されるような状況になりつつあり、これを打開するために新しいコミュニティ作りが求められています。我々有志は、このことに焦点を当て、八尾のまちに「新しいコミュニティづくり」を創造するためにやお文化協会を設立しようとしています。ご主旨にご賛同頂き、八尾のまちを住みよいまちにしようではありませんか。

会則の設立目的には「八尾の地の歴史を学び、この土地

から生まれた現在の地域社会のあり方を改めて考え、人間のつながりを深め、この地を子孫繁栄の地として創造してゆく」とある。

設立当時の役員を見ると、顧問に八尾市長の山脇悦司氏、会長に教育委員長の貴島正男氏、相談役には教育委員、商工会議所の役員、農業協同組合役員、市議会議員の方々が名前を連ねておられる。

そして、専務理事には地方新聞経営者の伊藤光生氏が就任され、八尾市民がこぞって自分たちのまちをよくしていこうという動きであったといふ。

設立後38年を経た平成25年6月には、会の主要事業である季刊誌「河内どんこう」が100号記念号を発行することが出来た。歴代役員のご努力はいうにおよばず、会員の皆様や協賛広告で支援をして下さった企業のお陰で今日を迎えることが出来、今までの記録が八尾を学ぶ資料として問い合わせて下さるようにもなっている。郷土八尾を愛する多くの方々のご支援を得て、設立目的に添った活動が引き継がれ、新しいまち作りに役立つことを願って努力を続けていく。以下、事業内容を参考にしていただきたい。

2. 「河内のオッサンの唄」について声明文

やお文化協会が活動を始めて、その存在をアピールする出来事は、「河内のオッサンの唄」について声明文を発表し、河内弁は唄の歌詞にあるようなものでなく、人情味溢れた親しみのある言葉であると訴え、マスコミで大きく取り上げられた。

日本コロムビア株式会社がミス花子作詞、作曲による「河内のオッサンの唄」をレコード販売し、流行歌としておもしろおかしく歌われることで、河内弁がドギツク、キタナイという印象を与えることに対して、クレームを付けた形の声明文は、報道機関が大きく取り上げられた。

当時、八尾にお住まいで、作家としてご活躍されていた今東光氏は、河内どんこうの創刊号に「飛鳥文化を語る」と題した中で、「河内は百済から渡来した飛鳥部一族が定住して、飛ぶ鳥の安らかなる古里『安宿』と名付けた。この地名は大和飛鳥より古く、仏教文化の広がりは大和より早かった。・・・本当の河内は、闘鶏と博打の田舎ではない。歴史と文化に誇りを持つ飛鳥文化の原点はこちらであり、『河内飛鳥古寺顕彰会』がある」と書かれている。この事からも、河内で使われている言葉は粗野で荒々しいものでなく、伝統ある文化を感じさせる言葉であるといえる。

やお文化協会では、河内弁が、私達が日常生活で使っている親しみがあり、人情味溢れる言葉であることを知って貰うためにと、「河内言葉辞典」を季刊誌として発行している「河内どんこう」に掲載すると共に、別冊で辞典としても発行した。

3. 『河内どんこう』の発行

郷土誌「河内どんこう」は会の主要事業として、郷土史研究家を始め、各種の文化活動をされている方々から原稿を頂き、発行経費は、会の趣旨にご賛同下さる企業の協賛広告によって支えて頂き、多くの会員読者のご協力によって発行を続け、平成25年6月には100号を記念号として発行することが出来た。

「河内どんこう」は郷土の歴史、文化を学ぶ資料として活用されるようになり、図書館や市内の大学である大阪経済法科大学にも備えて頂き、最近ではインターネットを見て問い合わせをされるようになっていく。

誌名の「河内どんこう」は、会員の中からご応募いただいた中で、明石裸人氏が名付け親として、役員会で決定された。「どんこう」とは、鈍行、黄嫩（木の芽や若葉の黄色）を現していて、「一歩ずつ着実に新しい芽を育てていく」という意味合いが込められている。

「河内どんこう」の表紙の題字は、当時市内刑部にお住まいの書家榊莫山氏に揮毫して頂いた。榊莫山氏は書道界で独自の活躍をされていて、人間味溢れる、親しみのある書と絵で多くの人達に感動を与えられたことで、八尾市の文化賞を受けておられる。八尾を離れられた後も河内八尾のことを愛されていたことは、氏が発表された作品と共に書かれた文章に何度となく出ている。

4. 会発足30周年にNPO法人に

NPO法が制定されたことにより、やお文化協会が法人組織として社会的にも認められ、責任ある運営を期するため、会発足30周年を機にNPO法人として認可申請を行い、翌年の平成18年5月から法人組織になった。活動面においても充実を図っており、八尾市指定の文化財であり、江戸中期に商人石田利清が設けた郷塾で、建物が修復保存されている「環山楼」の開放事業を八尾市から指定管理者として委託を受けているほか、従来から行っている文化講演会、移動歴史教室、環山楼市民塾に加えて、新進気鋭の詩人を表彰する萩原朔太郎記念「とをるもう賞」と八尾検定を主催することにした。

5. 萩原朔太郎記念・とをるもう賞

全国を対象にした事業では、「萩原朔太郎記念・とをるもう賞」がある。この事業は八尾市で歴代開業医として受け継がれてきた第14代萩原隆氏が、詩人萩原朔太郎と八尾の関係を、隆氏の父栄次と朔太郎との間で交わされた手紙などを資料にして、「若き日の萩原朔太郎」として出版されたのを機に、朔太郎の作品に大きな影響力を与えた八尾の文化性を顕彰することとし、萩原朔太郎のような新人を発掘し、育てていくことを目的に、平成23年に創設した。

この事業は、やお文化協会の参与をされている女流詩人、三井葉子氏を中心となり、八尾市と毎日新聞社が後援をして下さり、事業進行については、大阪芸術大学の山田教授のご支援を頂いている。

審査委員には、栗津則雄、暮尾淳、季村敏夫、三井葉子の各氏がなっており、初回には全国から500の詩集の応募があり、審査の結果、東京の阿久津歩さんが入選された。第二回目は、江夏名枝さんが入賞され、今年第三回目で東京都・八丈島の清水あすかさんが選ばれた。

第二回目からは、八尾市の小学生に文学の基礎になる表現力を養って貰うことに役立てるためにと、八尾市内の小中学生の作品募集を始め、400作品の中から低学年と高学年の二部からそれぞれ入選作、佳作作品を選び、表彰式には、佳作作品に曲を付けて発表することが出来た。

6. 環山楼市民塾

環山楼市民塾は、八尾市、八尾商工会議所、そして市内の大学である大阪経済法科大学との共催で、文化協会がそ

の事務局を務め、副理事長である柳本忠二氏（株式会社レザック会長）が塾頭を務められ、八尾市民を対象に塾生を募集し、大阪経済法科大学の学生さんも参加され、時の話題をテーマとしてその筋の専門家に講義をして貰いました。この市民塾は、その名が示すように八尾では古くから自らの力で塾を開き、人材育成に努めてきた歴史に学び、その精神を今に活かした事業として取り組まれているものである。毎年の講義録は、大阪経済法科大学の出版部で編集され、受講出来なかった人でも学ぶことが出来るようになっている。

7. 八尾検定

近年各地で行われている「ご当地検定」の八尾版として「八尾検定」を平成23年から実施をしている。この事業はやお文化協会設立目的である自分たちの住んでいるまちの

歴史を学び、「永く住み続けるまち」としての都市創造を目指すことにつながる事業の一つとして取り組みを始めた。

検定問題は、八尾市役所の職員さんにも参画して頂き、八尾の歴史文化を始め産業経済、生活環境など幅広い分野に亘って、八尾のことを学んで貰うように心がけている。

検定試験の前には講習会を持ち、受験しないが勉強をしたいという人にも学んで頂けるようにとテキストを作っていて、歴史問題のテキストとして『八尾の史跡』（新訂版）を発行した。これは八尾市が既に発行していたものであるが、その内容は八尾市歴史民俗資料館の元館長であり、河内どんこうの編集長が書かれたポケット版の本で、八尾市の了解を得て内容を新しくして再販した。

今後は検定に合格された人達が引き続いて学びあい、交流をすることが出来るような機会を持てるようにと考えている。

第 19 章

郷土誌『河内どんこう』の発行

Publishing the Local Magazine *Kawachi Donko*

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

1. やお文化協会の発足

やお文化協会は昭和 50 年 (1975)、今から 38 年前に設立された。設立の中心になったのは市民新聞社社長の伊藤光生氏と市会議員の阿部孝氏である。7 月ごろから協会設立について協議を重ねられ、発起人代表として当時教育委員長であった貴島正男氏をきめ、有志 5 4 名の連署により「趣意書」が作られ、設立に向けて動き初められた (前節「やお文化協会の活動」参照)⁴。

各分野で活動されていた経済・産業方面の方々、教育界の方々、医師会の方々、文化芸能体育方面で活躍されている方、これほど多くの人々が名を連ねることは八尾市内では、いまだかつてなかったことと思われる。如何に多くの人々の期待を担っていたかが想像される。

その後、10 月 4 日、創立総会を教育センターで行い、会則を制定、役員を決定した。会長に貴島正男氏 (教育委員長)、副会長に寺坂登氏 (八尾商工会議所会頭)、松浦慶太氏 (八光信用金庫専務理事)、森岡安治郎 (八尾市農協理事長) の 3 氏、それに専務理事に伊藤光生氏、事務局長に阿部孝氏が選出された。その後、顧問、相談役、常任理事、理事、監事など役員総勢 33 名がきまった。その理事会で、季刊誌の発行が決り、雑誌名の募集をし、11 月に 32 名の応募者の出された案から、市内の医師明石裸人氏が提案された『河内どんこう』に決定された。題字は当時八尾に住まいされていた榊莫山氏の直筆である。

文化協会最初の事業は、協会の機関誌であり、年 4 回発行する季刊誌『河内どんこう』の発行であった。

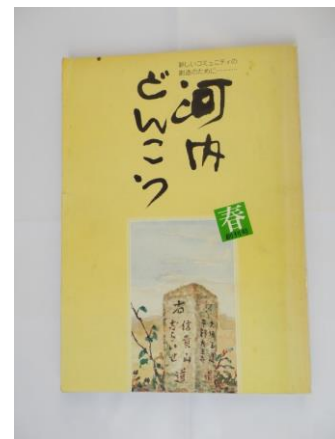
2. 郷土誌『河内どんこう』の発行

最初に編集にあたられたのは、専務理事伊藤光生氏、事

務局長の阿部孝氏であった。二人は郷土の歴史を知ることが新しいコミュニティづくりの第一歩だと考え、郷土史をわかりやすく知ってもらう方法として、座談会を企画された。

昭和 51 年 (1976) 1 月、市史編さん委員の方々に集まってもらって、座談会の中で、八尾や河内の歴史の魅力を述べてもらい、これを『河内どんこう』に連載することとした。創刊号の第 1 巻第 1 号は昭和 51 年 4 月に発行された。トップの記事は座談会—河内の歴史 (古代編) であった。それに続いて 60 人余の方々の文が載っている。当時の意気込みが感じられる「春 創刊号」となっている。

写真 19-1 『河内どんこう』創刊号



座談会は河内八尾の歴史を分かり易く知ってもらうという大変いい企画であった。この後、河内の歴史を古代編、中世編、近世から近代編、市制施行以前の河内、柏原市編、それが済むと、河内の今昔を語る若手僧侶の放談会と続け、その後は新しい河内を実現したいために、「八尾に博物館と文化会館建設を」、「八尾市立博物館建設を急げ」、「文化財保護を積極的に」、「学塾・環山楼の復元を終えて」、「これからの文化問題」、「志紀地区の今昔」、「今、八尾の寺内町

⁴ 設立発起人は当時の八尾市で活動されていた各分野の代表の方々であった。

をどうするか」などを取り上げ、その後は、各地区の人に集まってもらっての座談会を特集し、最後は河内の神社と古墳で終わった。

創刊号から始まって、座談会の掲載が終わったのは37号、平成4年6月号であった。ここまで続けてこられたのは、座談会という方法がよかったことはもちろんであるが、速記をしてくださった方の協力があったことも忘れてはならない。また市の文化状況を大局的に見ることのできる先生方がおられたことも一因である。八尾の文化に対する提言、これは、やお文化協会の活動目的にかなったものだったと思う。

座談会とは別に、文化協会の活動、『河内どんこう』の紙面を盛りあげたのは、昭和51年9月にミス花子作詞作曲歌唱による「河内のオッサンの唄」が発売されたことであった。その言葉遣いに、協会として抗議声明を出すと、これが各社新聞に報道され、多くの意見が寄せられた。早速、協会では山脇市長宅に恩智地区の70歳以上の方々に集まっていたいただき、座談会を開いた。またこれを機会に「方言を守る」運動が起こし、市内の各種団体が教育センターに集まり、積極的な推進を決定、この目的のために八尾市郷土文化推進協議会が発足した。

昭和52年になり、第3回の総会が八光信用金庫で開かれた時、NHKで放映中の「河内まんだら」に出演していた藤田まこと氏、勝田光俊氏らが来会、講演があった。河内弁を使った番組であったので、地元への理解のため文化協会の求めに応じて来てくださったと思われる。

3. 文化講演会の開催

こうした盛り上がりのなかで、第一回の文化講演会が11月に開催され、大阪教育大の鳥越憲三郎教授が「河内と物部氏」、京都府大の門脇禎二教授が「河内あすかと各地の飛鳥」で講演された。場所は市民ホールか農協ホールであった。費用は支援企業から頂いていたと思われるが、専務理事伊藤さんが会計を含む運営全体を行っておられた。この文化講演会は文化協会の活動の季刊誌『河内どんこう』の発行に次ぐ大きな事業となった。その後、毎年一回行ってきた。第2回は53年10月、大阪市立大学の直木孝次郎教授の「古代の河内と大和川」の講演が農協ホールで行われた。第3回は市民ホールで、昭和55年3月、高安城を探る会会長の棚橋が「高安城と山城」を、大阪城天守閣主任の

岡本良一氏が「大坂城の石を語る」の講演があった。大きな講演会を開くことは、費用の点でそう長く続けられるものではなかったが、平成7年の協会創立20周年の記念式での記念講演会が続き、以後は毎年総会時に文化講演会を開くこととし、今年平成25年まで毎年続けられている。

4. 歴史顕彰碑の建立

もう一つの事業は市内の史蹟などの顕彰のため石碑を建立することであった。その第一は昭和51年の「河内県庁跡」の石碑建立で、八尾御坊大信寺の梅林に建立した。その後、昭和58年に「河内木綿」の歴史的価値を再認識してもらおうと、本会と八尾郷土文化研究会が共催し、八尾市民憲章推進協議会、八尾市郷土文化推進協議会の後援、八尾菊花ライオンズクラブの寄贈を受けて、近鉄八尾駅前に説明文も入った大きな「河内木綿伝承の地」の碑を建設した。河内木綿研究家の辻合喜代太郎氏の指導によった。この後、協会15周年記念事業としては今東光氏を顕彰する「東光碑」の建設をきめ、平成3年3月、天台院住職、檀家総代、それに協会関係者ら45名が集まり、除幕式があった。編集長三上幸寿氏が『東光太平記』の巻頭の文章を説明文に入れることを提案した。次は協会20周年の記念事業として、平成8年に「お逮夜市の碑」をファミリーロード入口の広場に建立した。次いで30周年の記念事業として、平成17年に新しくなったJR久宝寺駅前に「久宝寺遺跡」の碑を建設した。いずれも周年記念事業として、協賛会社からの募金で建設したものである。市内企業の協賛を得て、事業を行ってきたのである。

しかし最近では日本全体の経済の鈍化で、企業業績が悪化するなか、企業からの協賛をえることが非常に困難になっているので、企業の協賛にたよる記念事業、文化講演会、史蹟顕彰石碑の建立といった文化協会の事業はやりにくくなってきている。

5. 『河内どんこう』の発行を続けて

こうした情勢の推移の中で、中心事業の季刊誌『河内どんこう』の発行も多く困難を抱えるようになったが、現在まで継続して発行を続けてこられたのが幸いであった。季刊誌で創刊したが、年4回は難しく、年2～3回となり、平成2年の30号からは年3回を維持して、平成25年6月の100号まで発行してこることができた。現在は101号

を編集集中で、今後も長く出版できるように努力したい。

今回、平成25年6月に『河内どんこう』第100号記念特集号を発行して思うことは、出版状況が年々厳しくなっていると思うことである。

この100号までの発行継続を支えていただいたのは特別会員、正会員、賛助会員、それに一般購読者、執筆者、広告協賛会社の方々である。出版費用の面からみると、会員の年会費、購読収入ではとても出版費用には足らず、大部分は特別会員である企業からの広告、会員になっていただいている企業や賛助企業からの広告収入で賄ってきた。その点で、広告を掲載してくださっている企業、周年事業に協賛をくださった企業・個人の方々の協力の賜物と感謝したい。100号については、会員各位、読者の方々からの協賛金をいただき、立派な記念特集号を出せたことを感謝している。

しかし経済の現況は年々苦しくなるようで、心配である。売り上げ向上を目指して書店の方に協力いただいているが、横ばいの状態である。会員を増やすことが一番の努力目標であるが、ここ数年、理事長や役員の方のご努力で新会員を増やすことができたものの、一方で退会の方も多く、希望どおりにはいっていない。

『河内どんこう』の記事を内容面から見ると、創刊から30号ぐらいまでは140～150頁にもなるもので、37号までは毎号に座談会を組んでいて、河内八尾の歴史や文化を分かりやすく伝えるという目的にそった編集であった。また編集部の方の史跡や年中行事、祭礼などの取材記事・写真も多く載せておられる。また随想や和歌俳句小説といった投稿記事も多くあった。それでも創刊号のあとがきで、編集者伊藤氏の言葉を読むと、「一番危惧していた同人雑誌調になったことが誠に残念でならない」とあり、「『河内どんこう』発刊の主目的は、ふるさと河内の歴史、それに河内の本当の姿というものを、市民のみなさんにわかりやすく知らせるということである」と書かれている。編集者が取材する記事をもっと多く載せたいとの思いが感じられた。当時は伊藤氏の市民新聞の記者やカメラマンが手助けしてくれていたこともあり、取材記事も多く、投稿記事も多く、多様な内容の郷土誌の雑誌となっていたと感ずるのである。

三上光寿氏が編集長になって、平成5年の39号から特集を始めた。最初は「河内の伝承・工芸・くらし」という題で、この道ひとすじシリーズとして編集委員が老舗の菓子

店とか工芸品製造業の事業所を訪れて、記事を書いた。シリーズの①から⑤まで続け、その後は河内の歴史風土記シリーズ、河内の人物列伝シリーズなどをしながら、山本律郎氏から私棚橋へ受け継いで、現在に至っている。

平成20年10月号の86号から経費節減のため、本文を110頁までとして、印刷費用を縮小した。その当時、売れる内容にせよとの要望もあったが、原稿料も出ない中、高名な方に原稿を依頼することもできず、私たちのような現在の編集委員制度では、売れる本を作るのは努力目標であるが、なかなか難しいことである。

また、私たち現在の編集委員の考え方は、八尾河内の人々に、河内の歴史を知ってもらうために編集委員がすべてを書くのではなく、郷土の歴史や文化に興味を持ち、勉強や見分に努力している人に、出来るだけ多くの人に書いていただくことを目標にしたいと思っている。この雑誌は学者や専門家の雑誌ではなく、市民の雑誌である。市民が自分たちの郷土の歴史を勉強し、その成果を書き発表できる場でありたいと思っている。史跡を巡り、資料を見て、いろいろ考えてみて、それを原稿にし、考えている中で、書くことによって、思考が深まり、河内の歴史の思わぬ展開に驚き、興味を深めていくことが大切である。専門誌や学芸誌、出版社の出す本には、普通の市民の書く郷土の歴史や物語を載せてもらえることはほとんど不可能である。しかし『河内どんこう』は、そうではなく、市民の歴史探究、市民の郷土文化の掘り起こしや発表を掲載していく雑誌と考えている。市民から原稿を書いて投稿してくださる方があっての『河内どんこう』だと思っている。書いてもらえる人がなくなった時は、この雑誌は立ち行かなくなる。編集委員の役割は、そうした人を見つけること、探求し、書くことによって深めていき、また書くことをひとに勧めることだと思っている。専門家でない市民の目でみた河内の歴史民俗を書いてもらうことを勧める雑誌、これが『河内どんこう』である。

もちろん、歴史や民俗ばかりでなく、短歌、俳句、詩歌、小説、絵画、写真、その他、市民の文化活動の発表の場になりたいと思っている。投稿をお待ちしています。現在、短歌や俳句はその道の先生に書いていただいているが、一般の方の作品も期待して待っています。

写真 19-2 『河内どんこう』100号記念号



6. やお文化協会がNPO法人となる

やお文化協会は、平成19年から特定非営利活動法人（NPO法人）として認可され、新しい出発をすることになった。そのことで活動方法や事業にも変化が出て来ている。一つは、パソコンの導入とインターネットへの接続、ホームページの開設である。これは理事で編集委員である西野民夫氏の尽力があって、実現したものである。このHPに、これまでの『河内どんこう』の全目次、80号までの索引が付き、遠方からの質問が入るとともに、文化協会の活動を全国に向けて発信できるようになったのは、大きな前進であると考えている。

NPO法人になってから、新しい活動もできるようになった。新しい活動については『河内どんこう』紙面に登場、

読者の興味を高めている。それは、平成20年度から八尾市の指定文化財「環山楼」の施設管理を八尾市から受託されたことである。また、「萩原朔太郎・とをるもう賞」の事務局を文化協会が担当することになった。そのこともあって、『河内どんこう』には受賞作の紹介ができるようになった。

さらに、平成23年から始まったやお文化協会主催での「やお検定」試験の実施もその一つである。これは編集委員が中心となって問題の作成をしている。問題作成に四苦八苦しているが、やお検定を機会に、八尾市の歴史・文化・産業などへの関心を高めてもらい、郷土の歴史を自分たちの目で確かめ、調査し、それを『河内どんこう』に書いていただくことで、郷土への関心が深まることを期待している。1回目は歴史が中心、2回目は産業を中心に出题し、3回目の今年は環境を中心に出题するように問題を作成中である。問題は試験終了後に『河内どんこう』紙面に発表していて、読者から質問も来るようになった。『河内どんこう』がより多くの市民に親しんでもらうようになることを願ってやまない。

このようにして『河内どんこう』は、平成25年（2013）6月に100号記念号を出版した次第である。表紙絵は本会役員、漫画家・随筆家であられる河村立司氏にお願い、山本の玉串川沿いの高井公園の様子を描いていただいた。今後も八尾・河内の人々が親しく読める、誰もが書いて投稿し、載せられる郷土誌として続いていくことを願っている。

第20章

八尾の市民活動の動き：文化・日常生活を創出する

The Citizens' Activities in Yao, Osaka: Creating Culture and Everyday Life

新福泰雅 (Shimpuku Hiromasa)

1. はじめに

私たち「特定非営利活動法人 やお市民活動ネットワーク」は、八尾市内で活動する NPO 法人であり、市民活動団体である。「市民活動」とは、福祉や環境など多様な社会的な課題の解決に向けて、営利を目的とせず、市民が自発的に行い、公益に貢献することを目的に行う活動（＝市民が行う公益活動）である。また宗教活動や政治活動を主な目的として行わない。NPO 法人は市民活動団体のひとつであり、市民が行う自由な公益活動の内、法律（特定非営利活動促進法）で定められた活動を行う団体に対して、法人格をさげ与えた団体である。法人格を与えられたことで、さらなる市民活動の発展と公益を産み出すことを期待されている。



NPO 法人を含め市民活動団体には、社会的な課題解決に向けてのミッション（使命）を持っている。当法人のミッションは、「みんなと仲良くなり、公益を産み出す人・主体を創り出すこと」である。そのために各主体との「つながり」・「パートナーシップ（協力関係）」を創り出すことを目指し、主に下記の事業活動を行っている（各主体とのつながり・支援を行うことを中間支援という）。

八尾市市民活動支援ネットワークセンター「つどい」委

託運営業務

八尾市高齢者ふれあいサロン「えんがわ」委託運営業務

八尾市まちづくり教室 企画運営業務

「やおふれあいまつり」の開催

八尾の市民活動の動きとして、主に八尾市市民活動支援ネットワークセンター「つどい」について、委託運営を行う市民活動団体の立場として紹介を行う。

2. 八尾市市民活動支援ネットワークセンター「つどい」

2.1 施設紹介

八尾市市民活動支援ネットワークセンター「つどい」（以後、センター「つどい」）は、市民活動の拠点として 2004（平成 16）年 10 月に八尾市が設置した施設である。愛称は「つどい」である。八尾市役所の本館に隣接する「北分室」にある。運営は、NPO 法人への委託運営としており、これまで当法人が受託してきた。

名称の通り、市民活動の支援を行う施設であり、ネットワークセンターである。主にセンター「つどい」に登録した市民活動団体に対して支援を行っており、2013（平成 25）年 3 月 31 日現在で 322 団体が登録している（以下、登録団体）。ネットワークとして、市民活動団体のつながりづくりや協働（団体同士が一緒になり、ひとつの目的に向かって共に活動を行うこと）の促進を図っている。また市民活動団体以外の各主体とのパートナーシップや協働を行うことも目指している。

2.2 支援内容と協働のネットワークづくり

支援内容は、ハード面では会議室の貸出や印刷機器等の貸出（印刷機・コピー機は実費負担）を行っている。拠点として会議・打合せができる場所として、資料や行事案内

のちらし等が印刷できるよう設置している。ソフト面では情報提供を行っている。機関紙「ニュースつどい」を毎月発行し、市民活動団体の活動やセンター「つどい」の活動を紹介している。インターネットはホームページとブログを設けており、ブログでは「ニュースつどい」の内容だけでは提供できない情報を補い、また随時情報発信ができるように更新している。「ニュースつどい」は毎月約 2100 部を発行し、登録団体をはじめ公共機関等あらゆるところに発送している。発送の際に、登録団体の行事案内のちらし等を同封する支援を始めた。そのことで「ニュースつどい」の発送だけではなく、市民活動団体の情報がわかるよう登録団体の発信ツールとして、登録団体を支援している。

機関紙「ニュースつどい」



協働のネットワークづくりとして、市民活動に触れる機会を提供する「茶ろん」や「広がり交流会」の行事を開催している。特に「広がり交流会」では市民活動団体の活動現場に参加する企画を始めた。目的は参加する際に地域活動団体や新しく参加する方に関わってもらい、地域活動との協働や新しい主体づくりの実現に向けて企画している。また市民活動団体が発表や活動する場として、これまで地域活動の場を紹介し地域活動と市民活動の協働を実現してきた。



広がり交流会：特定非営利活動法人自然環境会議の「菜の花の移植体験」に地域活動団体「エコロジー美園小」等が参加。地域活動団体の新たな活動場所となりつつある。



市民活動団体の発表の場：堤町ふれあい集会所で高齢クラブである「堤町ことぶき会」がふれあい喫茶を開催。市民活動団体「ku' u pikake (クーピカケ)」がフラダンスを演じた。以後、定期的にフラダンス教室を行うこととなり新たな活動場所となった。

2.3. 市民活動団体の現状と危機感

これまで紹介してきたような支援やネットワークづくりを行っている背景には、現在の市民活動団体が協働の少ない活動で完結している点にある。また協働の大切さを意識していてもまだまだ実現できていないのが現状である。そのことで新しい主体や仲間が出来ず、市民活動団体の高齢化につながっている。また中年層の仲間が集まって市民活動団体を立ち上げ、子育て支援や福祉を行う等、新しい主体も生まれている。しかし子育て支援を行う団体でも仕事などで活動を担う仲間を確保するのに苦勞をされているという話も聞いている。また NPO 法人で若者が活動の軸になり事業展開したくても雇用ができるだけの法人の収益源がなく、活動の軸になる担い手づくりに悩んでいる団体もある。このようなことから、市民活動団体は継続に意義がある中、人手不足、次世代の担い手不足に悩み、最悪の場合、活動の停滞や団体の解散といった現実が待っている。

そのため、もう一度、市民活動団体を立ち上げた原点を見直しながら、市民活動に参加したことのない人たちとのつながりや、団体同士の協働を意識し、市民活動団体の危機突破を図りたいと思い支援を行っている。さらに、新しい人とつながる上記の行事以外に市民活動団体や NPO 法人の相談業務、環境配慮の取組みなどを通じて次世代である小学生（個人）とのつながりづくりも行っている。つながりづくりを意識し誰でも気軽に参加できるように努めている。



小学生がカイワレダイコンを育て、観察日記を書いている。将来大人になった時に市民活動の担い手になってくれればと願っている。

3. 当法人の各種事業

3.1. 八尾市高齢者ふれあいサロン「えんがわ」委託運営業務

2012（平成24）年4月に設置された施設で、7月より当法人が委託を受けている。来館者にはつながる喜びを提供することをモットーに、昼食会や市民活動団体のマジックや指ヨガ、読み聞かせ、オカリナ演奏などを披露したりし、ふれあいの場を提供した。そのこともあり30名を超えるボランティアが参加し運営を支えてもらっている。また当法人の貴重な担い手になっている。

3.2. 八尾市まちづくり教室 企画運営業務

市民対象にまちの再発見として、ワークショップを開催している。2012年度（平成24）は東山本地区を対象エリアとして開催した。新たに八尾高校生やセンター「つどい」の登録団体である「ガールスカウト大阪府第16団」が活動先として参加し、新しい目線でまちの再発見に貢献した。また新たな次世代の担い手とつながった。

3.3. 「やおふれあいまつり」

かつて商店街では買物を通じて人と人とのふれあいや生活空間があったが徐々になくなりつつある。現在版として地域や人との「ふれあい」・「つながり」・「交流」を図り、地域交流の場を試験的に創り出す取組みを行っている。旧近鉄八尾駅前商店街の「城正会」と協働・連携を図って開催し、季節を感じる「七夕キャンドルナイト」や「もちつき」、また市民活動団体や商店街店主の有志が出展し交流を図って来た。

4. 文化創造からみた市民活動の役割：「みんなで取り組む文化・日常生活を創出すること」

私は以前、八尾市の環境協議会「環境アニメイティッドやお」の事務局に5年間、関わって来た。その時から、環境保全を行うには「現代版の昔に戻ることだ」と教えられ

体感してきた。当時は特に「NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会」のニッポンバラタナゴの保護活動と自然再生を支援する立場としても携わった。ニッポンバラタナゴの保護を通じて、生態や自然再生のメカニズムを自然科学の視点で解明し、その知見に基づいて実践を行い、着実にニッポンバラタナゴをはじめ希少生物が復活し自然再生という公益を産み出して来た。

そこで私が学んだのは、私たち人間も自然科学という地球の原理・原則を改めて知り、環境保全をはじめ、原理・原則に基づいて生きて行くことで必要以上の苦勞をせずに幸せに生きて行くことができることであった。また、その原理・原則が文化を創造する出発点であることも今回の寄稿を通じて、改めて気付かされた。

現在、当法人で市民活動の支援や多様な主体との中間支援の立場で携わっているが、実践内容は「現代版の昔に戻ること」を、もう一度昔からあった「助け合い文化」や「ふれあい」や「つながり」といった現在版を創り出すことであり、全く同じことであった。

また八尾では市民活動と地域活動が一緒になって、地域のまちづくりを共に実践し、より良いまちに発展するための動きが出て来ている。小学校区（地域の活動の状況に応じて中学校区）で各種地域活動団体が構成する「校区まちづくり協議会」が順次設立されている。

市民活動も地域活動も、みんなで一緒に協働する方向になってきた。これはまちづくりといった公益は行政だけではなく市民活動団体や地域活動団体などみんなで関わり取り組むという、公益活動での原理・原則に沿った動きになって来ている。

市民活動団体は、市民（市民活動団体・地域活動団体）・事業者・行政・教育機関など多様な主体による協働・活動の一助となり、活動の中心となることである。当法人は、さらに中間支援として多様な主体の“つなぎ役”になるようまちづくり・文化創造に努めて行きたい。

第21章

久宝寺の記憶

Memories of Kyuhoji, Yao

渡瀬弘美 (Watase Hiromi)

子供の頃、毎月11日と27日は朝早くから、家の前の両側に、自転車にリヤカーを付けた車の荷台いっぱいに荷物を積んで、露店が開かれていた。リンゴ箱を二つ置き、その上に板を並べて台を組んで店を出すのだが、これがお逮夜市である。金物、農機具、植木、衣服、履物、傘、鍔掛け、花、ボタン等、他にもあったかもしれない。ボタンは様々な色のものがあり、紙の台紙に並んでつけられていた。家の裏庭に、露天商の方のためにリンゴ箱や板を保管しておくスペースがあり、朝から取りに来ていたことを憶えている。

七味屋さんの前は子供たちでいっぱいだった。というのも、いろいろなものを調合する手つきと口調がたいへん面白かったことによる。

兄と「のぞき絡繰り」を見たのは忘れない。おじさんとおばさんが台の上を長い棒で叩きながら、物語を語るといのか唄いながら、下のほうの窓を覗きこんでいると、その調子に合わせて絵が描かれた板がパタパタとめくられ、変わっていくのである。

また、人の集まっている中に、筆を口にくわえて何か書いている、小さくて綺麗な尼さんがおられた。「どうしたの」と、祖母に尋ねると、養父に両腕を切り落とされたとのことであるが、その養父を憎むことなく、長年山科で暮していると話してくれた。

大人になっても尼さんのことが気に掛っていたが、本屋さんでその尼さん(大石順教さん)が書かれた『無手の法悦』という本を見て、読み、安堵した。80歳で死去されたようであるが、お逮夜で出合った尼さん、一番の思い出である。



参考文献

大石順教(1994)『無手の法悦』(新版)春秋社(初版1968年)。

第Ⅱ部

都市創造性の展開

インターラクティブと創造性

Developing Urban Creativity: Interacting and Creativity



流し節正調河内音頭

Nagashi-bushi Purely-Temperamental Kawachi Ondo

第22章

流し節正調河内音頭考

Considering Nagashi-Bushi Purely-Temperamental Kawachi Ondo

片岡英逸 (Kataoka Eiitsu)

河内音頭が近年著しく、全国津々浦々まで普及し歌われている傾向は、河内の住民としては自負し、歓喜の至りである。

河内音頭が、河内郷土では地藏盆が近づく頃から各地で開催されていたことは、人口に膾炙されているところである。そのことから、盆踊りと何か因縁関係があるのではと考へ、その由来を尋ねると昔、佛弟子の目連が、亡母が餓鬼道に陥り、大変苦しみ居るに思い忍びず、お釈迦さまの教えの俣に、七月十五日に百味五果を苦行僧に供養したところ、亡母の苦しみが脱することを得たので、目連及び大衆が大いに歓喜雀躍し、手の振り足の舞うありさまが盆踊りに導くという一説がある。それに係る歌に、

盆の十五日に踊らずばむかし 踊り始めた目連さまの意に背く
踊りをどらばお寺の庭で 踊りを片手に後生願ふ

とあるのを見る時、ここに盆踊りの精神があることから、盆踊りの本来の精神は、死者の追善供養を目的とするための念佛踊りであったと推察される。従って、その舞踊や場所が寺の境内を主とし、踊手も僧侶や佛信者であったのが、時代の変遷につれ佛教的儀式より一般娯楽となり、陰気なものより陽気なものに推移して、今も盆踊りは盆時を中心に多く開催され、特に地藏盆として馴染み深く発展されたものであろう。斯く考察すると、流し節河内音頭なるものが、当地の古刹常光寺が聖武天皇の勅願寺であり、本尊は弘仁年間の参議小野篁が地藏菩薩の尊容を奉安されたが故、毎年八月二十三日、二十四日地藏縁日に地藏盆踊りが古来より開催されていることが肯首されるのである。就中、室町時代に当寺の衰頹せる伽藍を再興されるに際し、足利三代將軍義満が自らの署名による内書を見る時、非常に尽力されたことが察せられる。それは下記の通りのものである。

「八尾地藏堂造料木等事 無等閑有沙汰者尤可為本意候也 十一

月二十四日 (花押) 山名前修理大夫殿

これを略積すると、八尾地藏の法堂を建てるに当り材木等の運搬には軽々しい取り扱いをせず大切にするように、という心遣いが窺えるのである。

このように、將軍の命に依り材木を運搬する故、大衆は大いに氣勢を挙げたことが目に映り、これより流し節は木遣節と言われる所以でもある。

尚、音頭という言葉は、人の先頭に立って首唱する者を音頭取と言われるように、多人数で謡う時は最初に謡う者、所謂指導する意味を含み、それ故に音頭は元來歌の呼称ではなく、謡い方の形式であり、歌は「口説き」と呼ばれるものである。音頭取の発声の口説き曲節が始まると曳き手の大衆がこれに呼応し、重い材木を運ぶ掛声が囃子(コラセードッコイセイ、サーヤレトコショーコラヨイヤセノセイ)となり、これが従來の念佛踊と迎合し、現在の「流し節音頭」の発創となったと考えられる。因みに、口説外題として「崇禪寺馬場」「お久藤七」「俊徳丸」「佐倉宋五郎」「曾根崎心中」等がある。最近仇討物、恋艶物語に対し地藏尊を奉賛する「八尾地藏験記」「八尾地藏通夜物語」の我ものを加えたものもある。

また、河内音頭と冠するものは、河内地方で謡れた民謡なるが故であり、泉州で謡れたものを泉州音頭、江州地方で生まれたものを江州音頭というのが如きである。河内音頭と呼称されたのは古來のものではなく、明治初期以降からではなかろうかと推察され、当地の流し節河内音頭に就ては、昭和初期に音頭取松浦定吉、吉井市太郎、太鼓、朝倉芳蔵、囃子、南野直子、時野君子、竹内富子等が、当時のオリエントレコードに吹き込み世に出した時に「河内音頭」と表示したのが初めて見るところのものである。爾來、常光寺で開催される地藏盆踊りは「流し節河内音頭」と河内の一風物詩として民衆の唯一の娯楽となり、盛大を極め連綿

として継がれているのである。

以上のように考えを巡らせて来た時、「流し節河内音頭」なるものは、八尾地蔵尊を奉賛し住民間の親睦娯楽としての中より発展して来たものと信じてゆきたいのである。私の記憶する戦前の当寺の地蔵盆会は、境内の中央に二、三間もある高さの櫓を組み、四方の柱には笹つきの青竹を建ててその枝々に団扇を吊り飾り、また、櫓より四方八方に色提灯を吊り巡らせ、門前には露天店が軒を連ね、境内の隅には覗唐繰りや見せ物小屋が築かれ大声で客を呼び寄せていたものであり、また、絶間なく寺の大鐘が鳴り響き、本堂では沢山の僧侶により大施餓鬼法要が営まれて善男善女の参詣者で賑い、更に夕暮よりは本堂の中央で大数珠繰りが行われ、一方では老若男女がどこからともなく色々な浴衣を着て参々伍々に集り、音頭取の発声に和して踊る姿、山門上に設えた太鼓の音等実に優雅な盆踊りの始まりである。当時、マイクはなく、肉声その侘の音頭であったので附近住人にも迷惑なく、夜を徹して踊り通されたのである。そして、音頭取の最優秀者には名誉の大きな御幣が授与され、又、他の者には賞品として馬穴、笹、杓等の日用品が与えられていたと記憶があり、露天店の焚くカーバイドの臭いととも消え去らないのである。大東亜戦争中は、国民等しく、戦争一色に染まり、踊りどころでなく途絶えていたことは勿論である。

終戦後は、人民が食糧や、諸物資の欠乏の中にあっても娯楽を求める気運が逸早く蘇り、当地にあっても青年団の肝いりで、河内音頭の復旧に力を注がれた。折しも大阪府(不詳)の主催で踊り大会が住吉神社で開催され当地の河内音頭も参加し、偶々優勝の栄を果し、山下好太郎青年団長等意気揚々と帰られたのである。これを契機として八月の地蔵盆踊りも年々定着し、盛大を極めて来たのである。この頃の音頭は、新河内音頭や江州音頭等の多数の音頭取の参加で、その中に「流し節河内音頭」は影を潜めるかにみえる時、マイクの騒音の苦情、暴力騒動等に依る公安上の関係で当局より時間制限の厳守指示があったのを好機として、午後七時より地元の流し節河内音頭を開演し、午後九時より午

後11時を終演として新河内音頭を主体としたセミプロの久乃家一行を主演と切替え実行し今日まで来ているのである。しかし近年の音頭ブームでは悠長な流し節音頭や踊りには若者に敬遠され、踊り曲節共に澁刺なるものが盛大になりつつあることは一抹の淋しさを禁じ得ないが郷土の文化として伝承されて来た「流し節河内音頭」を正調として保存すべく八尾市公民館長富田八郎氏、地元の高橋寿美代さんと私が幾度か会合し話を進めている矢先、高橋さんが亡くなられて後、頓挫して仕舞い、その俣推移して来たのであるが、地元愛好者に依り昭和36年に「流し節正調河内音頭保存会」が結成され、愛好者の拡大に努められ常光寺婦人会も斯る中に誕生し、また、八尾第二地区福祉委員会が組織されて委員会の啓蒙を計るため「正調河内音頭の夕」を開催し地元住民の親睦融和の高揚と「流し節河内音頭」の振興に依り永く子孫に伝承保存に懸命尽力されているのが現状である。

就中、平成八年に環境庁の「残したい日本の音風景百選」に選ばれ、懐かしい情景や故里の響きを感じさせる音風景)に、多くの人の知るところとなり、又、同年六月には、岩手県で開催された「地域芸能大会」に大阪府代表として出演し、有終の美を飾り、その演技に多くの人々から注目を集め、更には平成十二年には八尾商工会議所主催の日韓交流親善に出演するなど多方面に活躍し、毎年八尾河内音頭まつりにはもちろん出演しては好評を博し、今や八尾の伝統文化の振興に寄与したことにより、八尾市より文化功労表彰を授与されるに至っている。偏に保存会々員の努力の結晶と地元愛好者の後援あつてのことと深く敬意を表したいのである。

最後に、当地区の「流し節正調河内音頭」は、河内最古の音頭の発祥地であることの確証を、音頭研究家村井市郎先生より得、又、元文部大臣塩川正十郎先生の揮毫を賜り当寺境内に顕彰碑を建立し、今後、益々河内音頭の発展と郷土の文化の伝承を希求して止まない。

(平成16年10月)

第23章

河内音頭について

On Kawachi Ondo

松井幸一 (Matsui Koichi)

はじめに

八尾の夏は河内音頭一色になる。夕餉を済まし一息ついた頃、どこからともなく「アイヤコラセードッコイセ」と太鼓や三味線の音とともに河内音頭が流れてくる。八尾の人間はそれを聴くにつれ、血が騒ぎ、体が一人で動き出す。

八尾市内には一夏に屋内外を合わせて40から50の櫓が立つという。家を一步出れば、そこここに浴衣やハッピー姿の人が行き交う。河内音頭の盆踊りは八尾の夏を飾る一大風物詩である。

八尾河内音頭は長い年月と先人達の弛まぬ努力によって今日のような全国に誇れる郷土芸能になった。

このたび、機会を得て、一通りの概説を試みたい。

1. 河内音頭とは

日頃耳にする河内音頭は物語りに節を付けて唄いながら語っていく「語り芸」の一種であるが、囃しも入るところから、一口に言えば「浪曲と民謡の中間芸」といわれている。外題（歌詞）には、事件もの（河内十人斬りほか）、世話もの（壺坂靈験記ほか）、偉人もの（王将坂田三吉物語ほか）、任侠もの（国定忠治物語ほか）などがよく唄われるが、基本的には何を語るも自由である。音頭の一席（語り芸であるので一曲とはいわない）の構成は大まかに言えば前口上（あいさつ）、枕（軽い前話し）本題、結び口上（あいさつ）の順に進めていく。

節回しは一定の約束さえ守れば後は比較的自由に、決まっているのは囃しの旋律だけである。一席は一節の集合体であり、一節の構成は、一行の字数が七五調か七七調のものが幾つか続き、上の句と下の句に分かれている。上の句が終われば「アイヤコラセードッコイセ」という切りの囃しを、下の句が終わると「ソーラーヨイトコサッサノヨイヤサッサー」という落としの囃しを聞き手や踊り手が

囃す。切りの囃しの前には音頭とりが「ヨーホーホイホイ」という掛け声で囃しを求める。

この基本形に加え、時には一節の上の句と下の句を切らないことやリズムを乱さない範囲で演歌、浪曲、民謡など他の音曲やセリフの挿入も行い、音頭とりはできるだけ聞き手を飽かさないための変化をつけることに努める。いわゆる正調というものがない、極めて自由度の高い芸能である。伴奏（音頭界ではサイドと呼ぶ）には太鼓、三味線の他、ギター、キーボードなど洋楽器も使用し、2拍子を基本として、よりダイナミックな音曲となるよう演出される。踊りはゆったりとした、「流し」（手踊り）とリズムカルな「マメカチ」という二種類の振りが基本であるが、近年は競うようにアレンジされ、「新河内音頭」や「大阪おどり」と呼ばれる様々な新しい踊りが見られるようになっている。

2. 河内音頭の移り変わり

河内音頭が盆踊り唄として庶民の中に定着したのは、他の民謡や芸能と同様に江戸時代中期の頃であろうといわれているが、その頃から現代の河内音頭と同じような歌詞、節回しで、広い地域で唄われていたかというそうではない。明治時代までは河内地方の村々に多種多様な土着音頭があり、その数35～6にのぼるといわれている。それぞれ独得な調子で唄われていたが、総じて一般的な民謡や歌謡曲のごとく抒情詩的な歌詞を用い、短い一定の節を繰り返しながら物語りを唄い進めていく、極めて単調なものであった。

これらの土着音頭が現代の河内音頭に収斂される第一歩を踏み出したのは明治初期の頃である。現在の門真市に当たる地に住む歌亀という音頭とりが土着音頭の交野節を基調としつつも、どんな字余りや句余りでも自在に唄い込めて、長い一席でも聞き飽きない変化のある節回しを考案した。これによって、従来は屋外の櫓でしか通用しなかった

音頭が屋内でも口演できる、いわゆる座敷音頭の誕生となり、爆発的な人気を得た。この音頭は歌亀節と呼ばれ、現代の河内音頭の前形となるものであり、以後各地の音頭とりは、この歌亀節をもとにして改良を重ねることとなる。滋賀県から流入した盆踊り唄である八日市祭文音頭と歌亀節を中心とする河内地方の盆踊り唄を区別するために、前者を江州音頭、後者を河内音頭と呼称することもこのころから始まった。

大正時代に入ると、現大阪市平野辺りを中心に活動していた音頭とり達が、新感覚の平野節（後に初音会を結成したので初音節）を、さらに戦後復活した盆踊りに浪曲の節回しを多く採り入れ、一段と現代の河内音頭に近づいた浪曲音頭を送り出した。その後、五歳で初櫓を経験し、学生時代には頭角を表していた、後に音頭界の風雲児と呼ばれる鉄砲光三郎が台頭、進駐軍のクリスマスで出会ったジャズに触発され、研究を重ねた結果、マンボ、ボサノバ、サンバ、ルンバ、ロックなどの曲調を取り入れた「河内マンボ」と自称する鉄砲節を創り出した（鉄砲 1980）。また伴奏においても革命的な様式を採った。太鼓のタタキ方も囃しの時だけではなく、終始テンポをとる方式に変え、三味線やギターを導入を図るなど、よりダイナミックな構成とした。

昭和35年頃には、テレビ、ラジオなどへの出演効果もあり、大阪の一民謡に過ぎなかった河内音頭を全国的に広めることによって音頭界を牽引した。その後は在来の節を演じていた音頭とりも、この鉄砲節に追随、また、音頭とりの数も急激に増えていくこととなる。このことによって河内音頭はさらに節回しの工夫も盛んになって、節回しも豊かになり、明治時代までの土着音頭に似ても似つかない今日の音楽性の高い河内音頭に到達したのである。

3. 八尾の河内音頭

(1) 八尾は河内音頭の本場

八尾と河内音頭との関わりは古い。市内本町に在る古刹常光寺の盆踊り会で唄われる流し節は、室町時代に本堂が建て替えられる際、京都から材木を運んだ時に唄われた木遣り音頭が起源だと伝えられ生き、六百数十年の歴史を誇り、河内音頭の中で最も古いものであって、現在まで流し節正調河内音頭保存会によって踊りも含めて引き継がれている。毎年8月の23、24日の両夜にわたって開催されるこ

の盆踊り会の櫓は、隅柱に笹付きの青竹を建てて出演者に与える景品の数々を吊り下げ、天井には五色の御幣を飾る。御幣はその年の最も優秀な音頭とりに授けられる、今日という優勝旗に相当するもので、これを獲らんとして近郷近在から多数の音頭とりが集まり、大変な賑わいを呈した。この櫓のしつらいと運用の様式はその後各地の盆踊りの手本となったといわれているが、今では簡略化されている。

八尾には、この流し節をはじめ、恩地音頭、植松ヤンレ一節、太田ジャイナ音頭が保存会によって唄い継がれており、その他、老原音頭、六郷音頭、半九郎節、平音頭などの存在が分っているが、既に消えていったものを加え、古くから河内音頭のメッカであった。

時が移って現代の河内音頭が盆踊りの主役となった今日の状況を見ると、常光寺の盆踊り大会はその歴史性が評価され、しばしばテレビの放映もあり、今も昔の賑わいを保っている。平成八年には、環境庁（当時）「残したい日本の音、百選」にも選定されたが、踊りに関連するものは他に、富山八尾町のおわら風の盆、徳島の阿波おどり、沖縄のエイサーのみで、八尾河内音頭は日本の代表的な民衆芸能と認められているといっても過言でない。また、八尾市、八尾商工会議所をはじめ諸団体が組織をあげて支援する八尾河内音頭まつりは、河内音頭を中心に据えたイベントとしては日本最大の規模を誇る。

これらの盆踊り大会の櫓で熱演を奮う音頭とりは、芸の自由さが要因となってほとんどがアマチュアで、その数は百派千人といわれているが、八尾には約20の会派（複数の音頭とりと伴奏者を抱えるグループ）があり、他の地域と比べ一番多い。

平成13年には師匠格の音頭とりによって八尾本場河内音頭連盟を結成され、公的イベントへの協力や自主公演など組織的な活動が行われている。音頭とりが個人的な交流範囲を超えて地域的に組織化されることは音頭界では、初めてのことである。また踊り手についてもひと夏の楽しみだけでなく、企業や団体の踊りチームや踊りサークルに所属して一年を通じて活動する人達が他の地域に比べて圧倒的に多い。

河内音頭にかかる公的セクターの取り組みも八尾は他の地域に比べ抜きん出ている。八尾河内音頭まつりへの積極的な支援はいうに及ばず、市役所内に全国発信室、また商工会議所が情報発信基地を設置するなど河内音頭の普及に

力を入れている。

さらに河内音頭の研究についても、市と文化振興事業団が河内音頭の研究書『河内音頭いまむかし』（村井 1994）を発刊した。このように公的セクターが河内音頭の振興に積極的に関わっている地域は他にはない。ものの本場というものが、そのものの歴史性や質・量あるいは学術的な研究において総合的に他の追随を許さない場とするならば八尾は真に河内音頭の本場といえる。

（2）八尾河内音頭はどこへ

近年、八尾出身の音頭とり河内家菊水丸が、かつての鉄砲光三郎に劣らない知名度を誇り、また東京の錦糸町では盛大な河内音頭の盆踊り大会が開催されているなど河内音頭の将来はなお明るいと思われる一面もあるが、本場を自認する八尾河内音頭パワーに陰りが見られると、近年耳にするようになった。河内音頭の担い手は町内会や子供会といった「地域」であり、音頭を聴いたり踊ったりする「民衆のエネルギー」である。陰りが本当ならば、この地域エネルギーが低下しているということであり、高めていく強力な対策を講じる必要がある。それには様々なものがあると思うが、ここでは一つに絞って提案したい。

元来、まつりの主役は若者である。次々と若いエネルギーが注ぎ込まれることによって、まつりは華やぎ、引き継がれていく。四大踊りまつりと言われる阿波おどり、おわら風の盆、郡上おどり、よさこいおどりは正に若者が主役である。

一方、八尾河内音頭の状態を見ると、ロックやヒップホ

ップ調で踊る若者の姿が散見されるが、ほとんどの盆踊り大会やイベントにおいて中高年の楽園と化している。中高年が精一杯楽しめることは素晴らしい一面であるが、河内音頭の担い手である地域エネルギーをパワーアップするには何よりも子供や若者の参加を格段に増やすことが必要である。そのためには、せめて次の二つ位は取り組みを望みたい。

一つ目は音頭の新しいネタ（外題）の開発である。これまでのような、切った、はったの任侠もの、知名度の低下した偉人ものなどでは子供や若者を引き付けることはできない。若者も唄い、踊りたくなるようなドラマチックなものが必要である（例 ウルトラマン イチロー物語）。

二つ目は新しいイベントの開催と育成システムの構築である。（1）小・中学校における常態的な郷土芸能学習、（2）地元高校・大学における郷土芸能クラブの設置、（3）若者を対象とした河内音頭講座及び創作踊り大会の開催などが考えられるが、これらは公的セクターが先頭に立って推し進めて欲しい。

おわりに

優れた郷土芸能を持っていることはその地域に住む人達に誇りを与え、一体性を生み、大きな地域力を育むことにつながる。幸い、八尾には河内音頭という素晴らしい郷土芸能がある。この宝物は未だ地域住民のふれあいの道具という範疇に在るが、磨き方一つで何十万、何百万という人を呼べる大資源になると確信している。さあ、八尾の夏から河内音頭の大発信を。

参考文献

村井市郎(1994)『河内音頭いまむかし』八尾市。

鉄砲光三郎(1980)『河内阿呆鴉一代 鉄砲節夜ばなし』読売新聞社。

第24章

八尾の創造性について

On the Creativity in City of Yao, Osaka

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu)

八尾市は昭和23年に誕生し、高度成長期を経て人口が増加、現在は人口27万都市として安定している。中小の製造業の盛んな都市となっている。大阪府下では大阪市、堺市に次ぐ3番目の工業生産額（出荷額）を上げ、人口の割に中小企業、製造業の盛んな町で、全国有数の中小企業都市である。その生産額を上げるのに役立っているのは、企業の開発力が大きく、全国のトップシェア企業が多いことである。いろんなところで八尾のものづくりナンバーワンの会社が活躍している。最近出版された八尾市魅力満載BOOK制作委員会編の『Wao Yao 八尾の入り口』に紹介されているもので代表させるとすると、帝国チャック株式会社は、自動車部品の加工には欠かせない「チャック」と呼ばれる工作機械製造一筋に来て、あらゆる工作機械の要となる切削加工の先頭を走っている工場である。また塚谷刃物製作所は、「切る」「抜く」という刃物の製作ではトップシェアを誇っている。株式会社レザックは、抜型製造の技術を開発し、2012年経済産業省のものづくり日本大賞優秀賞を受賞している。このような技術力のある中小企業の会社が八尾に多くあり、その点で現在の八尾の創造性の豊かさを象徴しているものである。

増加した人口の大半が大阪市などからの流入人口である。工場も同様で、八尾市の工場誘致策に乗り、移動してきた工場である。それらが八尾市に来て、このような創造性ある企業に成長し、トップシェア企業になっていったのは何故なのか、そここのところに八尾の町の創造性を生む力が潜んでいるといわなければならない。

私は八尾の歴史を勉強しているものであるので、この面から考えていきたいと思う。まず考えられるのは、弥生時代の大昔から稲作の先進地帯であったことである。大和川や諸河川に恵まれた土地で、堆積平野の広々とした土地、一面の水田からは豊かな穀物が収穫されたところで、この経済力で都の政治・経済を支えてきた。海外と繋がる浪速

の海も近く、多くの渡来人が住みつき、新しい文化がいつも身の回りに存在するところでもあった。古代の豪族物部氏が繁栄したのは、八尾を中心とした河内の穀倉地帯、大経済力のある土地を握っていたからであり、物部氏を倒した蘇我氏も、肥沃な穀倉地帯を引き継いだ。聖徳太子の四天王寺の建立も、この地の経済力が頼りであった。

古代から多くの人が住み、違った出身、価値観の違いを乗り越え、豊かな経済力に支えられてきた土地であるので、多くの人を受け入れる包容力があり、それがまた発展力になっていったところであった。

奈良時代、聖武天皇を継いだ孝謙称徳女帝は道鏡を法王として政治の補佐を頼んだのであるが、その理由は道鏡の僧侶としての学識、男性としての魅力だけではなかったと考える。道鏡の持っていた出身地弓削や河内の経済力、多くの人が出身地や考え方の違い・身分を乗り越えて生活し、だれとでも付き合えるという性格、そうした包容力のある出身地の性格が道鏡への信頼へと繋がっていたと考える。称徳天皇が西の京由義宮を造営しようとしたとき、若江郡、高安郡、大県郡では反対の動きはなかった。紫香楽の宮では不審火が起こったりして不穏な動きがあったが、由義宮造営にはそのような動きは見られない。代わりに南河内の豪族たちは男女の歌垣の舞を披露し、西の京の繁栄を願った。多くの人が集団として、みんなの力を出して協力するという地域の性格、多くの人を受け入れ、協働していく姿勢は現在にも通じるものがある。

平安時代、在原業平は大和に住む平安貴族の女性を妻としたが、父の死後経済力が低下した時、業平を救ったのは河内国高安の女であった。高安の女の家は裕福で、業平の衣装を行くたびに新しくしたという。高安山麓の家が何を生業として経済力を持っていたのか、よくわからないが、肥沃な河内平野の経済力が背景にあったことは間違いがない。

能楽「弱法師」の俊徳丸の物語では、父は高安左衛門尉通俊であるが、説教節では、高安長者、信吉長者ともいわれる。この長者の経済力も河内平野の力が背景にあるのであろう。

鎌倉時代末、後醍醐天皇の倒幕を助けたのは、河内赤坂の楠木正成である。その正成の武力・経済力には河内平野部の豪族の後押しがあったと考えられる。物語では恩地左近、八尾別当顕幸、信貴右衛門など平野部の豪族の名が上がる。楠木正成の助力は権力への欲望がないところに、河内の人の経済力・人柄の特徴がよく出ているのである。

あまり長くなるので、先を急ぐことにして、もう一つだけ例示したい。室町時代末、蓮如の石山御坊、それにつづく証如・顕如の大坂本願寺を支えたのは、久宝寺御坊顕証寺であり、久宝寺の慈願寺であり、萱振の恵光寺であり、河内堅上雁多尾畑の光徳寺であった。その信者は河内や大阪の農家であり、商家であった。久宝寺ではこの時から大坂並みの特権を得て寺内町として発展する。ここでは商業の発展であったが、寺内町の建設を通して土木技術の向上もあり、それをもとに堺や平野と同様に、久宝寺は堀や土塁を巡らした中世都市へと発展する。

江戸時代に入り、久宝寺の町並みのほか、八尾寺内村ができ、近世の八尾の商工業の発展を導く。木綿の栽培、実

綿の販売、河内木綿布の販売と、稲作以外にも経済力向上の発展があり、八尾の創造力の基ができていく。

こうして八尾の創造力は、経済力や協力を惜しまない人の力などが基盤となって、八尾に来る人を温かく迎え、八尾を出る人は八尾で培った商工農の技術力を生かして活躍することになる。

八尾から出て活躍した人では、久宝寺から大坂の南堀（道頓堀）を開鑿した安井家、囲碁の力を認められた安井（保井）、その子孫で幕府天文方になり貞享暦を作った渋川春海、また近くは久宝寺から出て銀行業を成功させた野村徳七、文学では南木之本出身の萩原家の朔太郎、プータン国の発展に貢献した八尾出身のダショー西岡さん、八尾に来た人では天台院住職の今東光氏が挙げられる。地元の人との交流を通じて、河内の農家や商家の営み、古代や中世の政治や宗教家の動きを追求し、河内を紹介した。司馬遼太郎も八尾で執筆した時期もあった。榊山も八尾に住んでいた。

その他、戦後八尾に来た人は八尾を愛し、商工業、行政、教職、文学などそれぞれの道で活躍されている。

現在の八尾では、市民の活動が非常に盛んである。交流センターに登録されている活動団体も約320団体と多い。

こうした背景があって、文頭に述べた製造業、ものづくりの活躍があると思うものである。

第25章

八尾の食の移り変わりと創造性

Transformation of Eating and Creativity in City of Yao

澤田参子 (Sawada Sanko)

1. 食文化はモノ（食べ物）とヒト（人）

原始社会の人は、空腹や飢えから逃れるため食べ物を探し求めた。「生きることは食べることだ」「健康を維持するために食べるのだ」とよく言われるが人間はそれだけではない。人と人のお付き合いに、うれしい時にも、悲しい時にも、食べることで心を癒し、結びつきを強くしている。食文化ということばは、1980年代に広く用いられるようになった比較的新しいことばである。江原・石川(2009)は、食文化とは、民族・集団・地域・時代などにおいて共有され、それが一定の様式として習慣化され、伝承されるほどに定着した食物摂取に関する生活様式をさす、と定義している。食文化は食べ物（モノ）と人（ヒト）との関わりのすべてであり、食を取り巻く種々の条件からその地域の食文化が出来ている。

人は万物の神に、祖先の霊に感謝と祈りと願いを込めて食べ物を供える。神道では神饌、仏教では供物と言うが、信仰の対象でなくても日常の生活の中で食べ物を奉げている。正月に鏡餅を飾るのも、お月見に団子を供えるのも人と神を繋いでいるのは食べ物である。恩智神社の卯辰祭（秋季例祭）には、1000年来の伝統神事として人形供饌（ひとがたきょうせん）を神様にお供えし、氏子・崇敬者の身代りとして罪穢・災・悪運除けをお祈りされる。



ひとがた
身代わり人形

新穀（新米）を粉にして体の各部を作り、油揚げして形づくりをする。多くの神社では白紙を人形に型どって切り、代用して供えている。これこそ食べ物を仲介した人と神の融合である。

2. 八尾の食と他地域の食との関わり

(1) 近江商人と丁稚羊羹

大和川の付け替え後、新田では耕地開発が進み、綿・麦・菜種等の商品作物が栽培された⁵。綿は「河内木綿」として有名になり、木綿織が盛んになった。木綿織を全国に販路を広げる一翼を担っていたのは近江商人であっただろう。八尾の郷土食に丁稚羊羹がある。近江（滋賀県）の木之本（長浜市）や近江八幡では、古くから丁稚羊羹が有名である。普通の羊羹は小豆餡を寒天で固めて作るが、丁稚羊羹は小麦粉と小豆餡を混ぜ、蒸しあげて作った蒸し羊羹である。餡の量も少なく、小麦粉を使うので普通の羊羹より安上がりで作れるため、丁稚さんでも買うことが出来たという説や丁稚が里帰りした時に奉公先への土産にしたという説もある。京都・奈良はじめ全国に丁稚羊羹はあるが、寒天で固めてあるものが多い。近江商人が八尾に持って来たのか、八尾の土産に持って帰ったのかは定かではないが、繋がりがあったことが窺える。



丁稚羊羹

(2) 東大阪の食

八尾の近隣の町、東大阪の食をみるとほとんどよく似たものを食べている。

・茶がゆ、おみい：八尾、東大阪とも河内の茶がゆとして知られている。

・じゃこ豆、ふなの昆布巻・ふなの煮つけ：秋まつりの頃、ため池の水を抜いて獲れるじゃこやふなで作る。大きい鮎

⁵ 八尾市史編集委員会(1988)および日本の食生活全集大阪編集委員会(1991)を参照。

が獲れたら「あらい」にし、酢みそあえにして食べた。東大阪には川魚専門店が数年前まであった。

- ・ずいき料理：ずいきは収穫時だけでなく、干しずいきにして、いつでも煮物やすしにして食べた。
- ・半夏生餅：ぶしぶしだんご、あかねこ、柏原では「よしんぼ」と言う。
- ・丁稚羊羹：小豆のこしあんに小麦粉を混ぜて、竹の皮に包んで蒸した羊羹。
- ・行事食：節分の料理・月見のごちそう・生ぶしの押しずしなどは同じである。

(3) 大和の食

八尾の文化に大きく影響を及ぼしている奈良（大和）の食を見ると、八尾に近い地域での食は共通しているものも多くあり、その共通しているものや違いなどを挙げてみる。

- ・茶粥・おみい：大和の茶がゆ、河内の茶がゆと言われ、現在も朝食に茶がゆを食べる人がいる。
- ・雑煮：丸餅、雑煮大根、里芋、豆腐、白味噌で作るが、餅を椀から取り出してきな粉をつけて食べる。
- ・節分：麦飯、いわし、煎り豆（干しかぶらのみそ汁はない）
- ・半夏生団子：八尾では、よしんぼ・赤ねこ・ぶしぶし団子などと呼ぶが、奈良では、はげっしょ餅・小麦餅・さなぶり餅・けはや餅と言う。もち米と押しつぶした小麦を蒸し、餅につきあげ、適当にちぎってきな粉をまぶして食べる。この餅を甕などに入れ、濡れふきんを被せておき、ぬれた手でちぎり、きな粉をつけて食べた。濡れふきんをしっかり被せておくと腐りにくく、日持ちがする。麦粒が口にあたりぶしぶし団子、麦色から赤ねことも言う。奈良では郷土のお菓子として小麦餅を「総本家さなぶりや」や「道の駅ふたかみパーク當麻の家」で販売している。他の和菓子店でも期間限定で販売している。八尾にも、半夏生近くになると注文数だけ作る店（黒田屋）がある。



小麦餅（半夏生餅）

- ・お月見：八尾は里芋と米を炊いてだんごにする。奈良で

はこれを芋ぼたといい13個供える所もあるが、皮をむいた生の里芋を13個と米粉で作っただんご13個供える所もある。八尾は「丸いだんご13個盛り、横に1つ、後の1つはお月さん」で十五夜と言うのは風雅な趣向である。

- ・のっぺい（汁）：八尾や奈良だけでなく、全国的に食べている。春日大社近くの「春日荷茶屋」では、12月の春日大社おん祭りの日に粥とのっぺいを取り合わせて、メニューとして提供している。
- ・八杯：八尾や奈良では、葬式や法事などに食べる豆腐料理（精進料理）で、おいしくて8杯食べたという説や豆腐1丁を8個に切ったという説もある。江戸時代の料理本にてくる豆腐料理で、調味割合が水4・酒2・醤油2で（8杯）と書いてあるが、現在はこの味では口に合わず、現代の味付けに工夫している。全国の学校給食メニューにもある。
- ・七色しんかい：奈良は七色おあえと言う。盆のお供えの料理（七種の野菜のみそあえ）
- ・赤えいの煮つけ：奈良では正月や祭りに日に食べる。八尾では祭りの日に食べる人が多いが、普段も食べていた。赤えいの煮ごりを熱いご飯にかけて食べるのが美味しかったと懐かしむ人が多くおられる。赤えいはPHが高腐敗が遅いので、海に遠い大和や八尾でよく食べられていたと推察される。最近あまり見かけなくなった魚である。
- ・すし：八尾は生ぶしの押しずしを作るが、奈良では柿の葉ずしを祭りや何かにつけよく作る。塩さばで作るのが本来であるが、最近鮭や鯛などを柿の葉に包んでいる。奈良の郷土食として全国的に知られ、通販や駅の売店でも売られている。

これらの郷土食は八尾では作り方や由緒を知っている人だけがかるうじて守って作っているだけのように思える。奈良では、柿の葉ずしをはじめ小麦餅（半夏生餅）も市販されているし、茶がゆ・茶飯も飲食店で食べることができる。生ぶしの押しずしなどは高槻市、寝屋川市、東大阪市のホームページに地元の郷土食として掲載している。八尾も八尾市も住民も自信を持って、「八尾の郷土食はこれだ」と広く発信することを強く切望する。

3. 食に使われている河内言葉

河内弁は、こわい、汚い、悪いなどと言われるが、おもしろくて、楽しくて、味のある言葉が多い。食べものに親しみを込めて「～さん」、敬意を表して「お～」、せわしくて

言葉を縮める、その他に分類し、下表のようにまとめた。

「お」を付ける	おかいさん (粥)・おみい・おまめさん・おいもさん・おせん (煎餅)・おまん (饅頭)・おつゆ・おついで (汁もの)・おひや (冷水)・おぶ (茶)・おいなりさん (いなりずし)・おこうこ (漬物たくあん)・おあげ (油揚げ)、お (とうふ・にく・みそ・みかん・なすなど短い単語だけでなく、こんにゃくや茶碗・湯のみまで)
「さん」を付ける	お豆さん・おかいさん・おいなりさんおあげさん・あめちゃん (飴)
短く言う	あげ (薄揚げ)・こやどうふ (高野豆腐)・かんとだき (関東炊き,おでん) こんまき (昆布巻)・まっか (まくわうり)・アイスクリン (アイスクリーム)・ごんぼ (牛蒡)・いわこし (岩おこし) こんぶだし (こんぶだし)・かんこり (かき氷)・糸こん (糸こんにゃく)
その他	ぶぶづけ (茶づけ)・ごつあげ (厚揚げ)・あも (餅)・たいたん (煮物)・にぬき (ゆで卵)・かしわ (鶏肉)・さといも (どろ芋)・にどいも (じゃがいも)・あんこ (飴)



4. 第二次世界大戦前後の食

(1) 戦中・戦後、木本地区に住んでいた岡本ミチ子さん (85歳) からの話

*飛行場のこと

昭和13年大正飛行場ができるので、田畑を取られた。農地を差し出した家と出さずに済んだ家とはかなりの格差があった。土地の値は1反あたり1,000円くらいだった気が

する。土地を取られなかった家は作物を作り、それを高い値段で売っていた。終戦後、すぐ多くの住民が飛行場に入り、勝手に畑を耕していた。取り上げられた土地は返還されたが、無償ではなかった。飛行場倉庫に置いてあった電線や器具など無断で持ち出し販売していたものもいた。

*食べていたもの

食糧事情は極端に悪化した。配給制度があった。

・雑炊 (米は浮いている程度 メリケン粉団子を入れた)。だんご汁 (すいとんとは言わない)。普段は麦飯だが、正月は白飯を食べた。きな粉・はったい粉・さつまいもの軸・豌豆の皮 (薄皮を除く) を食べた。さつまいもよりじゃがいもが主で茹でて塩を振って食べた。じゃがいもと玉ねぎを一緒に炊いた。よもぎやヨメナ (嫁菜) はお浸しにした。枝豆はずんだ餅にもした。川にはうなぎ、しじみ、タイワンドジョウ、モロッコ (もろこ)、ふな、なまずなどがおり、結構獲れた。川は埋め立てられ堀になり、モロッコぐらいしか取れなくなった。カレーライスには肉がないので油揚げを入れて煮た。

*配給: 米は1人1日当たり2合3勺 (330g) だった。豆かす (大豆から油を搾った残り粕—飼料や肥料にする) 不味が粥に入れたりして食べた。なんば粉 (とうもろこし粉) は苦かったので、パン屋でカステラに加工してもらった。魚は干し鰯・さいら (さんま、開きさんま)・赤えいなどがあった。終戦直後、缶詰が沢山貰えた。1人10個くらいあったのでは。これは公的な配給ではないと思う。飛行場の近くなので。。

*兵隊さんの食べていたもの: 兵隊が食用蛙を獲って民家へ焼いてくれと持ってきた。小豆、砂糖、小麦粉を持ってぜんざいを煮てほしいと頼みに来た。1升瓶に玄米を入れて棒で搗き白米にしているが、上官の食べ物だと話しているのを聞いた。

*買い出し: 和歌山までリュックを背負って行った。(15,16歳の娘頃、弟と) 知人が郵便局に勤務しており、郵便袋を借りて食糧を詰めて運んだ。警察の目をくぐり抜けるのが大変だった。

(2) 学童疎開に来ていた子ども達

昭和19年大阪市立味原国民学校から、恩智のお寺や天理教教会や地域の集会所などに集団疎開で来ていた。窓から西の方 (家族のいる方) を向いて泣いていた。食べ盛りの時期なのでいつも腹をすかせ、シラミに苦しんでいた。

1日の生活は7時起床、洗顔・清掃・朝食をとり8時30分から朝礼・皇居に礼拝・戦陣訓を言われた。午前中は算数、国語などの勉強をした。午後は、柴運び・掃除・洗濯や炊事の手伝いなどをした。米の炊き方も教えてもらった。暇のある時は高安の山に行き戦争ごっこなどをするのが楽しみだった。6時に夕食をとり、勉強して9時に消灯だった。寮母さんが大きな釜でご飯を炊いていた。朝はおつけ、昼はちらし、夜はにんじん、大根などの献立を記録している子どももいた。寺の境内には芋を植え、にわとり、うさぎも飼っていた。近所の農家にいも堀の手伝いをして沢山もらってきたり、親切に子供を呼んで食べさせていた。面会時に母親が持ってきてくれた大豆と地元の柿の実が唯一空腹を忘れさせてくれた(1985年「第3回やお平和のための戦争展」資料より)。



5. 八尾の人と食べ物

八尾の町の人、郷土食や特産物をどのように見ていたり、広げたりしているのか。

(1) 学校給食

1954年(昭和29年)に学校給食法が制定され、「パン・牛乳・おかず」と先割れスプーンの様式が長く続いた。1976年米余剰対策として米飯給食が取り入れられ、おかずも和食が増え箸を使用するようになった。2005年(平成17年)食育基本法(内閣府2005)が施行され、食育推進基本計画(内閣府2011)には、「学校給食での郷土料理等の積極的な導入や行事の活用」と示された。教育の場で「郷土の食文化を知ろう」という食育の中で、学校給食は郷土食を積極的に取り入れ、地場産の食材を使用するようになった。子ども達は地元の郷土食や特産品を知り、興味・関心を持ち、家庭にも広がり、八尾を実感することになる。

(2) 老舗料亭「山徳」おかみ(久尾順子氏)の話

150年前(文久3年1863)久宝寺出身の初代久尾徳松が本町で料理屋を開業した。当時の建物を現在も使用している。この頃、八尾の町は河内木綿で活気にあふれていて、木綿関係者や商人たちも多く来ていた。飛行場ができると飛行場関係者の客も多かった。高度成長期には連日、会社や銀行関係の利用があり、昼も夜も接待宴会などが続いた。大阪万博の頃に料理旅館にして客も多かったが、次第にビジネスホテル等もでき、旅館が廃業されていった。近年は役所の歓送迎会や企業の接待なども激減している。料理は客の好みに合わせて、和食ばかりでなく洋風料理も作る。肉料理を入れてと言う注文もある。味付けも今風に工夫している。地元の野菜を使って八尾らしさを出すようにしている。八尾の料理屋としての誇りをもっている。



(3) 町の人の継承

八尾に先祖代々100年以上住んでいる人と、いわゆる地の人ではないが、50年以上住んでいる人も八尾に愛着を持っている。子育て中や仕事が忙しい時は、周囲をゆっくり見ている余裕などなかったが、仕事も終え少し時間が出来、近所の人とも話をする機会が増えるようになるとすっかり八尾人になる。八尾のことをもっと知りたくなり、食べ物は、特産品は、行事はと、積極的にいろいろな伝統を引き継いでくれる。若ごぼうや枝豆が急速に知られるようになったのも生産者だけでなく、この人達の力もあるだろう。飲食店も菓子屋も八尾の食材を使って、新しいもの作りに挑戦している。これからの八尾の食が楽しみである。

6. 食の周辺の諸問題

(1) 食品の安全

食生活の環境や文化が、かつての様式から変化し、野菜・肉・魚を買ってきて調理するだけでなく、加工食品や惣菜、調理済み食品材も利用され、食品が人の口に入る経路・経緯が多様化しており、食品の安全性を確保することは複雑で難しい問題となっている。滝澤氏は良い食料とは①期待

される栄養的内容を持っていること②人間の感性を満足させることができる内容を持っていること（美味しいこと）③人体にとって有害でないこと（安全であること）を挙げている（滝澤 2008）。食品表示偽装・食中毒事故・食品添加物・BSE(狂牛病)問題・遺伝子組換え(GM)作物・残留農薬など食品問題は枚挙にいとまがない。食品の生産、加工、流通等すべてに経済効率が優先され、消費者も「手軽に、安いもの」を求めて食品の安全を疎かにしているのではない。生活習慣病やアトピー性体質などは食べ物に起因しており、今の食べ方が子孫にまで影響を及ぼすのである。「食料に安さだけを追求することは、命を削ることと同じである。次の世代に負担を強いることにもなる」と鈴木氏は言い切っている（鈴木 2013）。「安かろう、悪かろう」でなく、「少し高くても、良いもの」を求めることが、消費者にとって重要なことである。



エコ農産物認証マーク

八尾の農業生産者は、より安全なおいしいものを消費者に届けたいと、大阪エコ農産物認証制度の認証を受けて頑張っている農家がある。大阪エコ農産物認証制度（2001,2013）とは、農薬の使用回数や化学肥料の使用量を通常の栽培より削減した農業を推進している。野菜に虫が付きやすく、雑草も生えやすいので手間がかかるが、自分の作った野菜を自信を持って食べてもらいたいからと話される。「地産地消」とは、地元で生産・加工される食品を利用することで、新鮮で美味しく安全で栄養価も高い食品を得るだけでなく、農業も盛んになり、地域の活性化にもなる。

(2) 食のグローバル化と TPP

毎日の食卓にのっている食品は国産ばかりとは言えなくなっている。大豆も小麦粉も野菜・果物・冷凍食品・調理済み食品、さらに米まで外国から輸入している。国産和牛にしても飼料は輸入している。今や食は地球規模で一つになっている。食生活が多様化してよいと喜んではおれない問題がある。

***食料自給率の低下——外国から安い食品が入り、日本の**

食料自給率が（カロリーベースで）1965年度73%、1980年度53%、2012年度39%と大幅に低下している（農林水産省HP）。

***食品問題のグローバル化——BSE（狂牛病、牛海綿状脳症）はアメリカの牛が感染した。鳥インフルエンザはアメリカで発生、中国、タイ、ベトナムで被害拡大、日本でも発生した。中国産野菜の残留農薬、加工保存・輸送中の汚染など食品の安全が危険にさらされている。**

***TPP（環太平洋経済連携協定）**

TPPに加盟した場合大きく影響を受けるのは、食の安全と農業への影響であろう。食品の安全と安心を守るための規則や基準が見直されることになる。遺伝子組換え表示義務やBSE対策、食品添加物許可、収穫後使用農薬（ポストハーベスト農薬）などが規制緩和され、日本の基準より低くなり食品の安全が脅かされる。日本は命をとっても大切にしている国であり、少しでも国民の不安を取り除こうと厳しい基準を設けている。それが崩れそうで心配だ。また、食料自給率も農水省によると27%程度になると試算している。農業・農村は食料生産の場としてだけでなく、国土保全・自然環境・景観形成・文化の伝承などの多面的機能を持っており、これらが喪失すると大きな影響を受けることになる。日本政府はTPP交渉に参加するが、結論はどのようになるのだろうか。

7. 食から八尾の町づくり

「食」は人を良くするし、元気にもさせてくれる。八尾の人は元気で活発で、何事にも積極的だ。食べ物にも強く関心を持っている。安い店に走ったり、手抜き料理で間に合わせたりしているばかりではない。農産物直売所が八尾には6か所あるが、大勢の人が利用している。まちの駅「畑のつづき」（山本町）では開店直後は身動きがとれないくらい混んでおり、新鮮な野菜、果物、花を求めて客が集まってくる。本当の良いものを知っている人達である。



味噌も手作りするし、家庭菜園で野菜も作る。我が家の味は格別に美味しいだろう。また、飲食店も菓子店も、何代も続いている老舗の店から最近の今風の店まで八尾が好きで八尾の町でほんまもの美味しいものを味わってもらいたくて頑張っている。伝統の郷土食を守りつつ、新しい

食を生み出し、新しい八尾を作り出す力を持っているのが八尾の人だ。住んでよかった町、美味しい食べ物がいっぱいある町、そんな八尾作りに大いにその力を発揮してほしいと願う。

参考文献

- 江原絢子・石川尚子(2009)『日本の食文化：その伝承と食の教育』アイケイコーポレーション。
- 大阪府・環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ(2001,2013)「大阪エコ農産物認証制度」
- 鈴木宣弘(2013)『食の戦争米国の罠に落ちる日本』文藝春秋。
- 滝澤昭義(2008)『毀された日本の食を取り戻す』筑波書房。
- 内閣府(2005)『食育基本法』2005年6月17日法律第63号 最終改正平成21年6月5日法律第49号。
- 内閣府(2011)『第2次食育推進基本計画』
- 日本の食生活全集大阪編集委員会(1991)『日本の食生活全集27聞き書大阪の食事』農山漁村文化協会。
- 農林水産省 HP：「食料自給率の部屋」「食料自給率とは」
- 八尾市史編集委員会(1988)『八尾市史』(前近代)本文編、八尾市。

第26章

都市のリズム・即興性・定型性：創造性の源泉

Stylizing, Improvisation and Rhythm in Cities: Sources of Urban Creativity

岡野 浩 (Okano Hiroshi)

1. 序

近年、都市の創造性に関する国際レベルでの議論において、文化遺産と創造性との相互浸透の重要性が叫ばれているとともに、企業や公共団体、NPO/NGO、地域住民、顧客、世界市民など様々な主体を視野に入れた「社会的持続性」が注目されている⁶。

このことは、本年（2013年）5月、中国・杭州で採択された『杭州宣言』において『包摂的で公正かつ持続的な成長と開発』にとって「文化」は最も尊重すべきものであるとされ、6月にはUNESCO事務局長 I.G. ボコヴァ氏による国連総会演説において、2015年以降における国連本体のアジェンダのなかで文化を最重要なものとしたことから首肯できよう⁷。ここでも重要な概念として用いられるのが「社会的持続性」(social sustainability)である。

「社会的持続性」は社会の「質」を反映し、自然と社会

⁶ 岡野(2009c)では、異文化同士のコラボレーションの例としてBMW・MINIの「都市文化ブランド戦略」、社会レベルの諸問題についてのバランスを組み込んだ「統合戦略コンセプト」を打ち出したミュンヘン市、人形操作に文楽の手法を選択的に取り込んだモントリオールの人形劇団などの事例を検討することにより、社会的包摂を内包した都市の社会的持続性やダイナミックな学習能力や俊敏性、多様な論点のバランスを視野に入れた、都市の包容力を発揮するためのダイナミックな都市戦略経営システムの構築への方向性を示した。

さらに、岡野(2012a)では、大阪・空堀の楓ギャラリーを取り上げ、そこで繰り広げられるオープンスペースとしての「活動」に焦点を当て、様々なアクター(ヒト・モノ・コト・道)が市民知を創造する場・空間における役割とその創造性との関わりを考察するとともに、世界大戦中の空襲を免れた空堀というスペースが持つ「記憶」とそれに密接にかかわる道(熊野古道)、そしてアーティストによる「活動」の創造性を検討した(大阪市立大学・都市研究プラザ・レポートシリーズNo.25)。

日本における創造都市についての提言は佐々木(2001)および包摂型創造都市については佐々木・水内(2009)を参照。

⁷ <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/culture-and-development/hangzhou-congress/> ただ、注意深くUNESCOの報告書を読めば、文化多様性と人権の尊重は「文化」の基底にあると明示されていることに留意すべきである。

との関係を示すものとして捉えられ、社会における諸関係および経済活動やボランティアなど、様々な実践を通じて仲介されるものであり、人々の欲求を満たし、自然とその再生産的な能力が長年にわたり保持され、社会的正義や人々の尊厳や参画が満たされる方法に応じて形成される(Littig & Grief3ler, 2005)。

本章では、筆者のフィールド研究サイト⁸のなかでも直向きでかつ懐の深い文化を持つ大阪・八尾が、UNESCOが強調する「包括的で公正かつ持続的な成長と開発」の典型例であることを示したい。

研究方法論としては、「社会的持続性」を動詞的に捉えることによって、様々な活動を主体(主語)の議論ではなく、述語に注目し、行為・行動に焦点を当てながら、排除的ではなく包摂的に物事を把握したい⁹。

とりわけ、創造性の源泉として、「包摂する(包容力)」・「バランスをはかる」・「俊敏性」(パッチングする)という三つの動詞と創造性との関係性を検討し、様々なバランスをはかるために必要なものを市民知のなかから提示したい。なお、ここでいう「市民知」とは「市民による実践知」として捉え、「市民が持っている実践・理論の相互浸透から長い年月をかけて形成された知」と定義づける¹⁰。

⁸ 現在の研究サイトは、大阪空堀・住吉・平野・河内(八尾・東大阪・交野・柏原・四条畷など)・宇治・京都信楽・滋賀五箇荘・滋賀豊郷・愛知豊田などである。

⁹ 「述語的包摂」による「文化編集」(ズラす、差し引く、逆回し)というコンセプトについては岡野(2012a,b)を参照されたい。

¹⁰ 当該都市に住んで、利害を持ちながら地域の研究を行う「レジデント研究者」の課題と「新しい野の学問」の方向性については菅(2013)を参照。本書は、新たな視座を得るため、レジデント研究者と市民の言説から学ぶことを目指すものである。

2. 社会的持続性と述語的包摂

(1) 社会的持続性の重要性

都市の「持続性」(sustainability)はこれまで地球環境保全に焦点が当てられることが多かった。しかしながら、増大しつつある経済的不平等、社会的排除、文化的緊張、さらには空間的分離 (spatial segregation) から脱却するものとして、市民社会の調和的な進化と両立する発展 (あるいは成長) が重要であり、「社会的側面」(社会的持続性)を欠かすことはできないであろう(Littig & Grief3ler 2005)¹¹。

ポリスとストレン(Polese & Stren, 2000)は、世界の主要都市では、財政問題などからパブリックセクターの後退や労働市場の再構築による「社会的持続性」への脅威を経験しているが、移民の増加によってもたらされる多様性を通じて、新たな「機会」が得られるとする。

さらに、コラントニオ(Colantonio, 2009)は、社会的持続性のアセスメントの枠組みとして「実践」・「政策」そして「理論アプローチ」を提示し、アセスメントのキーとなる特質として「技術とテーマとの接合」、「多基準アプローチ」、「目的と原則設定の重要性」および「アセスメントにおけるステークホルダーの参加」の4点を示している¹²。

バンクーバー市では、「住居やヘルスケアが適正な価格で手に入り、地元で生産された食料を得ることができ、各自の技能を生かせる雇用があり、家族を養えるに十分な収入が得られ、安全なコミュニティと職場を得ることができる」という基本的な欲求を満たされること、「個人あるいは人間のキャパシティの維持ができ、社会的あるいはコミュニティのキャパシティが維持できること」である。

さらに、社会的持続性を導く原則として、「公正・公平、社会的包摂・インターラクション、安全、個人やコミュニティに適応し創造的に変化できること」をあげている(City of Vancouver 2005)。

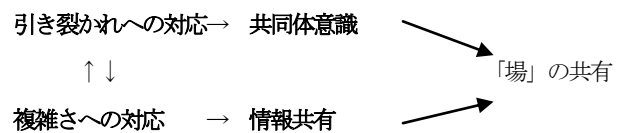
¹¹ Littig & Grief3ler(2005)は、「エコロジー」に集中したサステナビリティ (One-pillar model という) の限界を指摘し、エコロジカルで経済的で社会的な「三つのピラーモデル」(Three-pillar model or multi-pillar models)の重要性を指摘している。

¹² 建築家であるロジャース(Rogers,2002)は、サステイナブルな都市として、7つの要件、すなわち、「公正な都市」、「美しき都市」、「創造的な都市」、「エコロジカルな都市」、「ふれあいの都市」、「コンパクトで多核的な都市」をあげる。これらは網羅的なものではあるが、国家や企業、自治体や市民など様々なステークホルダーの「共創」なしでは達成できないであろう。

(2) 「引き裂かれ」への対応

伊丹(1991)は、一人の人間が持っている三つの側面として、「消費者としてのヒト」「所得者としてのヒト」「共同体生活者・文化者としてのヒト」とに分けたうえで、グローバル化によって、国と国との間、ひとつの国の中、ひとりの人間の中、のそれぞれにおいて「引き裂かれ」が生じることを指摘する。その上で、重要な点は国際的にひろがる事業活動の「複雑さ」と、それがもたらす「引き裂かれ」にどう対処するかにあるとし、「グローバル統合」の必要性とその困難性を強調した (図表1)。

図表1 グローバル統合の基盤



(出所) 伊丹(1991) 147頁。

これに対して、岡野(2012)では、グローバル化による個人の「引き裂かれ」やグローバルガバナンスと公共空間についての議論からコスモポリタニズムの重要性について触れ、文化創造とビジネスとの関係性、グローバル都市のガバナンス(「共治」)のあり方、そして、創造的でダイナミックな都市経営システムについて検討した(岡野,2009c, Okano & Samson, 2010, 岡野 2012a,b)。

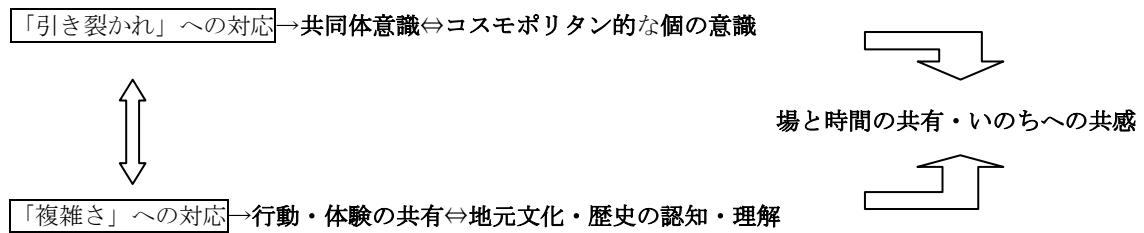
共同体意識とともに、コスモポリタンとしての「個の意識」を掘り下げることは重要である。個人の「引き裂かれ」は、「グローバル」という折衷的なあり方ではなく、コスモポリタニズム (国際感覚) に基づきつつ、公共空間の4つの象限のポジショニングを広げることが重要であること、また、これまでのトップダウン的なガバナンスから脱却し、多様なステークホルダーによる社会レベルのガバナンスが必要となることを主張した。

伊丹(1991)ではひとくくりにされていた「共同体生活者・文化者」についても、近年、「共同体生活者」と「文化者」との間の「引き裂かれ」が顕著になってきた。自己の文化を長期的に理解し、共同体のなかで生活しているという実感を持ってなくなっているのである。伝統的生活習慣が薄れることにより、地元で伝承され行われている民族行事

などがとりわけ若い世代に理解されなくなっている。コスモポリタンの個の意識を高めるだけでなく、地元の文

化・歴史を感じ取り、理解し、多くの人々と共有することを推進する試みが必要である（図表2）。

図表2 述語的包摂による引き裂かれ・複雑性へ対応



(出所) 筆者作成

(3) 文化編集と述語的包摂

社会における様々な行動様式や文化遺産、人々の営みなどが時代の流れの中で変容を加えられ、元々別のものではあったものが重なったり、複数あったものが他のものに埋没したり、まったく新たなものが突如として生まれたりすることを「文化編集」と呼んだ（岡野 2012a,b）。

日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながら領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶け合いなじみ合って」きた（藤原 2008）。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかった。

ヒトが重要なアクター（行為者）であることはいうまでもない。ただ、「誰がやったか」という問題を特定するのではなく、述語に焦点を当てることによって、ある特定の集団や人々が排除されるのを避け、ものに籠められた想いや言葉、そして言葉にならない想いに焦点を当てることによって、そこから抜け出てくるものが浮かび上がるのである。ここでは、モノが重要な行為者であり、記憶やコトを動詞で捉えること（述語的包摂）によって、主体の議論を弱め、ともに形成してきたもの（共創のプロセス）を出土させることを目指したいのである¹³。ヒト・モノ・コトとの関係性

のみならず、それらの一体化を想定しながら、世代間をつなぐモノのエージェンシー化と捉えるのである¹⁴（図表3）。

（物・者）と「コト」（事）をあげている。日本語の「モノ」は物質的・人間的・霊的の三つの次元があり、その三層一体的な非二元論敵思考の持つ創造性や可能性を探索すべきことを主張する。

¹⁴ この思考の基礎にはアクターネットワーク理論（ANT）がある。ANTは、1980年代後半からフランスのM. カロンとB. ラトゥール、イギリスのJ. ローが中心となって発展させた理論であった（Amin & Cohendet 2004）。ANTの方法論的な特徴として、研究の初期段階から一切の前提を置かない点があげられる。ANTは西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギー的区別を超越しようとしていることにある。

①いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。こうした視点からすれば、内的意図を持ち合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との区別は単なるイデオロギーにすぎないとし、アクター（行為者）は近代的な人間主体を示すアクターではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェンシー（行為能力）であるアクタント（actant）とみなされることによって、ヒトとモノの結合からエージェンシー（行為能力）が生まれ、アクターネットワークに分散されていると考える。

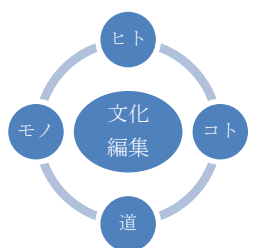
②さらに、意図（intentionality）を行為から分離することによって、「物のエージェンシー化」（行為主体性）を可能とする。「意図」というのは行為の基準でなく、社会的事実としての「意図」は、行為の原因ではなく、逆に「意図」をネットワークが生じる行為の結果と捉える道を開くことになる。「アクターが他のアクターを取り込むための方法」あるいは「種々のアクターが変化し結びつけられていく過程」と意味づけられる。

③ある「翻訳」（translation）が失敗したときにはさらなる「翻訳」のため、既に安定化されたブラックボックスを開き、アクターの立ち現われ方が変幻自在に変容するのである。ここでは、意味はヒトや言語使用によって一方的にモノに付与されるものではなく、ヒト以外のモノを含む様々なアクターが織りなすネットワークの効果として生み出されるとする。

村松(1973)は、大工道具がモノとの対話の通訳者であると指摘し、次のように述べる。「日本の木は幸いにして昔からわれわれ日本人の多くにとって、単なる材料ではなくて、モノとしてあった。…（中略）… 材料と対話し、それをモノにするための、その対話の通訳者になってくれるのが道具である」。

¹³ 鎌田(2010)は、それぞれの民族には、固有の言語体系ないし言語文化にとって、一語彙として使用頻度が高く、文法的にも概念的（意味論的）にも核（心）になる「根源語」が存在するとし、「モノ」

図表3 アクターネットワークと文化編集



定型性 即興性 リズム

文化編集：包摂する、バランスをはかる、パッチングする

3. 創造性を高めるための動詞

(1) 「包摂する」：社会的持続性と包摂力

ここでは、創造都市・文化創造・社会的包摂を連結する概念として、ポレス(M.Polese)とストレン(R.Stren)による「社会的持続性」を取り上げたい。

ポレスとストレンによる *Social Sustainability of Cities*(2000)では、ジェイコブズ(J.Jacobs)やフロリダとは異なり、都市化による「ダイナミクス」を記述している¹⁵。

都市はパブリックセクターの後退や労働市場の再構築によって社会的持続性への脅威を経験するが、移民の増加によってもたらされる多様性と通じ、新たな「機会」が得られると捉えるのである。

また、ポレセとストレンは、しばしば見逃されることので多かった、都市の多様な部分を「相互に結合した一つの全体」として紡ぎ、公的サービスと雇用へのアクセスのしやすさを増加させる、ローカルな「場のマネジメント」政策の役割を重視する。

より具体的には、ハウジング、食物の配給、保健、近隣計画に関する新たな試みを行いながら、社会・経済的なネットワークを有する地域社会を出現させることを目論むのである。

(2) 「バランスをはかる」

都市の創造性の源泉を追求する場合、バランスをはかること(balancing)が求められる。ブラッドフォード(Bradford,2004)は、こうしたバランスの一つの有り様を

¹⁵ J.ジェイコブズは、「創造都市」の主役である職人企業というマイクロ企業のネットワーク型の集積が示す「柔軟性、効率のよさ、適応性」のすばらしさに驚嘆し、その特徴を輸入代替による自前の発展とイノベーションとインプロビゼーションに基づく経済的自己修正能力あるいは、修正自在型経済と把握している。

示し、カナダやイギリス、さらにはオーストラリアの都市をケースとして、それらのバランスの取り方について検討している。創造都市であるためのバランスとして、次の9点をあげる。

- ・「地域コミュニティに根差したモノやコト」と「グローバルなコスモポリタンの影響」
- ・「遺産」と「新奇性」
- ・「国際的な関心を引くような大規模なフラッグシップ的プロジェクト」と「創造的な基盤を奮い立たせる小さなプロジェクト」
- ・「公式的な高度な文化」と「非公式のストリート・シーン」
- ・「非営利のアーティスト」と「創造的な産業クラスター」
- ・「ローカルな知識」と「プロフェッショナルな専門技術」
- ・「規則に準拠した説明責任(アカウンタビリティ)」と「草の根の実験」
- ・「全体的な思考」と「戦略的な行動」
- ・「近隣の再生」と「社会包摂」

「地域コミュニティのルーツ」と「グローバルなコスモポリタンの影響」はこれまでの論稿(岡野, 2009)で取り上げたものであるし、「遺産」と「新奇性」はUNESCOの世界遺産と創造都市ネットワークとの関係性を検討していることを想起させる。また、社会的持続性に密接に関連する項目として、「フラッグシップ的プロジェクト」と「小さなプロジェクト」とのバランス、「ローカルな知識」と「専門知識」とのバランスは重要である。

問題は、こうした「バランスをはかる」をどのような手段を用いて達成し、どのような状況になれば達成したとみなされるかにある。政策的にいえば、単純にプロジェクト別の予算配分のバランスによって達成できるものではない。

一方が他方の文化基盤として優先されるべきものも存在する。また、上であげた各項目内のバランスだけでなく、各項目間のバランスも重視すべきである。たとえば、業績評価尺度(バランススコアカード)を組み込んだ人事評価制度と教育システムとの融合された人事教育制度があげられよう。このバランスを達成するための一つの重要な思考がシンクレティズムである(岡野 2012a,b)。これは異なる文化の相互接触により多様な要素が混濁・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異質な神格や教義が混在・融合して一つの宗教体系をなしている場合や、同一社

会に複数の宗教体系が併存し、人々が状況に応じて関与する場合などがある。ただ、シンクレティズムは折衷主義ともされてきたが、混合という意味の「折衷」ではない。二つのものが外見上は合体していると見えたとしても、両者は区別されながら、保持・保存され、併存しているといえる。

(3) 「パッチングする」：俊敏性とダイナミックケイパビリティ

ダイナミックケイパビリティは、経営学の資源ベースビュー (resource based view) という競争戦略論の流れから生まれたものである¹⁶。とりわけ、主に 80 年代以降の日本企業の台頭を背景として、その戦略行動の理論化を行うプロセスで定式化された。

資源ベースアプローチでは、企業が保有する資源に価値 (valuable) があり、稀少で (rare)、真似ができません (inimitable)、代替できない (non-substitutable) 場合、それらの資源が当該企業の持続的競争優位の源泉となるとされる (Barney, 2002)。

しかしながら、一度獲得した資源は長期間維持されるのを前提としており、変化の激しい動的環境は考慮に入っておらず、資源特有の固着性が逆に変革の足かせにもなるというパラドックスも内包されていた。

これに対して、ダイナミックケイパビリティの議論では、持続的競争優位というものは存在せず、資源の束を絶え間なく組み替えながら、新たな競争優位の獲得を頻繁に繰り返さなければならないとし、特定の資源そのものではなく、その時々で相対的に出現する「資源」を俊敏に組み替える能力がダイナミックケイパビリティであると定義される(例えば、Eisenhardt & Martin, 2000)。

また、ティース等(Teece *et al.*, 1997) は、急激な環境変化に対応するため、企業内部や外部のコンピテンシーを統合・構築・再構成する能力であるとする。すなわち、新たな資源構成を実現する企業内のプロセスが重要であると考えられるようになってきた。

こうした思考の変化は、資源の束を組み替える能力だけ

でなく、戦略的提携などによって他社の価値ある資源や知識を自社に取り込む能力、異質な文化を持つ提携パートナーとの相互作用によって、新たな知識を生み出すケイパビリティ (knowledge creating capability)、すなわち組織学習がその前提として位置づけられるのである(野中 1990)。

さらに、アイゼンハートとブラウン(Eisenhardt & Brown, 1999)では、ビジネスチャンスの変化や移動に合わせて、絶えず事業をマッピングし直す、戦略的プロセスである「パッチング」(patching)¹⁷の重要性を主張する。パッチングは変化の少ない市場よりも環境変化がめまぐるしい市場で効果的であるとし、パッチングの条件として、各事業ユニットがモジュール構造 (共通単位を持つ部品を組み合わせたもの) で、完成度の高い業績評価指標があり、一貫した給与体系が組み込まれていることをあげている。

4. 創造性の構成要素としての「文化」：八尾におけるヒト・モノ・コト・道

それでは、創造性はどのようにして捉えればよいのであろうか。M.ド・セルトーは、モノが幾千もの過去の実践を生来させ、実践をとおして使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行っている「モノ」に焦点を当てるべきであるという(ド・セルトー 1987, p.17-18)。

さらに、さまざまな集団や個人が、これからも「監視」の網のなかに囚われ続けながらも、他方でそこここに散らばっており、戦術的で、ブリコラージュに長けた「創造性」が隠れた型 (隠密形態) をとっているか、この在り様を掘り起こすことが必要であるとする。こうした策略と手続きを行う主体はあくまで「消費者」であり、彼らが反規律の網の目を形成していくと主張する。この点は、M.フーコーの「考古学」的理解とはまったく逆の発想であることに留意しなければならない。

次に、創造性を促進させ持続させるための要素として、

¹⁶ 経営戦略論において、ポジショニングから、資源ベース、ダイナミックケイパビリティへの重点変化については岡野(2003)およびダイナミック戦略、とりわけパッチングについては Eisenhardt & Brown (1999)および Brown & Eisenhardt(1998)を参照。

¹⁷ パッチングとは、(応急的に) 手当てる、鎮める、調停する、などの意味がある。「鎮める」や「調停する」については、原始宗教や神道との関連性が浮かびあがる。これまでの組織改変との差異については Eisenhardt & Brown (1999)を参照。

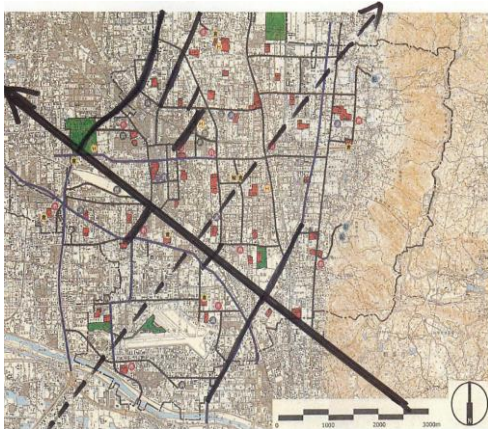
定型性、インプロビゼーション（即興性）、リズムを挙げ、八尾の道路や河内音頭などを事例としてアプローチしてみたい。

(1) 八尾の道（道路・河川・水路）：定型性と自由度のバランス

これは、型を歴史のなかから創り出しながら、個人および社会の自由度を獲得することを意味する。自然からヒトから、過去の文化的なエッセンスを消化し、過去の様々な遺産や思考法を借りながら、編集しながらこれを定型化することによって、一方では自由度を獲得する方法がこれである。

まず、「八尾の軸」といえるようないくつかの軸がある。そのなかで最も重要なものの一つが旧大和川の流路による「軸」である（図表4、実線の矢印）。

図表4 八尾の都市計画道路と「軸」



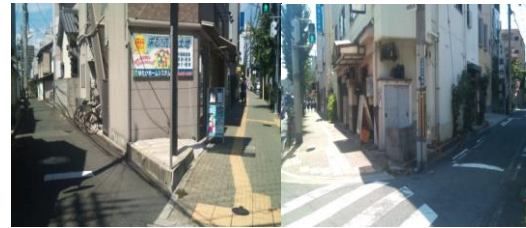
（出所）八尾市地域防災会議（2004）に筆者加筆
（赤は指定避難所、緑は広域避難地を示す）

昭和38年（1963）に開通した光町久宝寺線（表町線）は、やはり「八尾の軸」に直角になるように北東から南西に向けて通されているが、この角度は他の都市計画道路とともにほぼ同じ角度である（図表5）。

図表5 現在の光町久宝寺線（表町線、本町1丁目交差点）



（光町久宝寺線の角度が八尾の軸の一端を示している。）



八尾の軸と上記の角度によって放射線状の道が生みだされた。
（出所）筆者撮影

そのすぐ北東部には旧大和川の付け替えによる新田が開発されたことに影響され、北西－南東の軸に沿って街並みが形成された。その結果、開通した道の両脇にある歴史的な道路との交差部分は直角ではなく、意図したかどうかは別として結果的に「放射状」になっている。慣れるまでは分かりにくいですが、ひとたび八尾の軸あるいはアーキタイプを（原型）の一端を理解すれば、行きたいところに最短距離で行くことができる道になっている。この特徴を伸ばすことによって、さらに利便性の高いエリアを形成し、他の地域との連携を高めることができる可能性がある。この特徴がさらに伸ばされることを期待したい¹⁸。

これに関連して、会津若松市・都市計画マスタープラン（2013年3月）における「4. 分野別構想：まちのつくり方」（他都市との連携を図る「放射環状ネットワーク」）は注目できる。とりわけ、災害に強い街を作るためにも、会津若松市の「外部に向かって開かれた」都市を志向している点に注目すべきである。いうまでもないが、これは河内の人々が一貫して目指してきたものである（図表6）。

¹⁸<http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2013042300012/> 昭和40年から実施され、現時点では、道路計画のうちで61%程度が達成されているとの回答があった。

図表6 会津若松市の放射環状ネットワーク道路



(出所) 会津若松市・都市計画マスタープラン HP

表町線は、昭和 21 年に内務省の認可が下り、工事が進行したが、本町 1 丁目交差点から近鉄八尾駅間の舗装予定地点に神木の楠が 3 本あった。これを伐採して工事を進めるべきか慎重に検討されたが、八尾市によるお祓いがなされ、昭和 38 年(1963)1 月 19 日に開通式を迎えた¹⁹。ここにおいて、いのちへの共感が見て取れる (図表 7)。

図表7 八尾市主催による御神木のお祓い (昭和 37 年)



(出所) 八尾市市政情報課提供

八尾市役所の裏側 (北) にある、やはり旧大和川の流路と同じ角度で通されている「旧道」も維持されている。これは可能な限り直線距離で目的地へ行くことができるという利便性、および、歩いてみようと思わせる「仕掛け」を重視したものとなっており、いまは水路になっている「新橋」(志んばし) という歴史を感じさせる小さな欄干などにも重要な文化遺産であるといえよう。自然の川であった昔の姿を臉に浮かべることができる (図表 8)。

¹⁹ 表町線の延長工事の着工については八尾市 (1962)、開通式については八尾市 (1963) に詳しい。

図表8 八尾市役所の北東側すぐの新橋 (志んばし)



(出所) 筆者撮影

(この橋の下を再利用された高度処理水が流れている。奥の三叉路も趣がある。)

また、八尾市立幼稚園の横に最近設置された、下水の高度処理水を利用した水路も、八尾商工会議所の西側を南に走る水路とともに、重要な意味を持つものである (図表 9)。

図表9 下水処理水有効活用事業 (八尾市内)



(出所) 筆者撮影

旧大和川の軸とその対極の軸、流路を尊重した新田開発の結果、こうしたことが可能となったのであり、過去のモノを生かしながら、活かすか、付け替っても「変わらない」ものを保存するのである。川と水路、そして道路との関係性は重要であろう。その関係性において「見えないアクター」を見出す努力が求められるのである²⁰。

八尾枚方線、安中植松線、萱振曙川線 (南部分)、中央環状線や外環状線なども、とりわけ旧大和川の流路を跨ぐ部分は、まさにこの角度に道が建設されている。上述した「八尾の軸」の形成に旧大和川の流路が現在においても大きな

²⁰ 絶滅危惧種の淡水魚である日本バラタナゴの市民および高校・大学レベルでの保存・研究活動もこの文脈で考えることができる。いうまでもなく、日本バラタナゴなどの絶滅危惧種が重要なアクターとして位置づけることができる。

都市の水資源および大阪平野の地下水や水質については益田 (2011) に詳しい。

影響を及ぼしていることがわかる²¹。

また、生活の中での「利便性」や「心地よさ」が生まれている。こうした「八尾の軸」を形作っている長い歴史の積み重ねが都市の創造性にとって重要である。もちろん、今の生活にも影響を与えているものも多いが、見えなくなっているモノやコトが多く、気づくのは難しい。埋め込まれた創造性を見抜く目をいかに養うかが課題である。

(2) 八尾の即興性：河内音頭とジャズ

第二のファクターとしてあげられるのが即興性である。即興 (improvisation) とは「構図 (作曲) と実行 (演奏) の行為が不可分であり、構図 (作曲) / 実行 (演奏) のそれぞれが過去のそれらとは異なること」(Bastien and Hostager, 1992)、「自発的な方法で行為を導く直感」(Crossan and Sorrenti, 1996) などと説明され、アドリブと同義とされる²²。

これとの関連で、八尾の創造性の根源を生かした総合的なイベント(「コト」)である河内音頭が注目できる。河内音頭は、700年の歴史を持つとされ、常光寺での「流し節正調河内音頭」(本書第Ⅱ部に所収)などの宗教的な意味合いをもつもののほかに、農作業の際に歌われる「恩智音頭」、「ジャイナ音頭」、「植松ヤンレー節」、そして現代版の河内音頭など、様々なバリエーションがある。そのスタイルとメロディーは北河内の交野節のほか、滋賀の信楽の「やっちくれ」あるいは「信楽節」も重要である(佐々木 1997)。

河内音頭は滋賀県の江州音頭から生まれたといわれる。近江商人の藤野四郎兵衛良久は今でいうところのプロデューサー的役割を担ったとされるが、その足跡は大いに注目できる²³。近江商人の文化活動は、伊勢商人と同様、地域連

²¹ この角度の理由については、風水および陰陽道の影響も見逃せない。鬼が出入りするとされる北東-南西の「鬼門」(および裏鬼門)を避けるため、「南天」(なんてん)を植えることによって「難点」(なんてん)を避けることも行われてきたが、道そのものを鬼門の方向に据えることによって、各家の鬼門を逃がす(ズラす)ことになることも重要であろう。これも文化編集の一つであるといえよう。詳しくは宮本(2009, 131頁)を参照。

また、古代の河内と大和との接点については近江(2013)を参照。

²² 即興演奏は「演奏の過程において作品が創作されること、あるいは演奏過程において作品に最終的な形が与えられること」と定義される。

²³ 行基が建立した滋賀県豊郷町の千樹寺は天明年間(1781~1789年)に大火に遭い、消失する。北前船で活躍した近江商人又十の2代目藤野四郎兵衛良久が、亡父の遺志を継ぎ、海上の安全や漁族の慰霊祈願も込めて浄財を投じ、千樹寺の再建に取り組んだ。その

携の「アーキタイプ」(原型)であるとも考えられる。行商を自らのビジネスの発祥とし、「三方よし」の中でも商売の基本である顧客との信頼関係を築き上げるために「現地よし」の精神を浸透させることが喫緊の課題であった。

さらに、若い従業員と年配の経営陣との関係性を高めつつ、商人と顧客との商談と会話の即興性、そして年中行事を共に参加するなかで、各地域での信頼を獲得することが最重要課題であったわけで、文化の担い手の役割はその最も高度なモノであったといえよう。

前述した定型性との関わりでは、河内音頭は、冒頭のみ非常に形式的であり、年齢に配慮しながら、自分は「見かけどおりの若輩」で「悪声」であるという一方で、自由度を獲得するであり、その場に応じてアドリブを利かすことが許されるとも考えられよう。

また、歌に使われるテーマは地域によって異なり、歌の構造は定めないことも多い。河内音頭は伝統的な民衆音楽の定型的なものであるとともに、即興性と無制限性を兼ね備えた文化遺産であるといえる²⁴。

たとえば、「新聞詠み」を復興した河内家菊水丸(2001)は、その時々^{しんもん}の出来事(グリコ森永事件、国際食糧問題、北朝鮮やイラク訪問など)、歴史人物、言い伝え、ポップ・マリーやジョン・レノンなどの音楽家の生涯を題材とした。リクルート事件を糾弾した菊水丸による河内音頭はNBCやNYタイムスなど欧米メディアでも大きく取り上げられた(同上、89頁)。

また、多くの音頭取りにより、エレキギター²⁵など1960

遷仏供養の日を七月十七日(旧暦)に迎えるにあたり、隣町の八日市に祭文語り・桜川雛山の弟子、「歌寅」こと西沢寅吉(後の初代桜川大龍)を私宅に招いて経文祭文を採り入れた一般民衆向けの音頭を作らせたという。当日、この音頭に節をつけて歌わせ、更には光彩を添えるために「絵日傘」や「扇」を与えて踊らせたところ、集まった人々は、「踊らにゃ損」と音頭によって踊り明かしたという。評判が評判を呼び、美濃や伊勢にも広まり、「江州音頭」という呼び名が定着するようになったのである。本来の祭文の意義も徐々に豊作祈願へと変わり、各地で盆の恒例行事となるに従い、「恋物語」から「軍記」、「出世もの」、「お国自慢」と、演題もみるみる増えて行く。娯楽に乏しかった当時の人々にとって、この上ない「楽しみ」でもあり、また厳しい時代を生き抜く「力の源」でもあった。詳しくは、滋賀県・豊郷町の豊会館のHPを参照。

²⁴ 河内音頭は他の地域でも人気を増しており、東京墨田区錦糸町(1982~現在)、姫路、宝塚、大阪府池田市、四国などその他の町の盆踊りで歌われるだけでなく、町おこしとしても重要な存在となっている。この墨田区・錦糸町の河内音頭については朝倉喬司氏の貢献が大きい。詳しくは朝倉(1978)を参照されたい。

²⁵ 1965年10月、足利市教育委員会は「エレキギター禁止令」を出し、エレキギターなどの購入、バンド結成、演奏会への参加を禁

年代において社会的に問題視されていた楽器を取り入れられるとともに、太鼓など伝統的な和楽器と掛け合わせたりすることは「文化編集」の視点からも興味深いといえる。

すなわち、伝統をベースにしながらも、現在性をアピールし、「即興性」を交えながらダンスと共に物語を語るというやり方は、伝統的な社会への抵抗や社会批評（クリティーク）をようでもあった。

「即興性」の分野はジャズ音楽を引き合いに出されることが多いが、ジャズの特徴への接近は避けることができず、ジャズは即興がさらに大きく洗練されたものに発展した静かな現象の一つとなった事実がある。探究へと進歩させた団体の有効性は、学者が徹底的に調べた比喩的なアリーナと交響楽団の演奏会ほど違いが見られる(Kanter, 1989; Sayles, 1964)。

「即興による創造性」とは、価値の創造、効果的な新製品、もてなし方、ひらめき、行動、また複雑な社会的組織の中での個人の働きによるプロセスに関係するとする(Woodman *et al.* 1993)。また、Miner *et al.*(1996)によれば、行動とは、変化を起こすこと、改正すること、創造すること、いじくったり、変更したり、つけ加えることというよりも、より純粋に即興で新たな発見をすることであるとす。

(3) 八尾のリズム²⁶

「リズム」(律動)とは時間軸における二つの点を置くことにより、その二点間の時間に長さを感じるようになるが、その「長さ」をいくつか順次並べたものをいう。すなわち、「時間的現象要素の規則的の反復である」といえる。これに対して、「拍子」は、弦を一様に叩くこと、あるいは弾くこ

じ、テレビのエレキ番組は見ないよう指導するということが同中学校の校長会で申し合わされた。高校生も自粛が求められ、校外での演奏は休日でも学校の許可が必要になった。その後、エレキは社会的な認知を受けることになるが、バンド活動をする高校生たちが置かれた立場は現在も変わっていないという(毎日新聞、2013年6月24日、地方版)。

²⁶ クレストン(1968)は、リズムの要素として、拍子・速度・アクセントおよび型をあげ、アクセントがリズムの生命であるとする。「それ(アクセント)なくして、拍子は単調な鼓動拍の集合の連続にすぎず、速度は全く動きの感覚をなくし、型は雲をつかむようなぼんやりしたものになってしまう」(35頁)。

岡(1987)は、リズムが音楽・芸術・文化をはじめ、日常生活の隅々にまで浸透しており、東と西の文化が各民族の「リズム的風土」の上にはっきりと根付いていると主張する。

とである。

「リズム」と「拍子」の対立は、運動の持続性がリズムとして体験されるためにはまず拍子がそれに加わらねばならないということと矛盾しない(クラークス 1971)。それゆえ、運動が少なからず〔リズムの〕決定的要因としてとどまる。しかし、他方で、「リズム」と「拍子」が本質的に異なる発生源を持つにもかかわらず、人間のなかで互いに融合しうる²⁷。

「繁栄と衰退、受容と放棄、邂逅と離別など、人間生活にとって避けることのできないこれら転変とともに、あらゆるリズム的脈動を、ことさら人間の生命の非常に感動的な反映たらしめているものはまさにこれのみである」。

次に、朝倉(1987)は河内音頭とリズムについて次のように述べる。「……流れるようなメロディ・ラインが内にリズムを生んでいく、あるいはまたその逆の、河内音頭の両極性に結びつくだろう。喜びの中の悲しみ、悲しみのひしめきからの喜びの蘇生、河内音頭に限らず、歌とは、だいたいこうした両極性のはざまに生まれるものだと思うが、河内音頭は、その構造がとりわけダイナミックである。リズムと節の反発と融合の目まぐるしい入れかわりが、歌い手と踊り手の間の底の深いスウィング感として増幅され、悲業を悲しむ涙の節まわしが地と足の間に浮きたつような喜びの磁場をつくり、それは生者と死者の、やや騒々しい年に一度の交歓の場に、あれよあれよと移りかわっていく」(39-40頁)。

そのうえで、朝倉は、同じ道を聖俗のはざまから繰り出された念仏踊りの遊芸人たちも歩いたはずであり、この遊芸人の念仏踊りが村々に定着し、河内音頭の祖型になったのであり、河内音頭は、異質なものを排除するのではなく内にとりこむ「容器」ともなっているという。

「リズム」と「拍子」、および創造性との関係性についていえば、時間的および空間的に「ずらす」(文化編集)ことによりリズムが生まれ、創造性が生みだされる可能性が

²⁷ クラークス(1971)は、昼と夜、明と暗、夏と冬、生長と衰弱、生誕と死亡、貯蔵と分配、逗留と放浪、拘束と放逐のリズム的交替のなかに、また、天と地、太陽と太陰、火と水、男と女、上と下、前と後、右と左のリズム的交互性においても、生成と消滅へと対極化する万象の姿を明らかに見出そうとする。

このような諸現象のリズム学は現象世界の領域内にとどまり、直接現象するリズムの本質的特徴を拡大することによって、原則的に測定可能な中間ではなく、上がり下がりや下がり上がりの質的対立によってリズム的な交替現象になっているという。

ある。河内音頭の最近の踊り方である「まめかち」もアップテンポにしてリズム感を増したものであり、ゆったりとした正調河内音頭、さらには江州音頭との間の大きな差を生みだしている。こうした正調河内音頭、河内音頭、まめかち、スウィング調の踊りなど、異なる時代に生みだされた多様な河内音頭を一つのスペースで行うことによって創造性の芽が出るとともに、伝統的なものを残しつつ、若い世代の脳裏に刷り込むことができる²⁸。

異なる地域における文化の重なり、時間の重なり、ずらしの文化編集によって、新たなリズムが生まれ、創造性に繋がっていくといえよう。世代の感性の違いにより音頭に変容が加えられる。問題はその変容に対して支持が得られるかどうかであろう。ただし、この支持については、短期的な評価ではなく、長期的な尺度でみていく必要がある。

5. 八尾の歴史と創造性：本書第I部のレビュー

「八尾の創造性に関連するような市民の実践はお書きください」というメッセージを念頭に提示し、八尾の方々に考察を加えていただいた（本書第1部）。

以下では、「ヒト・モノと創造性」、「知と創造性」、「場・みちと創造性」、「集り・交流と創造性」、の四つにこれらを分けながら考察してみよう。

(1) 「ヒト・モノと創造性」

大阪の証券業界をリードし、文化活動にも精力的に活動した野村証券の創業者・野村徳七（初代）、そして、八尾地蔵にちなんだ創作オペラが紹介される。野村徳七の久宝寺寺内町での幼少期のエピソードや大阪の大弥両替店での丁稚時代での経験について興味を持つとともに、日本舞踊とオペラやフラメンコなどとの親和性、コスモポリタンの視点と地域に根ざした視点および伝統芸術との融合など、非常に大きな意味がそこに埋め込まれているといえよう（岡野 2003, 2009c、Harvey 2009）。

八尾に関わる人々について考察するためには、ステークホルダー（利害関係者より広義）だけでなく、世界市民としての視点を組み込むことが必要となる。ここにおいて地元の市民の背中を押す役割が重要となる。すなわち、いかなる「物事」も、推進したい市民とブレーキをかける市民

²⁸ 平家物語、電車などの車内放送など、語りのリズムについての幅広い分析は兵藤(1997)を参照。

との狭間になって、前進できないということが起こりうる。世界市民としての観点をいかに持つかが求められるのである。このことは、ブータンの農業指導に一生を捧げたダシヨー西岡氏についても、現地のキーパーソンとの関係や「ヒトとモノ」との融合によるアクターネットワーク分析の枠組みによって解釈できよう²⁹。1953年、第一次マナスル登山の年にネパール西北部学術探検案が京都大学生物誌研究会(FFRS)に提出され、今西錦司氏は中尾佐助氏（大阪府立大学教授）と共に「ブータン計画」を始めた（川喜田 1992）。

西村市郎右衛門と講念仏踊りとの関係も、地元住民の西村氏への想いと関わらせて理解することができるのであって、個人の信頼から地域間や国家間の信頼へ展開させるなど、重要な文化交流のプロセスの問題である。

(2) 「知と創造性」：知の中継地・編集地・発信地

八尾に知の拠点を創設し、教育基盤を築いた私塾「環山楼」が重要である。環山楼に招聘された京都の伊藤東涯とその父親で古義学を打ち立てた伊藤仁斎については、朱子学の解釈文献を見るのではなく、儒学の原典（孔子や荘子など）そのものに立ち戻ろうとするものであった。伊藤親子は、幕府から弾圧される可能性もあったにもかかわらず、あえて、当時の権威に反対する説を八尾という場所で講義することは、創造的な行動であるとともに、かなりのリスクを背負っていたことであろう。伊藤親子を講師に迎える環山楼の人々にとっても、とりわけ「寛政異学の禁」の発布以降において、大きな決断であったのではないだろうか。

また、環山楼の運営や教授法などについての文献は今のところ見出されていないが、今後見出される可能性もあり、非常に興味深い。知の連携・文化の連携の実践と、その背後にある武士だけでなく商人も学問や文化を通して何を掴もうとしたのかについて、一層の考察が求められる。

とりわけ興味深いのは、医学と農業学との関わりであろう。大坂の代表的町人学者で大物産家、本草学者であり画家でもあった木村兼葎堂^{けんかどう}などと八尾の町人学者との関係を通して、知のネットワークとそれを推進させた八尾（河内）の特質を浮き彫りにできるであろう（山中 2012）。

²⁹ 西岡氏の師匠である川喜田二郎氏（大阪市立大学）や中尾佐助氏（大阪府立大学）との関わり、さらには京都大学生物誌研究会、今西錦司氏による「ブータン計画」などについては川喜田(1992)の巻末・座談会に詳しい。

それに先立つ江戸時代の中期における農業研究も重要な意味をもっている。河内木綿を栽培し、その復活・研究に努力したヒトについては、大学と民間との研究の在り様や個人および団体の橋渡しのプロセスについて学ぶことができるし、八尾の郷土食を保存・革新についても、日常生活でもっとも重要な生命の維持・再生産である食に関する保存の知識、体への影響など食に関する様々な知は風習のなかに受け継がれ、日々の経験による革新の積み重ねが見て取れるであろう。

また、大正時代の能率増進運動への関心の高まりについても、大阪が他の都市と比べても先駆的であることも、農業研究の歴史と合わせて考慮する必要がある。すなわち、三河木綿と河内木綿との関係、明治における紡績業の発展、そして、紡績生産システムから自動車などの生産システム（トヨタ生産方式、JIT）への発展プロセスのルーツとして、木綿生産が重要な意味を持つことも想起される（岡野 1995, 2002, 2003）。

また、小学校教育の新たな可能性については久宝寺小学校の試みが語られている。地域住民を巻き込んだカリキュラムの策定（小学校2年から6年までの）は全国的に見ても高く評価できる。「教育とは『共育』であり『協育』である」という言葉はまさしく至言である。

（3）「場・みちと創造性」

久宝寺寺内町のまちづくりについては、「まちを愛する心づくり」の重要性が主張され、具体的な取り組みがなされている。地域間、世代間の垣根を越えたネットワークづくりのための取り組み（灯籠まつり）も注目できるのであり、「まちがひとをつくり、ひとがまちをつくる」こと、そして、幼いときの「心づくり」の重要性を示されている。

さらに、久宝寺寺内町と八尾寺内町とを結ぶ「お逮夜市」の伝統を復興した事例も重要である。様々な地域からの商人の役割と生業との関係、宗教行事としてのお逮夜からそれを「差し引いた」市への変容、ハレとケの峻別とそれに見合った生活風習など、残していくべきものは多い。

シルクロードを経由して中国から入ってきた散楽高安山麓で発祥したといわれる高安能についても、様々な意味合いが隠されていると思われる。高安と京都との関係もその一つであり、京都言葉との親和性をよく耳にする。地域毎に神社が存在し、高安流の様々な能集団が存在したようで

あり、今後の研究が待たれるところである。

大和川付け替えについては、最近でもシンポジウムなどが頻繁に開かれており、多くの関心を持たれている。付け替えによって変わった部分だけでなく、付け替えられた後でも変わっていないものの存在も重要であろう。

講念仏踊りが生まれる契機として、この大和川の付け替え後の日照りによる干ばつから逃れるため、弓削村の庄屋・西村市郎右衛門がお上に背いて水を通したことで処刑されたが、これを悲しんだ村人が念仏を唱えていたところを通りかかった僧が踊りを教えたことといわれる。文化の道と念仏の場との交わりによって講念仏踊りが生まれたともいえるが、まだ明らかにされていないコト、あるいは言説には上せないモノが埋め込まれていると考えられよう。

（4）「集り・交流と創造性」

これまで伝承されてきたものを復活し、後世に伝えるという作業は見えない様々なものを創造する。講念仏踊りもその重要なものの一つであり、また、本書の第Ⅱ部に収めた常光寺の片岡英逸前住職による『流し節正調河内音頭考』も重要な意味が隠されているといえる。

「八老劇団」は、いまほど高齢社会の問題が深刻でなかった1973年に立ち上げられたものであるが、目的とされる「痴呆予防」からは大きくかけ離れた試みであろう。自らを「いちびり」称して邁進する姿こそ、八尾の創造性を示すものであろう。

「高安城を探る会」の草創期から探索を始め、高安城倉庫礎石群の発見に至るストーリーは、非常に参考になる。発見のために一役かった「探索棒」そして「トレンチ棒」は発見のシンボルとして重要な役割を担ったに違いない。

「やお文化協会」による郷土誌『河内どんこう』の発行は、八尾のヒト・モノ・コトをまとめ、その関係性を高める重要な「エンジン」であろう。いかなる団体でも、設立に尽力したヒトが存在し、そのヒトを支えた人々がいる。やお文化協会が推進したのは「モノを調べ、書き、躰ける」ことにつながるものであったといえる。

6. おわりに

以上、八尾の道・下水・水路、河内音頭を事例として、都市の創造性についての検討してきた。八尾の歴史的推移の奥には、河内湾・河内潟、河内湖時代の重なりと変化、

街道と一般道、古道と新道などの関係性、そのプロセスにおける神木の伐採など、様々な文化編集の在り様、多様な見えないアクターの関係性の変化などが埋め込まれていることがわかる。

この研究プロセスになかで、八尾と大阪との文化における関係性、古代大阪の中心であった河内文化の意味と豊かさなどを感じることができた。大和川は付け替えられたとはいえ、旧の流路は厳然として存在し、人々の暮らしに今も大きな影響を及ぼしているのである。

さらに、近江文化や大和文化との影響、河内文化の他の地域への広がりや普及の在り様などを学んだ。河内文化がどこから来たか、他の地域にいかんして普及していったか、などはもちろん重要であるが、自分たちの文化がどこで受け入れられ、どの部分が受け入れられていないのか、その理由を明らかにしながら、自分たちの拠り所を再認識し、再構築していくことが可能であろう。生活道路の検討から「八尾の軸」が浮き彫りになるのであり、八尾（河内）の

アーキタイプ（原型・源流）といったものをあらためてイメージすることができよう。

都市の創造性を「デザインする」ためには、都市に関わる人々をモチベートする信頼をいかにして構築するかが重要であり、都市において本来持つべき包容力・バランス・俊敏性を確保する総合的なマネジメントシステムが求められる。

本稿のメッセージのコアは「いのち（への共感）」である。創造性の源泉もここに看取できよう。包容力・バランス・俊敏性もその中にあり、3つの概念は相互に浸透しており、河内音頭はその典型例である。

フェスティバルを維持し、時代を先取りするモノに変容させる力、地域間のネットワークを感じ取る「こころ」のグローバルな共有、ヒト・モノ・コト・道の関係性の「共創」が都市創造性の源泉である。

参考文献

- 朝倉喬司(1978)「大阪の闇をゆさぶる河内音頭のリズム：いまなおホットなその生命力のしぶとさ」『ニュー・ミュージック・マガジン』10月。
- 朝倉喬司(1997)「盆踊り唄、口説」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 伊丹敬之(1991)『グローバル・マネジメント：地球時代の日本企業』日本放送協会。
- 近江俊秀(2013)「大和と河内の峠道」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店、所収)。
- 岡 利次郎(1987)『リズム考：東と西の文化の源流』草葉社。
- 岡野 浩(2003)『グローバル戦略会計：製品開発マネジメントの国際比較』有斐閣。
- 岡野 浩(2009)「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」(佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、所収)。
- 岡野 浩(2012a)「都市創造性と文化編集」岡野 浩・三島啓子編『都市創造性プラットフォームとしてのアートギャラリー：大阪空堀をめぐる文化ネットワークの形成』大阪市立大学都市研究プラザ。
- 岡野 浩(2012b)「原価企画の文化史的含意：動詞化・述語的包摂による文化編集の視点から」『会計』第182巻第4号。
- 岡野 浩ほか(2009)「パブリックセクターにおける戦略的業務革新」富澤修身編『大阪新生へのビジネス・イノベーション：大阪モデル構築への提言』ミネルヴァ書房、2009年。
- 鎌田東二(2010)『モノ学・感覚価値論』晃洋書房。
- 川喜田二郎(1992)『鳥葬の国：秘境ヒマラヤ探検記』講談社（初版1973年）。
- 河内家菊水丸(2001)『河内家菊水丸の新聞詠み河内音頭』集英社。
- クラークス,L.(1971)『リズムの本質』(杉浦實訳)みすず書房（原著出版年1923年）
- クレストン,P.(1968)『リズムの原理』(中川弘一訳)音楽之友社。
- 佐々木幹郎(1997)「河内音頭」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 佐々木雅幸(2001)『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』岩波書店。

- 佐々木雅幸・水内俊雄(2009)『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社。
- 菅 豊(2013)『「新しい野の学問」の時代へ：知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店。
- ド・セルトー, M. (1987) 『日常実践のポイエティック』(山田登世子訳)、国文社。
- 野中郁次郎(1990)『知識創造の経営：日本企業のエピステモロジー』日本経済新聞社。
- 兵藤裕己(1997)「口承文学総論」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 藤原成一(2008)『かさねの作法：日本文化を読みかえる』法蔵館。
- 益田晴恵(2011)『都市の水資源と地下水の未来』京都大学学術出版会。
- 宮本要太郎(2009)「聖なる都市のコスモロジー：儀礼都市から祝祭都市へ」木岡伸夫編『都市の風土学』ミネルヴァ書房、2009年。
- 村松貞次郎(1973)『大工道具の歴史』岩波書店。
- ロジャース, R. (2002)『都市：この小さな惑星の』鹿島出版会。
- 八尾市(1962)『八尾市時報』241号(1962年9月)八尾市。
- 八尾市(1963)『八尾市時報』246号(1963年2月)八尾市。
- 八尾市土木部(2013)『八尾市の下水道』八尾市。
- 八尾市防災会議(2004)『八尾市地域防災計画』(Ⅲ)資料編、八尾市。
- 山折哲雄(1983)『神と仏：日本人の宗教観』講談社。
- 山中浩之(2012)「近世の医家と学芸」『文化財講演会記録集』(八尾市文化財紀要17)八尾市教育委員会文化財課。
- Amin, A. and P. Cohendet (2007) *Architectures of Knowledge*, Oxford: Oxford University Press.
- Barney, J.B.(2002) *Gaining & Sustaining Competitive Advantages*, 2nd ed., NY: Pearson. (岡田正大訳『企業戦略論：競争優位の構築と持続』ダイヤモンド社。)
- Bastien, D.T. and T. J. Hostager (1992) “Cooperation as Communicative Accomplishment: A Symbolic Interaction Analysis of an Improvised Jazz Concert,” *Communication Studies*, 43.
- Bradford, N. (2004) “Creative Cities: Structures Policy Dialogue Background,” *Background paper F/46 Family Network*, Canadian Policy Research Networks Inc., August 2004.
- Brown, S.L. & K.M. Eisenhardt (1998) *Competing on the Edge: Strategy as Structured Chaos*,” Boston: Harvard Business School Press. (佐藤洋一訳『変化に勝つ経営：コンピューティング・オン・ザ・エッジ戦略とは』トッパン、1999年。)
- City of Vancouver (2005) “Policy Report: Social Development,” May 10, 2005, City of Vancouver.
- Colantonio, A. (2009) “Social Sustainability: Linking Research to Policy and Practice,” Working paper, Oxford Brookes University.
- Crossan, M. and M. Sorrenti (1996) *Making Sense of Improvisation*, unpublished manuscript, University of West Ontario.
- Eisenhardt, K.M. & S.L.Brown (1999) “Patching: Restitching Business Portfolios in Dynamic Markets,” *Harvard Business Review*, May-June 1999. (DIAMOND ハーバードビジネスレビュー編集部訳『「選択と集中」の戦略』ダイヤモンド社、2003年。)
- Eisenhardt, K.M. & J.A. Martin (2000) “Dynamic Capabilities: What are they?” *Strategic Management Journal*, Vol.21, No.10-11, October.
- Harvey, D. (2009) *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*. New York: Columbia University Press, 2009 大屋定晴ほか訳『コスモポリタリズム』作品社、2013年。
- Kanter, R.M. (1989) *When Giants Learn to Dance*, NY: Simon & Schuster.
- Litting, B. & E. Grief3ler (2005) “Social Sustainability: A Catchword Between Political Pragmatism and Social Theory,” *International*

- Miner, A.J., C.Moorman, C. Bassoff (1996) *Organizational Improvisation in New Product Development*, unpublished manuscript, University of Wisconsin, Madison, WI.
- Okano, H. (2010a) "Building Business for Poverty through Cultural Creativity," *The 8th Academic Forum on Empowering Urban Culture and Creativity; Art, Publicity, and Transformation*, Chulalongkorn University (Thailand), March 9-10, 2010.
- Okano, H. (2010b), "Building Businesses for Poverty Through Cultural Creativity: BOP (Bottom of the Pyramid) and Social Sustainability," *Proceeding of CCS Workshop at University of Manchester*, 9 November, 2010.
- Okano, H. & D. Samson (2010) "Cultural Urban Branding and Creative Cities: A Theoretical Framework for Promoting Creativity in the Public Space," *Cities*, Supplement No.1, June 2010.
- Polese, M. & R. Stren (2000) *Social Sustainability of Cities*, Toronto: University of Toronto Press.
- Sayles, L. (1964) *Managerial Behaviour: Administration in Complex Organization*, NY: McGraw-Hill.
- Teece, D.J., G. Pisano, & A. Shuen (1997) "Dynamic Capabilities & Strategic Management," *Strategic Management Journal*, Vol.18, No.7, December.
- Woodman, R.W., Sawyer, J.E. and R.W. Griffin (1993) "Toward a Theory of Organizational Creativity," *Academy of Management Review*, 18(2).

第27章

郷土史のすすめ

Guidance for Studying Local History

棚橋 利光 (Tanahashi Toshimitsu)

現代の八尾を知るためには、その一つの方法としては、八尾の郷土史を勉強することがよい。どの町も、1000年、2000年と人が住み続けて、現在に至ったものである。どの時点で途切れるというものでもない。その歴史の積み重ねが、現在の町の性格となり、特徴となっている。

八尾で歴史を勉強する方法はいくつもある。多くの人と会話し、その場所を見ながら、歴史への興味を深め、歴史知識を深めていくことが、まず第一歩ではなかろうか。

八尾には歴史を知る公共の資料館がいくつもある。「八尾市立歴史民俗資料館」は近鉄服部川駅が最寄り駅である。近くには古墳時代の前方公園墳の心合寺山古墳（全長160メートル、中河内随一の大きさを誇る）があり、その見学施設として「しおんじやま古墳学習館」がある。近鉄八尾駅が最寄りの施設には「埋蔵文化財調査センター」がある。近鉄久宝寺口駅が最寄りの施設には「久宝寺まちなみセンター」がある。JR八尾駅近くには「安中新田会所跡旧植田家住宅」がある。それぞれの施設には展示場があり、学芸員やボランティアの説明者がいる。展示解説書も豊富で、講演会、説明会も常時行われている。

歴史を楽しく共に知ろうと集まって活動している会もある。歴史民俗資料館の関係では「やお歴史民友の会」がある。もともと歴史民俗資料館の友の会として平成3年に出発した会であるが、資料館の運営が市の直営から指定管理者に委託されるようになって、資料館の直属から離れ、市民団体となって活動している。しかし、資料館の指導も受け、資料館の展示・講演会には積極的に参加している。郊外学習としてバス見学会をし、ハイキングも行っている。部会活動として古文書部会、石造物部会があり、資料館学芸員の指導を受けて古文書を読み、また市内各所の神社寺院などを訪ねて、灯籠や石碑、狛犬や道標の見学、拓本取りなどを行ってきた。これまでに古文書では、江戸時代の淀藩領高安郡の大東家文書を解説し、『郡村役用留』を12冊発

行している。古文書の読み方を大勢で楽しく学びながらの勉強であるので、自然と仲間ができ、楽しい郷土史の勉強会となっている。石造物部会では『信貴山の道標』、『八尾の地蔵さん』、『八尾の灯籠』を冊子にまとめている。

郷土史をとともに学ぶ会には「八尾ふるさと歴史学校」がある。この会は「環境アニメイティッドやお」による活動の一つで、毎月1回、テーマを決め、市内各所を見学して歩いている。「河内街道を歩く」や「道鏡・由義宮伝承地を歩く」とか、「河内西国霊場をめぐる」とか、毎回40～50名が集まり、世話役の人が講師となって、案内している。

八尾市認定観光ボランティアの会が主催する講習会に参加するものの一つの勉強の仕方である。観光ボランティアとして八尾市の見学地を案内しているボランティア先輩の指導を受け、案内役の練習をするのも郷土史の勉強になる。

NPO法人やお文化協会が主催する「やお検定」試験を受験してみるのも、八尾市の現在、過去を知るよい機会となる。やお文化協会では郷土誌『河内どんこう』を発行していて、最近号は100号まで来ている。歴史あり民俗あり、毎号、郷土史を勉強した人、歴史研究者の人、資料館の人、埋蔵文化財の発掘担当者の人、小説家を目指している人などが毎号執筆しておられ、郷土史のいろいろな話題を見ることができる。目録や索引編もあるので、歴史事項を知るのが便利である。文化協会発行の『八尾の史跡』もある。

八尾市の歴史を通史として読むのには、八尾市役所発行の『八尾市史 本編（前近代）』、『八尾・柏原の歴史』などがあるので、図書館を利用してほしい。今東光の小説には河内の歴史、八尾の歴史を題材にしたものも多くあるので、興味が湧いてくる。

その他、八尾市の市民大学講座、大阪経済法科大学の河内学講座なども市民が受講できるので、その機会を利用してほしい。江戸時代の学塾環山楼の伝統を受け持つ環山楼市民塾も行われたこともあり、講義内容が出版されている。

八尾は歴史と伝統のあるまちとして、そこに住む人達が郷土を愛し伝統を守り続け、活動を続けてきたところである。歴史を学び伝統を守りながら新しいコミュニティづくりを進めていこうとして活動を続けている各種団体も数多く存在している。やお文化協会はこれらの活動を推進するためのお世話役として昭和50年に設立され、多くの方々や企業のご支援を得て今日まで活動が続いている。

岡野教授がこのような土地柄の八尾にスポットを当て、都市の創造性と市民の文化活動についての参考資料としてレポート集を纏めて頂いた。お示し頂いたテーマを参考にして、活動をしておられる方々をお願いしたところ、皆様が快くお引き受け下さり有り難く思っている。本研究レポートは、八尾の歴史、伝統と市民の文化活動について原稿を書いて頂いたが、時間的な制約もあり、棚橋利光氏を中心にして限られた方に依頼したため、原稿を頂けなかった方が多くおいでであることはいまでもないが、次の機会にお願いすることでご容赦頂きたい。

八尾市では市民が主体となって「まちづくり」を進めることを以前から取り組んでいるが、この活動は地道で粘り強く継続していくことが求められるものであり、即効的な効果が求めにくく、活動が評価されにくいのも事実である。

今回、レポートシリーズとして纏めて頂き、広範な視点から「八尾の都市創造性」について論考して下さることに對しては、敬意を表し、感謝申し上げますところである。

八尾の都市創造性については、棚橋利光氏が記述しておられるように、八尾市がおかれた歴史的、地理的条件が大きく作用していることがわかるが、八尾に住む人達の努力、包容力、社会性も忘れてはならない要素であると思う。

八尾市民によるこの研究書が、「市民知」を生み出すメカニズムという考え方、グローバルな視点に立った「都市創造」の参考資料としてお役に立つことが出来れば幸いである。そして八尾における「まちづくり」が多くの方々の賛同とご協力によって更に進められ、そのことが「都市創造」の広がりにつながることを願っている。

筆者紹介 Contributors

片岡英逸 (Kataoka Eiitsu) 八尾地藏尊 常光寺・前住職

小林俊王 (Kobayashi Toshio) 前久宝寺小学校・校長、現西山本小学校・校長

坂上弘子 (Sakajo Hiroko) やお文化協会・理事、大阪府文化財愛護推進委員

澤田参子 (Sawada Sanko) 奈良文化女子短期大学名誉教授 (調理学・食文化)

志賀山勢州 (Shigayama Seshu) 舞踏家、八尾文化連盟・副会長、やお文化協会・理事

新福泰雅 (Shimpuku Hiromasa) やお市民活動ネットワーク・理事

高垣匡往 (Takagaki Masayuki) 久宝寺寺内町まちづくり推進協議会・前会長

西辻 豊 (Nishitsuji Yutaka) やお文化協会・理事長、前八尾市長

西野民夫 (Nishino Tamio) やお文化協会・理事

棚橋利光 (Tanahashi Toshimitsu) やお文化協会・理事、『河内どんこう』編集委員長、元八尾市立歴史民俗資料館長

浜田澄子 (Hamada Sumiko) 八老劇団主宰

松井幸一 (Matsui Koichi) 八尾芸能倶楽部 (八尾まつり家会) 代表

松江信一 (Matsue Shin'ichi) 『河内どんこう』編集委員

山下 彬 (Yamashita Akira) 曙川東地区福祉委員会・委員長

渡瀬弘美 (Watase Hiromi) やお文化協会・事務担当

岡野 浩 (Okano Hiroshi) 大阪市立大学都市研究プラザ副所長、教授、経営学研究科・商学部 (併任) 教授

(表紙デザイン)

河村立司 (Tatsushi Kawamura) やお文化協会・参与

大阪市立大学 都市研究プラザ レポートシリーズ No.28

『大阪・八尾の都市創造性：市民知による文化実践分析と文化編集』

URP Report Series No. 28

Urban Creativity in City of Yao, Osaka:

Networking Analysis on the Citizen's Wisdom and Cultural Editing Framework

Edited by Hiroshi Okano (URP) and Yutaka Nishitsuji (Yao Culture Association)

Published by Urban Research Plaza (URP), Osaka City University

3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka 558-8585 JAPAN

発行日：2013年9月30日 30 Sept. 2013

編集：岡野 浩・西辻 豊

発行：大阪市立大学 都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL: (+81) (0)6-6605-2207

FAX: (+81) (0)6-6605-2069

